隱れ家のやうにいたしては、種々の調物を致したり考へ事をいたしたり、天下に誰一人此家を知つてるものは無いのだから全然氣が落着く、實際庄兵衞此頃は一歩を出れば四方八方氣を使ふ事ばかりなのを、此家では全く氣が休まつて、暢氣で、始めて吾體軀に歸つた氣になるのでムいます。

安心して氣にゆとりが出ると、自然に眠くなる、すると一二時間ゴロリとやるが、さて此に乘ずるのが三田夫人、寢ても覺めても相場の材料を知りたい〳〵と思つてゐるのに、庄兵衞此頃は悉皆無言になつて、何一つ聞かしてくれず、無理に聞けば云ふことは云ふが、何だか宜加減の嘘を云ふらしいので當にならない、彼是れ夫人は惡い心を起しては、庄兵衞の眠てゐるのに乘じて手を其衣嚢へ差入れて、手帳だの其他書いたものを取出して、何か秘密の材料もやと探してみる、或日のこと、如此して取出した書類のうちから、到頭發見たのは庄兵衞昨今非常な苦境に沈淪してゐる事實、夫人は好いものを發見たが、同時に又大に驚いたのでございます。

或晩夫人が例のやうに手を差入れて手帳を取出さうとかゝつたところが、之はしたり庄兵衞目を覺して、其體を見るや否恰かも掏摸でも捉まへたやうに、平掌でもつて夫人を毆りつけた、只さへ憂慮で癇癪が起つてゐるところ、八ッ當りに毆りつけたのだから、痛いの痛くないのどころでない、併し夫人は自分が惡いのだから何にも云へない、庄兵衞は聊か溜飲の虫を下げたが、それは夫で濟んで了ひました。

十五日の受渡には、夫人は一萬圓許りの損になつたから、最早默つては居られない、如何したらば宜だらうと、樣々な苦心の結果、こりやア一つ矢野に相談してみやうと、決心を致して直ぐと出かけた。

夫人に意見を訊ねられた矢野龍吉、

『左樣さね、御考へは御道理のやうに思へるですね、郡代の方へ入來しつたら宜でせう、行つて逢つて御覽なさい、逢つて而して貴女と約束があるのだから其約束の通り貴女から郡代の利益になるやうな土產話をして、而して其返禮的に好い智慧をつけて貰つたら可ござんせう。』

夫人が訪ねた日には、郡代は非常な不機嫌であつたが、それは前日萬國株が又騰つたからでございます、箆棒未だ騰つてるッ、執念の深い相良奴、彼奴何時までも往生せぬでゐる、お蔭で非常な金を寢かして了つた、此分では未だ騰るかも知れぬ、此三十日の受渡日まで下げずに進んで行くだらうが、忌々しい飛んでもない奴、此んな愚人を相手にするのは止めにして金を役に立つ方へ使ひたいが、しかし斯うなつては退くにも退かれぬと、今迄愚痴などは飜したことの無い郡代、此度は大に手挺ずつてをります、併し一體此度の彼奴の行法が判然せぬ、賣買の仕方が一向取とめがない、彼奴が買つてるのは誰の爲だらう、無論自分のも有だらうが誰かの爲にしてゐるのでなければならぬ、眞面目な客の爲に行つてるのか、それとも又萬國の爲にか？　種々な報道が諸方からやつてくるが、何も突留め

たことが判らない、忌々しい古狸め、こんなに愚にされたことは無いと、郡代は大ブツ〳〵、側に居るものへ當り散らす、叱り付ける、出入の才取りや御用聞連もホウ〳〵の體で歸つてゆくといふ、頭腦明晰論理堅實な郡代が珍らしい此度の迷ひかた、初めての不興でございます。

今日も氣がモヤ〳〵して溜らないところだから、夫人が入つて來たのを見ても碌な挨拶せず慳貪と、

『フン、三田さんか、私今日は女なんかに構つてる時間は無い……。』

ケンもホロロ、夫人は二の句が續げない、如彼云はう如此云はうと心に思つてゐたことも出なくなつて、それのみか向方の利益になる事を此方から先へ打明けて了つた、

『郡代さん、萬國銀行も餘り自分の行の株の買ばかりやつた爲に到頭御金が詰つて、融通手形を發して外國で割引したり、無理算段をして、買の戰爭を續けるやうになつたさうでございますが、貴方御存じでいらッしやいますの？』

十三

吉い事を聞いたとは思つたが、郡代は故意と平氣を粧つて、死んでるやうな眼容をして、ブツ〳〵と小言らしく、

『そんな事は本當ぢやございません。』

『何です本當で無いんですッて、だつて貴方、現在私は私の耳で聞き私の眼で見たのでございますもの。』

夫人は憤然になつて主張つて、何處迄も說伏せやうといたす、無論本名は判らない、名義人の名で發した手形を自分は確に見た、其名義人は誰々で、それから手形を割引した維也納フランクフォート伯林等の銀行は何銀行と何銀行だと、悉皆名前までも指示して、其事の確なのは貴方の取引先に御問合せなさつても直ぐ譯る、自分は決して阿諛的の御爲ごかしを云ふのでない、猶は萬國銀行は只々自分の株の相場引上の目的の爲に吾株を買つてをつて、之が爲に既に一億圓近くを放出したといふことだと、自分が庄兵衞の衣嚢中の手帳から盜み見た事實を其まゝ、功名顏に述立てた。

郡代は夫人の問はず語で敵の秘密を明かにする事が出來て、內實は好都合と、大變に喜んだが、併し外面には何處迄も、其樣なことは何でも宜いと云はぬばかり、其癖夫人が喋つてる內から、ハヤ最早夫人の話に基いて胸中に成算を立てゝ、一分間と經たぬ內に夫々注文を發し命令を與へる支度をチヤンと心に構へて了つた、其の素疾いことゝいつたら誠に驚くばかりだ、報道も此樣な溝泥の中から出るのが反つて確乎、最早斯う聞けば勝利は此方のもの、悧巧のやうでも大愚な相良、味方の婦女の口から大秘計が洩される、婦人に賣られてゐるのを知らぬのかと、三郎右衞門腹の裡でニタリ〳〵。

云はせる丈け夫人に云はせてゐたが、纔と辯舌が終了になつたので、郡代は始めて顏を擧げて、其乾からびた巨な眼で夫人を見ながら、

『解りました、解りましたが、私はそれを伺つたッて何にもならない、只承はる丈でございます。』

何處迄も空惚けてゐる郡代、此方に夫人は意外の意外、嘸ぞ喜んで恩に被るだらうと思つたのが此冷淡なので、腹が立つて溜らない、漸くに口を開いて、

『だつて郡代さん貴方は弱氣でいらッしやるぢやございませんか。』

『誰が私は弱氣だと貴女に告ひましたか、私は取引所の場などへは一遍だつて出たことはありやせんし、相場など行つたこともございません、上らうと下らうと、其樣な事は構ひません。』

郡代の云ひかたが如何にも無心の、虛を包んでゐぬやうなので、夫人は只呆氣に取られ煙に卷かれて、或はそれが眞實かとも思つて見た、何しろ郡代三郎右衞門、千軍萬馬到るところ世界的金權を振つてゐる御大將、こんな赤兒みたやうな婦女子の手に乘ることは致しません、又悧巧なやうでも夫人は世間見ず、郡代は相手を頭から呑んでかゝつてゐるので、

『ぢや三田さん、今日は私は大變忙がしいところだから、外に承はつて利益になる事が無いのなら、これで御免を……。』

云ひも果ず夫人を追やるやうにして、入口の方へ立つて行く、此に於て三田夫人、いくら何でも默つて居られない、滿面に怒氣を含んで、

『郡代さん、過日の御言葉もあり、かたゞく私は貴方を御信用申して、今日私の方から先へ貴方の御利益になる事を申上げたのでございます、それを貴方は聞ッ放しにしておいて、而して歸れとは、そりやア失禮ながら御違約ぢやございませんか、貴方は過日私に御約束をなさいました、私が何か貴方に御役に立つ材料を持つて來て話をすれば夫に對して貴方も私に利益になる意見を聞かせると、然う貴方仰有つたぢやございませんか、それを……。』

夫人が此まで云ふのを遮るやうにして、郡代は起上つた、未だ曾て笑つたことの無い彼は、此の時

ニヤリと顏に微笑を浮べて、此可愛らしい顏をした若い女の、騙されたので憤然になつて怒るのを、心の裡に面白く思ひながら、

『意見を聽かせろ？　私喜んで意見を述べます、三田さん、よく御聽なさい、私の意見は斯うだ、相場などなさるな、決して相場をなさるな、婦女の癖に相場などをするといふのは元來甚だ醜い事だ、甚だ見ッともない事だから御止しなさいッ。』

夫人はプリ〳〵怒つて歸つて了つた。

待兼ねた郡代は卽座と二人の子息と婿の三人を室へ呼つけて、早速明日場で行ふ大行動に就いて協議をいたして、谷田部を初として出入の仲買へ出す註文を決めました、其決めた手筈といふのは至つて簡單としたもの、卽ち今迄は萬國銀行や相良の眞の態度が判らなかつたから思切つて危險を踏むことが出來なかつたが、三田夫人の御蔭で先方の內情が悉皆判つた今日、斷然たる作戰が行へる、それは如何するのかといふと、肝を潰すやうな賣を行つて一擧にして硬派を屠滅して了ふことで、之が爲には郡代、有らん限りの資金を拂き出しても厭はない、敵の弱點否違法手段を逐一發いて、相良をして悉く死地に陷らしめる、と斯ういふのでございます、ア、矢張論理が勝だ、虛の相場を無理に出さうと思つても夫れはいけるものではない、其樣な株は終局には倒れるのは定つてゐる……と三郎右衞門は得意顏。

十四

此日の夕方でございました相良庄兵衞段々市場の形勢を考へて見ると、どうも斯う危機が逼つてきてゐるやうに感じられる、如斯默つて弱氣の跋扈に任しておくと、自分の位地が破滅になる、中々凝乎としては居られないから、此方から起つて一大打擊を與へて、呼吸の音を止めねばならぬ、が全く市場に打勝つてそれを此方の有にするには、先般から考へてゐる二億の資金が要るわけだがと、庄兵衞相變らず大袈裟な事を考へながら、何しろ一つ醍醐の家へ行つて考へを訊いてみやうと、五時を打つと直ぐ出かけた。

醍醐久一郎は相變らず皇族でも仕みさうな贅澤な家を搆へてをりますが、そんな贅澤は如何して仕てゐるかといふと、實は皆相場で儲けた身上、だから若し萬一相場が狂ふと、身代も悉皆狂ふ、少しも當になるものではございません、第一彼は萬國株で大分の儲をいたしたが、矢張强氣で、此頃一寸下りは下つたが、何豈値は又屹度戻ると、自分も信じ人にも云つてるのでございます、斯ういふ風に相良の御蔭で一寸金も出來たのであるからして、表面はどこ迄も相良を信じ銀行を信じ、株の相場を高くすることに務め、決して賣つたことはございません、が併し元來銀行が確實の、相良の人物が堅いのと、敬服してゐる譯でなく、儲けさへすれば宜いのだから、一朝自分に不利な事がありさうに感

じられゝば、直と敵の軍門に馳參ずることは、何とも思つて居ぬのでございます。

さて相良がやつて參つたが、醍醐は相變らずの愛想を振播て、例時ながら庄兵衛の非常な精力や根氣のこと、取引所で思切つて强氣に出て愉快な相場をすること、萬國銀行の狀態が良好であるとなどを、酷く感心した風をして褒立て、自分は出來る丈けの力を添へやう、宜しい明日場で誓つて一緒に行動しやうと、固く約束をいたしました、言ふ迄もない自分は萬國株には大變な利害を有つてゐるから、之から直に自分の仲買土井のところへ行つて消息を聽取り、他の友人等にも會つて利益になる話を蒐め、彼是れ合同して此際に處したなら、一億圓位の元資は卽座に出來やう、夫丈けあれば高値を持こたへられるどころか又以前の相場に返すことも難くはあるまいと、自分の考案までも開陳した、庄兵衛は大喜び、これなら今度も大勝利は必定、では斯ういふ方略にしてと、これから明日の場で執る軍略の打合せを致しました、先づ立會の初刻には突如と大戰鬪を挑まずに、弱氣連に安心させて、之を誘き出す爲にチョコ〳〵した小糶合をしておく、而して故意と此方が負けて少し値を下げたところへ、醍醐と友人連が豐富なる軍資を懷中に、隊伍堂々と打つて出て、驀地に敵の陣地へ突貫して、弱氣連を一人餘さず息の音を止めて了ふ、骨折らずの屠殺、全くの潰滅、と兩人は爰に悉く手筈を定めて、勢込んだ握手をして、勝たぬ內から勝つた顏の、大元氣で別れました。

醍醐は相良を歸して、夫から一時間經つて、今夜は夜食を他家で食ふことになつてゐるから、衣服を着替へて出懸けやうとしてゐると、第二の來客を取次が知らしてきた、誰かと思ふと客は三田男爵夫人、夫人は郡代のところで殆んど愚にされ、氣がムシャクシャして、如何して可か判らなくなつたので、一つ醍醐に相談して見やうと、やつて參つたのでございます、夫人は一時醍醐にも關係があつたやうに云ふ人があるが、それは嘘で、只男女の間の極親しい友達であつたに過ぎぬのでございます。

通されて夫人は、之から醍醐に自分の憂慮を話し、郡代のところへ行つたことも其返事のことも話しましたが、間が惡いから自分の體の惡い事は云ひません、醍醐は聞いてカラ〳〵と笑つて、而して猶且揶揄つて脅かして心配させてやるのも面白いと、人の惡い醍醐、郡代の云ふことは本當かもしれぬ、全く人の噂は當にならぬから、用心が大事だなどと、宜加減な事をいふと、夫人は心配さうに、

『では私は賣らない方が宜いのでございませうか？』

『賣る？　何故ですか賣るなんて、そんな愚な事はありやしません、明日から世界は此方のものでさア、萬國は請合つて三千百圓にはなりますよ、そりや一時下ることもあるかもしれんが、マア確然と心を定めて居て御覽なさい、大引相場は屹度上等相場ですから、私は外に最早貴女に申上げる言はありません。』

夫人が此家を辭して行つたので、醍醐いよ〳〵衣服を着替へて、出懸やうとしてゐると、又もや誰

か――第三番目の客來と見えて、案内を乞ふ呼鈴の音が聞えた。

十五

又誰かやつてきた、イヤ今度は最早斷らう、出損なつたら大變と、取次が知らせに來るのを待つてゐると、來て差出した名刺は仲買土井、土井ぢやア逢はなければならないと、直に居間へ通させた、土井は何か云出しかけたが、側に取次と女中が居るので躊躇の氣色が見えたので、醍醐は二人とも彼方へやつて、自身で鏡の前に立つて衣服を着替ながら、土井の談話を聽いてゐると、土井は初めて遠慮がなくなつたといふ容子をして、

『大將如何です、今日私が上つたのは他でもございません、立入つた御話ですが、外の方でないから御耳に入れますが、實は御承知の私の義弟の谷田部が親切に私に知らしてくれた事、其話に由りますと、明日の場で郡代と其一味が聯合して、萬國に最後の大打擊を與へやうと魂膽を碎いてゐるといふ事でございます、ツマリ有ッ丈けの所有株を市場へさらけ出して、賣崩さうといふ計畫、谷田部は最早其注文を受取つてをるといふことで……。』

心中悉く驚いた醍醐、顏色を急に眞蒼にして只、

『フウ。』

とばかり、土井は續けて、

『私は强氣の客を大分有つてをりますのでね、左樣金額にしたら千五百萬はありませう、いくら注文だからつて默つて居ちや大變ですから、今車で飛んで步行き同つて、正直に賣買をしてゐる客筋へ其事を知らしてゐるところなのです、私の爲る事は或は間違つてるかも知れませんが、私は好意でもつて客に對してゐる積りです……。』

醍醐は又、

『フム。』

とばかり、

『でねエ醍醐さん、貴方は失禮ながら金の御用意なしに買つてお在なさるのでござんせうから、證據金の御準備を願ふなり、又は今の私の談話を御考へになつて、御注文を全く御取消になるなり、此際どつちとも御定を願ひたいので。』

醍醐は一ト聲叫んだ、

『君は有難い、土井君、僕は倒れかゝつてる家に留まつて殉死などする其樣な馬鹿正直は守らんよ、君の說に從つて買は止めだ、宜しい賣つてくれ給へ、君に買注文を出してある額は千枚近くあるだらうが宜しい、それは皆疾く賣つてくれ給へ、悉皆賣つてくれ給へ。』

醍醐久一郎、悉く方針を變改に及んだ。

土井はこれから他の客筋のところへも行かなければならぬと云ふので、醍醐は力を籠めて握手をしながら、

『有難う、君の御好意は僕決して忘れん、賣つてくれ給へ、宜しか、ドシ〳〵賣つてくれ給へ。』

此夜八時に開かれた夜の小立會で、恐慌は到頭火蓋を切つた、此小立會といふのは取引所の時間外に午後八時から伊太利大通りの帝劇横町の入口になつてゐる往來人道のところで立つのであるが、正式の立會でないから固より本當の免許仲買は出ません、只取引所以外の株屋連、それへ現物屋だの才取りだの呑屋だの其他素性の判らぬ相場師などが、誰彼となく集まつて、相對的賣買を行るので、野天の不規則な立會だから、秩序も制裁もなく、それで往來は全く塞がつて了ふといふ有樣、今夜は昨日非常に寒かつた後で、雨を有つて〻一體に曇つてる爲かして氣候が和かいので、人出が多く、集まつた數は約二千人もございませう、取引は中々盛なもので、中に最も手合の多いのは固より萬國株でございます、而して今日は彼方からも此方からも出るのは悉く賣聲ばかり、相場は看る〳〵下落いたした、サア風評は廣まる、心配は段々と殖えてくる、一體如何したんだらう、誰が賣始めたのだらう、こんな賣は今迄に出た事はないが、何か重大な意味があるのだらうと、斯うなると人氣だから、一犬虛を吠へ萬犬實を傳へて、買方は忽ちに賣方に變じて了ふ、八時から十時迄といふもの、立會の混亂は殆んど名狀が出來ない、諸人は歸つてからも相場熱で眠られまいと思はれるほどでございました。

翌日は非常に不愉快な天氣でございました、昨夜は間斷なしに霙交りの冷たい小雨が降つゞけ、それが凍る、今朝は市中到るところ雪解のやうにビシャ〳〵して、それに寒氣も強く、誠に可厭な天氣でございます、此天氣にも拘はらず、取引所は十二時半頃から何處も此處も早や人で充滿、場内は濡れた洋傘の滴や靴の泥などで一面に穢ない水溜のやうになつてをります、空は全然曇つてゐるから、場の天上は硝子張りになつてゐても場内は何となく陰氣で、物憂い感がいたします。

厭な風評が取沙汰されて人の頭腦が彷徨いてゐるところだから、誰も彼も場へ入るや否や眼を直ぐと萬國株の本人庄兵衞の方へやつて、その顏を凝視めて見る、庄兵衞は依然例の柱の下へ陣取つてるが、顏色を見るといふと平時の景氣の好い時と毫も異らない、矢張安心の色、我れと自分を信じてゐるらしうございます、彼は萬國株が前夕の小立會で三百圓方下落したのを知らぬではない、又恐ろしい危機が逼つて來てゐて、弱氣連が猛りたつて大々攻擊をしてくるといふ事も覺悟してゐるが、夫と同時に、自分の方にも整然と策戰計畫が調つてゐて、負けると見せて返り擊をやつて、又もや大勝利を此方の手にをさめる其積りでをりますので、卽ち前日醍醐と打合がしてあるから、大の安心をしてゐるのでございます、固より庄兵衞自身は今全くの無資產、否萬國銀行だつても其金庫は全くの空虛、

殆んど一圓銀貨一個すらもない程だが、夫にも拘はらず庄兵衛少しも勇氣を沮喪せずにやつてゐる。

さて彼の増嶋信平仲買は如何かといふと、増嶋は馬鹿に庄兵衛を信用したものと見えて、庄兵衛の言といふと何でもかでも宜く聽く、何百何千枚の注文を受けても、證據金一文すら要求しない、尤も醍醐が支持してゐることを庄兵衛は匂はしてはゐるのだが、増島は全く庄兵衛を信用しきつてゐるのでございます、庄兵衛と増島とは前日方略が整然と申合はしてあつて、今日場の初まりは餘り一度に相場を下げぬやうにして持ちこたへて、小糶合くらゐにしておいて、而して徐々加勢隊が現はれた時に、鬨聲を作つて、敵勢に割つて入つて、潰滅に歸せしめやうと、卽ち醍醐とも打合せた通りの手筈にしてあるのでございます、何しろ今日の賣買戰は天下別目の大戰だから、小ッぽけな策略は何にもならない、馬島も阪谷も、今日は秘密のチョコ〳〵したことは出來ません、公々然庄兵衛のところへ往つたり來たり命令を聽いたり、之を外廊下の場外に居る成瀨へ傳へたり、而して此時未だ仲買人溜室に居る増島へ傳へたりなどしてをります。

十六

一時に十分前、元田がやつて參つたが、元田は例の肝臟病の爲に昨夜通宵眠られぬので、日は蒼い厭な顏色をしてをります、自分の氣持から人を推量すると見えて、居合はせた山縣を捉へて、今日は誰の顏を見ても蒼い病人みたやうに見えると話をすると、例のガムシャラな山縣は笑つて答へて、

『そりや元田君君の事だよ病人なのは、諸人は頗るの元氣さ、愚圖々々云ふ奴は追拂つちまふさアハ、、、。』

山縣に云はせると諸人大層景氣が宜いが、實は然うではございません、天氣と共に誰彼一般、心配らしい風が場内を吹まはして、相場の好い時のやうな元氣な場面でない、動搖も陰弱で、人が場内を駈歩行くにも勢がない、大聲で叫ばずに秘密でチョコ〳〵話をする、宛然大病人でもある家内のやう、人數は平時と違ひはないが、靜かさは雲泥の違ひだ。

山縣は挑むやうな口吻で佐藤に訊く、

『佐藤君、君は默つたきりだね。』

すると元田が口を出して獨りでつぶやくやうに、

『左樣さ、矢張諸人と同じでさ、心配があるから何にも云はぬのでさア。』

全く元田の云ふ通りいつも喋る佐藤も今日は默つたきりで、それを人が又不思議にも思はずにをるのでございます。

が立者の相良庄兵衛の周圍には、人が一杯に立はだかつてる、殊に客連は不安心で堪らないから、何か一と言相良から勇氣をつける安心の言葉を聞きたいと、攻寄せてをります、後になつて氣が付い

た事だが、醍醐は此日全然姿を現はさない、由利も亦見えません、由利は定めて變改して、大木の從順な犬となつて了つたのでございませう、それから小部は銀行家連の一團の中央に立つて旨いところで鞘取をやつて損を避けやうと覘つてゐるらしく、福岡侯爵は場内を靜に運動してゐるが、谷田部へ買の注文を發すと同時に、一方同額の賣注文を増島へ發してあるから、何の道損をすることはあるまいと落付拂つてをりまする、庄兵衛は萬遍なく人々に言葉をかけてゐる中にも、瀬藤と毛利の慄く手先を固く握つて大丈夫安心と慰める、此兩人は口唇をふるはし眼までも曇らして、今日の成行を氣遣つてをりまする、庄兵衛は、餘り平氣でゐても反つて人に信用されまい小さいところへ心配して見せるのも一策と思つたから、故意と萎れて、偶々有つた少さな出來事を捉へて序のやうに話をした、

『御覽の通り私も實に落膽しました、貴方此寒さに庭男が少し怠けた爲に、私の大事にしてゐた椿を枯らされて了つて、實に殘念で堪りません……。』

庄兵衛は椿を枯したことを酷く殘念だといふ、椿一本枯したつて夫がどうなるものであらう、詰り其事は附けたりで、全くは彼れ内心に、今日は正しく萬國株に大打擊を受けるだらうと、恐怖と憂慮に堪へやらず、それを誤魔化すつもりの辯明をやつたので。

恰度此へ矢野が戻つてきたが、庄兵衛は呼止めて、矢野と日外三田夫人が馬車を武安町へ留めて相場をやつてるのを見たことを偶然考へ出して、此場合訊いてみた、

『矢野君、三田夫人は今日等も矢張武安町で、例の通り馬車の中で待構へてゐるだらうか？』

中音で矢野は答へて、

『然矣、屹度相場を持つてるでせう、だが夫人は大丈夫、貴方に背きッこはありやせんです、我々と同樣、一株だつて手離しやアしません。』

庄兵衛はこの矢野の言葉に非常の滿足、併し女などは勿論自分以外の人は當にならぬから、安心は出來ぬが、しかし此形勢で以て見ると、壽命は未だ〳〵あるらしい、第一背後に萬國銀行の株主といふものを控へてゐるし、正直な彼等老幼は、固く自分を信用してゐるから、大丈夫と見て宜いと、庄兵衛慢心熱にかぶれてゐるから、自分で都合の好い理屈を付けて、安心をしてをります。

十七

遂に一時が打つて、立會開始を報ずる鐘が鳴つたが、其鐘の響は滿場の人の頭上を掠つて、一種悲愴の音を感じさせました、増島は福本に何か命令けてゐたが急いで仕切内へ立戻る、福本は電信局の方へ駈けていつたが、自分も非常に激した容子、豫ても申述たる通り、福本は使用人の癖に自分勘定で相場を行つて、此頃から損ばかり續けてゐるので、併し何しろ大銀行の萬國銀行の事ではあり殊に今日は醍醐が出て決戰を助けると、先刻チラと聞取つたから、それなら失敗は萬々無いと、又もや買

に回つてるのでございます。

が本場内仲買連の不安は大變、何しろ近來市場は非常に膨脹して、今にも破裂しさうになつてゐるから、金融史にも書てある通り十年又は十五年に一度有るといふ其恐慌が今始まるのではあるまいかと、素人も商賣人も戰々恟々たる有樣、其不安の裡に今日の立會の幕が開いたのだから、急にドーッといふ人聲、見ると、増島は柵の一方に手を靠せかけて立つてゐるし、谷田部は反對の柵の前に立つて疾や既に叫聲を始めてをります。

『サア萬國賣つた二千八百圓、萬國二千八百ヤリ。』

二千八百圓は昨夜の小立會の引相場でございます、増島は之を打棄つておいてはズル〳〵下ると思つたから、初めから買人氣を見せて置いた方が宜からうと、場内を壓するやうな鋭い聲で怒鳴り立てる、

『二千八百圓、買はう、三百枚。』

これで寄付値段が二千八百と定つたが、此相場は中々保てるどころの氣配でない、四方八方から起るのはウリ聲ばかり、増島は一生懸命になつて三十分ばかり防戰したが、迚も力が及ばない、値段は下つてゆく一方、しかも非常の速度でございます、増島は場外から加勢氣配が出てくる積りで待構へてをつたのであるが、其氣配が見えないので、只不審で堪らない、一體成瀬は如何したらう、買注文を持つてくる約束になつてるのに、何を如何してゐるだらうと、心も心ならずでゐたが、それは持つて來ない筈、増島が後になつて聞いたことだが、成瀬は相良の爲には買つて居るが、猶太人固有の鋭い鼻で眞の形勢を嗅拔いて、自分の勘定では賣つてるので、それで此へ音沙汰をいたさなかつたのでございます、軈て買で奔走してゐる馬島が、呼吸せきとやつてきたが、それは今日場外相對で買方が悉く敗退したといふ注進を、増島に齎したのでございました、驚いたのは増島、氣が氣でないどころの沙汰でない、コリや堪らぬと思つたから、今日後援隊が現はれる時まで仕舞つておいて、來たら火をつけて爆裂させやうと思つてゐた最後の彈藥へ火を導いて、買へる丈け買ひだした。

増島の此奮戰に相場は喰留められて、二千五百から二千六百五十に引戻したが、隨分共に亂脈な高下、併し増島も相良も、其他醍醐との秘密の打合を知つてるものは、未だ〳〵今に見ろと云はぬばかり、最早此んな風に上り始めたのだから今日も悉皆此方のもの、今に手筈の通り醍醐の伏勢が現はれゝば、弱氣は滅茶々々と、知るも知らぬも大喜び、中にも瀬藤と毛利は庄兵衞の手を管めぬばかりの恐悦、小部も人を搔分けて庄兵衞に近寄る、矢野は居なくなつたが、之は定めて三田夫人へ吉報を齎しに行つたのでございませう、それから此方に福本も嬉しくつて堪らない、此程來用を達してやつてゐる阪谷に新規の買注文を出させやうと、方々探し廻つてをりまする。

其内に二時になつたが、ハテナ待構へる醍醐の後援が現て來ない、増島は氣が氣でない、醍醐の後

勢は何として斯う遲いだらう、もう戰列へ入りさうなもの、最早刻限は疾に來てゐる、此上後援が無ければ一時も持こたへられぬ、疾く〳〵來ればいゝと、流石の增島、胸は頻りにドキ〳〵、血が頭部を去つて下へさがつて、顏が靑くなるのが人に見えはせぬかと心配で堪らぬが、職業で平生我慢を仕つけてゐるから表面には何處までも其色を見せません、谷田部は大聲を上げて、一度きでなく故意と少しづゝに區切つて買を增島に迫つてゐるが、增島は最早買はない、相手にしないで只一生懸命此方に居る醍醐の仲買土井の方ばかりを見てゐる、其土井は全然沈默でゐるので、增島は只一人氣が揉めてワク〳〵するばかり、自體買方の土井、懷中に買注文を澤山有つてゐべき筈だのに、何故此樣に出る賣物を買はぬのか、只ニヤ〳〵と不得要領な容子をして物待顏でゐるといふのは、何共以て合點がゆかぬ……。

ところが何と思つたか土井仲買、此時急に無理に咽喉から出るやうな聲をしぼつて、戰場へ打つて出た、

『萬國買はないか、萬國ウロウ、萬國ウロウ。』

で忽ちの內に賣出した高が千枚、二千枚、三千枚、之に應ずる聲が出る、相場は忽ちの大崩落、

『二千四百圓ヤリ……二千三百圓ヤリ……。』

『何枚？』

『五百、六百……買はう。』

十八

オヤ何だ、何を言つてるのだ？　待構へてゐた救援隊と思ひの外何事だ、更に新手の軍勢が近隣の森から現はれて敵軍に加はるとは！　眞に意外千萬だ！　恰度奈翁のウオータルローに於けると同じ事、待構へたグルーシーはやつて來ず、反つて其手勢が叛逆をした爲に、軍は悉く大敗に終つたが、其と同じ經驗だ、サア賣手の軍勢は益〻加はる、理屈から云つても二倍の速度、恐慌は彌〻近づいた！

サア大變！　增島は顏へ死氣が迫つて來たやうな氣を感じた、元來增島は庄兵衞を悉く信用してをつたから、數百萬の買を引受けるに殆んど鐚一文證據金も保證金も取らず、繫ぎに繫いで參つたのでございます、それが、今一朝此有樣、こりやア最早迚も駄目、萬國株は自分の寂滅となつたのだ、萬事此に休焉だと、明かに觀念をいたしたる增島信平、憫なる次第でございます、最早諦めをつけた增島、度胸がすわつたのか何うかしらぬが、其薄い口髯を有つた人好のする淺黑い顏容に、犯す可からざる勇敢の色を示して、平氣で更に買進む、有つてる買注文を一枚殘らず買果す、其カイを叫ぶ聲は宛然勝誇つてゐる時のやうな、勢ひの好い鋭い、若い鷄が謠ふやうな聲でございます、此方に增島と眞向ひに居るのが、吼へる谷田部と、中風患者然たる土井の兩敵手、無理に無頓着を粧つてゐるが、

これは反つて增嶋よりも心配想な顏の色、何が心配なのかといふと、相手の增嶋が又大危機に陷つてゐるから、彼れ彌失敗といふ曉には、勘定が取れるかどうかと、先の先を考へた心配でございます、二人共鐵柵に確乎捉まつて、職業ぐせの大聲を發しながら、合間々々には互に顏を見合はせてゐたが、心の裡には二人共、ア、金錢といふものは何んな事を惹起すか知れぬものだと、恐ろしく考へたのでございます。

遂に大引迄に餘すこと三十分といふ時刻になつたが、此合間こそは崩落瓦解の絕頂、場面は稀に見る混亂と相成つた、今迄餘り信用し過ぎてゐた後が、此度は盲滅法に怖氣が出る、大の反動が始まる、誰も彼も時間さへあれば幾許でも賣つて賣つて退けやうと飛かゝる、仕切內の仲買へ賣注文が雨のやうにゆく、注文傳票がヒラ〳〵と飛んでゆく、所謂一瀉千里、相場は刻一刻に、千五百に落ちる、千二百に落ちる、九百に落ちる、殆んど止度がございません、勿論買手は最早只の一人も無い、無事に起つてるものは一人もなく、其處此處は死骸の山、負傷の岡、其山や岡を越えて一段高い腰懸臺に、三人の記帳方は地獄の廳の赤鬼青鬼みたやうに、一々亡者を記帳してをります、滿場天變地異が起つたかと思つたら跡は急に寂滅森閑、凄氣殆んど膚に迫るばかり、其內に閉會の鐘が鳴つたかと思つたら、大引の相場が只の八百三十圓と知れたので、場內は宛然死人の家みたやう、戶外には執念の深い雨が未だジト〳〵、窓の硝子を傳はつて流れる水は瀧津瀨、其汚れた硝子を通つてくる黃昏の空の色はいと〻薄暗く濁つてをります、場內今は傘から滴れる水の爲に、大きな溝溜かと思はれる其中へ、塵や諸々の紙屑やが散らかつて、世話の屆かない厩よろしく、此方に立會場は青赤其他種々の色の注文用紙が重なつたまゝ、又は翩々と棄てゝあつて、今日の取引の多かつたことが其れだけで最早判るのでございます。

增島は仲買人溜室へ引取つたが、矢田部と土井も引續いて入りました、軈て增島は所內の酒場へ行つて、咽喉が乾いて堪らないから麥酒を一杯かたむける、而して每日見てゐるのに未だ一遍も熟く見たことがないといつた容子をして、此鐵道停車場の一等待合室みたやうに出來てゐる溜室を眺めてゐたが、やがて一ト言も物を云はずに、矢田部と土井に挨拶をして此室を立出でる、增島も矢田部土井の兩人も、容子は平日と變らない、只三人共顏の色を少し蒼くしてをつたくらゐでございました。

增島は福本を出口に待たして置いたから、そつちの方へ行つたが、福本は瀨藤團吉と待つてゐた、團吉は一週間前に最早悉皆增島の店を退いて了つて、今日は只遊び半分見物がてら此へ來たので、愉快氣に笑顏をして、依然親父が借金を拂つて呉れるか知らんなどゝ、暢氣な事を云つてをります、福本の方はこれは顏眞蒼、今日の大變亂で實際三萬足らずの大損をやつたので、溜息吐息をしてゐるが、併し無理に口を利いて話をして、內心如何して此始末をしたら宜かの考慮に、途方にくれてをりまする、斯くて增島信平主從は、篠つく雨の其裡に姿を沒して了ひました。

十九

が、場内では恐慌は、殊に庄兵衛の身邊を暴し廻つてをります、大變に四邊が騒々しいから、何が始まつたのだらう醍醐の一隊が來たのではないかと、初の内は何にも知らないから庄兵衛澄して平日の通り行つてをつたが、何の原因でだか判らぬが場がドン〳〵崩れ立つてゆくのに、初めて氣が付いて、見るといふと驚いた、萬國株が刻一刻、大崩れに崩れてゐる、庄兵衛は全で突立つたまゝ、死んで堅くなつて了つたやう、氷のやうな冷たさが地から足許から脳髄へ傳はつて、其反對に脳は貧血、嗟焉今度は最早駄目歟、最早萬事休焉か、恢復のならぬ敗北歟、損した金は惜しくはない、榮耀榮華が出來なくなるそんな事は何でもない、只無念なは郡代に打負けたといふことだ、又郡代を威張らせるのだ、又もや彼を大王たらしめ、確乎不拔の覇者たらしめる、それが無念千萬だと、庄兵衛は拳を握つて、無念の情に激されたが、それでも顔には負けぬ氣の無頓着な笑を作つて、剛氣を見せてをりました。

煙草や塵埃の煙で空氣が濁つて不透明になつてゐる其中から、庄兵衛四邊を見るといふと、毛利は死人のやうな顔をして、蹣跚て倒れさうになつてると、城大尉は之を支へて、だから平常云つた事ぢや、大な相場は行るものぢやないと始終云つてをつたのだ、後悔は先に立たぬと、手嚴しく極めつけてをりまする、瀬藤健藏は自分の本業が大損耗續きのところへ、相場で命から〳〵の大負傷だから、氣拔がして白痴になつた顔容、福岡侯爵は、價が下り始めた時に素疾く賣に廻つたので、大な損は免かれる、同僚の小部も同樣、先般の總會以來何だか庄兵衛の行動に腑に落ちぬところがあるので、夫れ以來大の用心、今度氣配が面白くなくなつたので、疾くも一變して賣に出て、同じく損を免れたので、兩人はマア好い塩梅だつたと喜びあつてをりまする、矢野は頗る面白くなさゝうな顔をしてゐたが、一寸姿が見えなくなつたと思つたら、大急ぎで馬車の中に待つてゐる三田夫人のところへ引相場を知らせに行つたのでございます、夫人は何時も相場が下る時に於けるやうに、今日は一層ヒステリー的の激怒をしたことでございませう。

爰に又佐藤は、何時の通り默つて不得要領な容子をしてゐると、其前に弱氣の元田と强氣の山縣が立つてゐる、山縣は未だ依然痩我慢の負惜み、滅らず口を叩いてゐる、元田は大當をやつたので、それ見たことかと云はぬばかり、それでも未だ依然悲觀說を言張つてゐる、

『此春には屹度獨逸と戰爭が始まるから、マア見て居給へ、ビスマークは大に我邦に注目をしてゐる。』

山縣、

『戰爭なんぞは御免々々、僕は今度は餘り考へ過ぎて反つて損をして了つた、又一つ行直しだ、此次

は巧くやるッ。』

此時まで庄兵衞は別に弱つた氣色を見せぬでゐたが、此時偶然後方で誰か話をしてゐる其の話の内に、安多摩の取立業者深澤の名を云つたものがある、それを聞いたので、一寸厭な心持になつた、それは如何したのかと云ふと、深澤の傳手で其地方の數知れぬ小金持に皆萬國株を有たしてあるから、萬國株が今日のやうな破滅になつては、無けなしの金で一株二株を買つてゐる多數の小資本家に何んな惡感情を起させるか知れない、激怒をさせるか譯らない、庄兵衞は其事を考へ出して厭な念に打たれたので、

すると此時向方に米本の姿が見えたので、庄兵衞は又更に厭な心持を增して了つた、見ると米本は鉛のやうな顏をして、體軀が悉皆崩れて了つたやうな、勢ひの無い風をしてゐる、此場に居る多數の人は、皆此米本のやうになつてるのだが、知つてる人だから米本丈けが目についたのでございます。

庄兵衞此米本の有樣を見て不圖又芳村母子を思出した、憫れなる母子が矢張米本のやうな眞蒼な顏をして、精神錯亂した狀態になつて、涙を一杯溜めた大な眼で、恨めしさうに自分を見上げてゐるやうに思はれる、然う思ふと心も顚倒する、流石剛情我慢の相良庄兵衞も良心を枉げきらぬで、眞直に身體を支へ兼ね、身體の倒れるのを防ぐ爲に、未だ嘗て腰を下ろしたことの無い柱の前の長椅子へ、今日といふ今日始めて身を落して、太い吐息をつきました。

群集は相變らず喧噪を極めてゐる、庄兵衞を目懸けて押してくる、此に庄兵衞は氣を入れ替へやうと、頭を擧げて二階の廻廊を見上げると、おせん婆が其脂ぎつた大な圖體を、手摺の所から現はして、下の戰場を睥睨してゐたので、庄兵衞は懸けてゐた腰を思はずも起上つた、おせんは相變らず古い黑革の大鞄を側へ置いたきり、恰かも食に餓ゑた烏が軍に從つて虐殺の日の來るのを待構へて思ふ存分腹を肥さうとしてゐる風で、此戰の場から眼を離さず、死骸の臭を嗅付けて、二足三文に下つた株を、ウントコサ鞄に詰込んで、持つてゆかうとしてゐるのでございます。

遂に庄兵衞は心を取直して、起上つて足を踏しめ〳〵、取引所を出て參る、最早魂も全然空虛のやう、が一生懸命われとわが心を引締めて、足許も確固に蹣跚もせずに、人道を歩行いてゆく、戸外へ出は出たが地を踏んでゐる氣がしない、宛然厚い毛織物の上でも歩行いてゐるやう、心持と同樣に身體もフワ〳〵してをります、而して眼は霧で曇つたやう、見るものも明瞭見えず、只だ耳へ四邊の人音が、ガヤ〳〵と障るばかり、取引所の石段を外へ出は出たが、誰が誰だか人の顏も能く判らない、只人影が茫乎、フワ〳〵自分を圍繞んでゐるかのやう、人聲も夢現のやうにしか聞えない。皆崎間齋が例の不愉快な大きな顏をさらけ出して往過ぎたのも見えなかつたでございませう、成瀨がニコ〳〵して通りかゝつたが平素に似ず話もせずに打過ぎたでございませう、阪谷も馬島も過ぐ前に居たが眼についたか何うか、庄兵衞は雨中の泥々した惡路を、何處ともなく遠ざかつて、姿も見せずなりましたが、口の裡には何處までも、平氣な負惜を云つてをります、

『ア、園丁奴、飛んでもないことを仕やアがつた、大切な椿を枯しやアがつて、畜生めッ。』

破滅

一

此夕かつ子は顚末を聞知つて、驚くこと一方ならず、直ぐと其まゝ羅馬に居る兄敏之へ電報を發しました、敏之は猶一週間許り羅馬に居る積りでゐたのだが、此變報に取るものも取敢ず、其まゝ羅馬を出立して、三日目に巴里へ到着した。

嘗て非常の熱中と意氣の投合を以て事業の相談をし門出をした目出たい其繪圖室に、今日庄兵衞と敏之は、喧嘩面の荒々しい問答說明をやるのでございます。

そこで、取引所の方は何んな模樣であるかといふと、大崩落のあつた日から三日の間といふもの、瓦解潰滅は留度なく、萬國株は追かけ〳〵下る一方、額面を破つて遂に四百三十圓といふ安値に下落致す、それでも未だ留度はなく、大厦の倒るゝや一木の支ふるものが無いといふ情無い有樣でございます。

庄兵衞と敏之が語つてゐる內、かつ子は只だ側に着いて居るきり、事に立入りたくないと、默つて控へてをつたが、何につけ彼につけ飛んでもない事をしたと、悔恨の念禁めやらぬばかり、今迄人に對しても、決して危險な事は自分がさせぬと請合つて置きながら、今日のやうな端目になるまで、打棄つておいたとあつては、共犯と云はれても仕方が無い、飛んでもない事になつて了つたと、考へたが、何も今更仕方がない、一體かつ子、理屈の無い騰貴を防がうとして唯單に自分の所有株を賣るだけに留めたのはこれは宜くない事だつた、世間一般にも此事を知らせてやつたら宜かつたに、何故自

分の利益を考へる丈けに留めたか、兄妹二人限り、其二人きりの敏之を斯く連累の罪に陥らしめて、全然疵者にして、二度と再び世間へ顔出しが出來ぬやうにして了つたかと考へると、彼女は實に氣が氣でない。

それに彼女自身から云つてみても、第一思ひ切つて庄兵衛に物を云へない弱點がある、立派な口が利けない理由がある、一度でも庄兵衛に愛を有つたことがあり、身を任したことがある以上、餘り大きい言は云はれない、如何して彼樣な事をしたかと、今になつて情無く思つても、仕方が無いのでございます、敏之に對しては十分庄兵衛の事を云はねばならぬが、庄兵衛に對しては大きな口が利けないので、此二人の間へ挾まつたかつ子は如何していゝか譯らない、ツイ何事も默つて了ふ、併し大崩落事件の其晩は、かつ子も流石に我慢が仕切れず、腹が立つて腹が立つて、逢つたら武者振ついて云ふ丈けを云つてやらうと、思込んではをつたものゝ、偖逢つてみると然うはいかない、庄兵衛は相變らず顔に笑を有つて毫も弱つた景色無く、負けたらしい風も見せず、落着いて平生の通り凛々しい容子をしてゐるから、出かゝつた言葉も引込んで、さうだ自分にも弱點がある、責が無いとも云はれない、滅多に非難攻擊も出來ないと、怒と恨を葬つて、只庄兵衛の云ふ事を證人の格で聞いておくに過ぎなくなつて了ひます。

が敏之は今度は大人しくして居ない、平生は人と成たけ折合ふやうに務める彼れ、自分に直接關係の無い事には何時も默つて通す彼れ、其彼れは今度は大怒りに怒つて了つた、一體投機を行るといふ、間違つた事である、萬國銀行を相場の渦中に推やり、全で狂氣染た山師の玩弄物にするなんど、以ての外の事である、そりや銀行といふものに取つては其株の値が動くのは好ましからぬに相違ない、銀行といふものは鐵道會社やなどゝ違つて、殊に信用が大切だ、鐵道會社には目に見える原料材料なるものがあつて、それから收入が擧つてくるが、銀行は然うはゆかぬ、銀行の資本は信用だ、信用が無ければ銀行は成立たぬ、一朝信用がグラつき始せば、銀行の萬事は休焉だ、尤もこれは程度問題だ、若し萬國銀行が其株に二千圓といふ相場を有たして置くのが必要で、又其位の標準に置きたいといふのならそれも宜いが、無理に夫より上へ騰げて二千五百の三千圓の、又は夫以上へ相場を置かうといふ、それは過誤と云はねばならぬ、人爲的に相場を作らへる、それは狂暴といふものだ、狂暴でなければ刑事に觸れる卽ち罪惡といふものだと、流石の敏之言葉を激して、庄兵衛の前で述立てる。

二

敏之は着匆々、先づ以て事實に就いて知ることに務めました、先時には宜加減に庄兵衛の云ふことを諾々聞いてゐたが、此度は何か證據を見ぬ内は、斷然と承知しない、先時に總會の席上で銀行は自行の株は一株も所有せぬといふことを庄兵衛に云はれた時、敏之は頭取として默つて其言葉を信用し

て聞濟したが、今日は最早默つて濟まさない、帳簿を見なければ承知せぬ、そこで其帳簿を調べて見ると、誠に體好く拵らへてある、勘定は總て阪谷の名になつてゐる、卽ち阪谷は名義人で、庄兵衞は阪谷の名で相場を行り、銀行の株を賣買してゐる、そこで阪谷の勘定について一々溯つて調べて見ると、庄兵衞は最初は用心深くチビ〳〵と行つてゐたのが、段々圖に乘つて味をめて、大袈裟になつてきて、終局には二萬六千といふ巨額の株、之を金高にすると四千八百萬圓といふ大金を相場にかける迄になつたのが悉皆と判つてきた、何といふ亂暴だらう！　寧ろ狂愚の沙汰と云ふべしだ、四千八百萬といふ相場を、人もあらうに阪谷一人の名にして麗々帳簿へ記けておく、狂愚と云れても仕方が無い、淺薄と云はれても仕方が無い、それに阪谷一人でない、藁人形は未だ〳〵ある、銀行使用人の名前も使つてゐる、重役の名前さへ使つてゐる、是等の名義で買つてある株數が二萬株を超えてゐて、其金高丈でも約四千何百萬になつてゐる、此高は現物買で、そこへ加へなければならぬのは、這般の一月の受渡日に行つた定期の買高、株數二萬株此金額六千七百五十萬といふ、これも萬國銀行が引取らなければならぬ數だ、未だ此外にもあるといふのは、今列べたのは巴里取引所での買高で、里昂取引所で買つたのは此外になつてるのだ、其枚數一萬株の、金額は二千四百萬、總て之を合計すると、銀行の手に在る株數は、やがて銀行總株數の四分の一其代價は二億圓といふ大々金額になつてるので、自分で自分の行の株を斯うも飽食しては溜つた譯のものではない、考へても戰慄乎とするので。

一々調べて來て、敏之は驚くの驚かないの、餘りの事に呆れて了つて、情無いやうな腹立たしいやうな、眼に涙さへ浮べて參つた、大變な事になつて了つた！　よし此地の銀行はいゝにしたところで折角羅馬に設立やうといふ今基礎の出來かゝつてゐる加特力的銀行も、これも最早中止する外はない、法權守護を名として法王を擔ぎ上げ兼て描いてゐる加特力宗旨の世界人間を株主や得意客にして現世一二の大銀行たらしめやうと目論んでゐたそれも今は水の泡だ、庄兵衞の投機事業の御蔭で、一ト吹に吹飛ばされて了つた、過般羅馬へ立つた時には萬國銀行の經濟狀態は夫は〳〵良好で、金庫には何百萬の金が充滿て、其全盛、其勢力、勃興の速いことは世間が不可思議の事實として驚嘆するほどであつたそれが、一ト月經つか經たぬ今日の今、歸つて見ると此有樣、何百萬の金は熔けたやう、銀行は塵灰となつたやう、影も形も無いと同樣、只有るものは、其處から火焰が紅ひの舌を吐いたかと思はれる大きな黑い穴ばかり！　此恐ろしい光景を目の前にした敏之は、魂消え心飛んで呆然、言葉も荒く庄兵衞に說明を求めるより外はない、さしも頑丈堅固に築かれた建築物、一朝一夕に破壞しやうといつても出來まいに、何んな神變不思議な手があつて破壞したものか其理由が聞きたいと、敏之は庄兵衞に言葉鋭く迫りかゝつた。

庄兵衞は顏色も容子も變へず、虛心泰然、毫も憚らず明白地に答へて、萬國銀行は頗る巧く行つたのを、只醍醐奴が叛いた爲に、手違ひが大きくなつて、現ずとも可い樞樓まで現た、銀行は何物をも

失はぬ、假令失つたにしたところが、それは恢復すばッかりだ、世間は銀行に就いて非難ばかりしてゐるが、第一萬國銀行なるものが、短時日間に成功を收めたのも、又隆盛を極めたのも、經營の方法が其當を得たからではなかつたか、其經營の方法が惡いと云つて、今になつて攻擊するが、好い時には褒めたゝへ惡いときには攻擊する、それは勝手といふものだ、銀行が今日迄になつたのは自分の行法が好かつたからだ、シンヂケートを作らへたり、時機を計つて連々と資本を增加したり、豫め好對照表を發表して人氣を引立てたり、銀行が最初其株を保有し又後になつて大々的買を實行したり、それやこれや、皆銀行今日の隆盛を來した原因ではあるまいか、人若し成功を認めるならば、同時に危險の夫に伴ふのをも認めねばならぬぢやないか、早い話が、機械にしても、此を餘り强く熱し過ぎると、屹度破裂する危險がある、理屈は最も明白だ……と庄兵衞は自分が惡いといふことを中々口から出しませぬ、自分は別に失策せぬ、銀行の支配人の誰だつて行るそれを、自分は少し大袈裟に行つたばッかりだ、自分は此度の蹉跌の爲に今迄の考案を決して棄ぬ、何處迄も續けてやる、飽までも銀行の株は買つて買つて、是非郡代は滅ぼしてやる、何豈やれぬ事はない、此度だつて只金が缺乏した爲ばッかりだ、金さへ續けば襤褸は出さぬ、これから又行り直しだ、此次の月曜日には臨時株主總會が召集してある、自分は固い信任を株主から得てをるから、何の雜作もない事だ、自分が一ト言云ひさへすれば必要な金は工面しても即座に作らへてくれるに相違ない、身上有つ丈けを出したつて應じてくれるに相違ない、恢復すまで食ふにも困るまい、打棄つといて大破綻となり自分達も渦中へ卷込まれては大變だから、大小の銀行は屹度我輩に同情して、融通をつけてくれるに相違ない、此くして急場を過ごして了へば、跡は又此方のもの、又元の全盛だ……と、庄兵衞飽までも剛愎の、飽までも樂天的の、抱負を述立てゝをりまする。

三

相手が平氣で平常と變らず笑顏さへしてゐるので、自體大人しい敏之は終にはそれに釣られて了つて、激した氣もいつしか鎭まつて、只一ト言を挾んだ、

『が相良君、君は此同業者の應援を受けることを期してゐるが、其應援が假令來たにしろ、其間に政略といふものがあることを考へんければいかん、同業忌敵の彼等は、斯くして我々を引張つて、益〻深味へ陷らしめて、再び頭を擡げ得ぬやうにして了はうとするに相違ないと僕は考へる、第一僕の心配でならぬのは郡代が其仲間に入りはせぬかといふことだ。』

全く敏之の心配通り、郡代は萬國銀行破綻の應援に向つた最初の同業者の一人だ、自分が火を付けて置きながら、飛んだ災厄が財界一般に普及しては大變と、そこは流石に世界第一の金錢の商人でゆかうといふ人物だから、かうなると私的の怨恨ばかりを抱かない、人を倒すよりも自分が損をせぬや

うにといふ考へ、そこが郡代でございます。

庄兵衛は敏之の言葉の終はるのを待兼ねて、

『郡代は故意と大腹中を見せて而して腹では我輩を滅して了ふ積りなのだ……。』

こゝで兩人は默つて了つた、此時迄一言も口を開かなかつたかつ子は遂に無言を破つて、

『相良さん、何といふ困つたことになつちまつたのでございませう、今度のやうになつて一番困るのは私達兄妹でございます、だから私は始終、蔭になり日向になり心配してゐたのでございます、私には此場合如何していゝか判りませんが、私は貴郎は此の上何處までも切拔けてやつておいでなさるやうにしなければならないと思ひます、乘かゝつた船ですから仕方がありません、兄にだつて今更勇氣を落さして逃出すなんてことはさせません。』

大惡黨、大不正漢！　存分云つて責めてやらうと思つてゐたかつ子も、面と向ふと自分で驚くほど物が云へなくなる、たゞ心でモガ〳〵と思ふ許りでございます。

心の弱い敏之も、此上主張つて議論するだけの勇氣は無い、

『事此に至つては是非も無い、君が更に我々を救ふ爲に一ト奮發するといふ以上、我輩だつて敢て君を苦しめやうとは云はぬ、宜しい、更に君の力にならう、役に立つことがあるなら務めやう。』

彌々といふ此時、外に發展策も無いのだから、自然と成行が此へ來る、庄兵衛は到頭自分の考へを押通して、兩人に堅い約束を番つた、

『マア安心して枕を高くして寢み給へ、僕は未だ口へ出して語るまでにはなつてをらぬが、今日以後一週又は十日以内に總てを恢復して御目にかける確信を有つてゐる……。』

當になるかならぬか、又何んな考案があるのか知れぬが、庄兵衛の云ふことは誠に立派、此立派な口は獨り濱野兄妹にばかりでない、銀行關係の人々には勿論、此度の大波瀾で大弱りに弱つて如何したら宜からうと意見を訊きにくる人毎に話して聽かせて、鎭撫してゐるのでございます、此三日以來、英町なる銀行は入代り立代り訪ひくる人で引も切らず、庄兵衛の室に客の居ないことはございません、芳村の輩、毛利の徒、瀨藤や米本、如何して宜いか判らないから幾度となく庄兵衛の所へ說を訊きにくる、庄兵衛は至つて落着いて、澄し込んで面會して、いかにも安心のなるやうな聲を使ひ言を並べて、勇氣をつける、すると諸人は安心して引取つて歸る、中に、損をしても宜いから此際賣らうと思ふなどいふ人があると、庄兵衛悉く立腹して見せて、以ての外のこと其樣な愚があるものか、二千圓の相場へ立戻るのは目に見えてゐる、自分の名譽にかけても請合ふ、二千圓どころか三千圓にも引戻させる積りだと、高言を吐いて聽かせると、大變な失敗を行つた後だのに、諸人は庄兵衛を盲信してか、おいそれと言を聽く、萬事任して行らせやう、あれだけに請合ふのだから悉皆恢復をやるかも知れぬ、此總會も月曜日、何事も起らずに首尾よく總會が開けるやうに、十分の時を與へれ

ば、萬國銀行を危機から救つて、破綻から免れることも出來るだらうと、庄兵衛信用を得たのが幸。

四

が、此度の破綻から如何助からうといふことに就いては、庄兵衛別に之れといふ成算がある譯ではない、種々と苦心を重ねたが、考へ付いたのは舍兄のこと、兄大木惟文の勢力は中々大したものがあるから、それを藉りて難場を拔出さうと、かう庄兵衛は考へた。

然るに或日のこと、庄兵衛不圖醍醐に出會つたが、醍醐が張本人となつて裏切をした爲に此度の大綻破が起つた次第なのだから、庄兵衛さん〳〵に其不信不德を責めつけると、醍醐は平氣な顏で說明して、

『怪しからぬ、我輩が何が不信、今度君に背いたのを君は我輩だと思ふかしらんが、夫ならば君は大に誤れりだ、君に背いたのは我輩でない、君の舍兄大木君だ、誤解をしては困るッ。』

成程然う云はれゝば夫に相違無い、醍醐を不信とも不德とも云ふことは出來ぬのだ、といふのは、醍醐の萬國銀行創立の計畫に加はつたのは、唯只大木が加はつて大に助力保護を與へるといふ其條件の下でしたので、それが大木が贊成もせず全然加はつてもをらぬと判つては、醍醐が手を退くのも仕方が無い、然のみならず其大木が、銀行にも相良にも敵意を抱いてをるといふに至つては、今度のやうに醍醐が急に方針を替へたのも、正當防衛上止むを得ぬ、何と攻擊も出來ぬのだ、庄兵衛も理の當然に一言も言ひ得ない、ア、氣が付かなかつた、飛んでもない事をした、もちつと大木に大事を取つて、もつと敬ひ立てゝ綾なして、後援に立つて貰つて、世間に然う思はせて、而して仕事をすれば可かつた、今更どうも仕樣がない、何とかして彼へ縋らねばならぬ、さりとて今更自分からオメ〳〵頼みにも行かれないと、日頃負惜みの强い庄兵衛、今日は大負けに負けて了つて、由利修輔に哀願して、とう〳〵兄への取なしを頼む、由利も仕方がない頼まれた。

此場合十分下手に出れば宜いのだが、そこが庄兵衛依然傲慢脅迫の態度を禁める事が出來ない、由利に云はせる言草はかういふので、自分は到底此國を動くことは出來ぬ、元來大木が自分を助けてくれるのは當然のこと、何故と云へば、自分が外聞の惡い破綻を釀せば、肉身の大木の恥にもなり利害にも拘はると、自分のことを棚へ上げて兄のことを先へ云つて、由利に說いて貰ふことを頼んだ。

由利は翌日返事を齎してくる約來なので、庄兵衛は待つてゐると、由利は來ないで只簡單とした一通の手紙が來た、其文言は少し不得要領な「餘り急かずに猶少し成行を見るが宜からう、反對の事情が湧いて來なければ追々好都合になつてこやう…」と斯ういつた事柄でございます、庄兵衛は少し失望したが、併し此文句なら敢て反對の色は見えぬ、少くとも中立の態度でゐるのだらうと、庄兵衛は少しは安心した。

が事實は如何であるかといふと、實は大木は庄兵衛を持餘してゐるのでございます、何かして一門から此樣な厄介者を追拂つて了ひたい、一度ならず二度三度、後暗い行爲を働いたり、忌憚嫌惡すべき事を計畫したり、迷惑ばかり懸てゐる、此度若し何事か煩累が起つたら、助けたりなんどせず、其儘に放任して了はうと、斯う大木は覺悟をしてゐる、弟は自分から此國を去らぬといつてる、仕方がない、何か退去を餘儀なくすることを作らへて、自然と此國に居られなくなるやうに、此方から仕向けにやならぬ、少しでも刑に觸れる事があつたら夫を捉へて、容赦なく宣告して、此國に居られなくなる端目にしてやるに若くはない、第一弟に此んな奴が有つた日には自分の位置も安心と云はれぬ譯、內外頗る多事の今日、反對派から非難を入れられる餘地を作つて置くのも頗るの不得策だ、加之に、今宗教上の爭鬪が行はれてゐるのに、加特力派を標傍してゐる萬國銀行に少しでも關係を有つてるなどは最もの不得策、猶ほ又佛國は今度國債を起さうといふ場合に在つて、大藏大臣は內密郡代と其一派に交渉を開いてゐるのに、內閣員の一人が加特力銀行に關係を有ち、殊に財界に荒れ廻つてゐる人間に關係が有るなぞは、不覺の最も甚だしいもの、彼れこれ庄兵衛の關係は是非之を絕たねばならぬと、大木は公私の立場から相良排斥の覺悟を定めた。

程經つて人の話すところを聞くと、司法大臣神村は女――三田男爵夫人――の一件から相良に深い遺恨を含んで、夫れとなく庄兵衛の事を同僚の大木に讒訴をいたし、相良對萬國銀行の行爲は場合に由つては刑事上の罪を構成し、自分の司法的立場として或は默視は出來ぬもしれぬと、諷したこともあつたさうで、それから大木は大喜び、有難い、是非どうか落着をつけてくれ、然うなれば自分は禮を云ふと、明白地に言ひきるので、斯うなつては萬事は休焉、大木に見棄てられた庄兵衛は、盲龜の浮木に離れたも同樣の次第でございます。

此の如くに、司法の椅子に就いてから絕えず相良を窺つてをつたる神村、大木の意嚮も見定めたので、時こそ來たれと、遂に相良を法網の人とすることに決心いたし、何か捕縛の言まへを見出さうと機會を狙らつてをりました。

五

皆崎間齋は其後庄兵衛から例の子供に關はる證文の殘金四千圓を取ることが出來ず、何ともつかず延び〳〵になつてるので、大怒りに怒つて、遂に事件を裁判所へ呈出した、間齋のことであるから只單に恨みを晴らすといふ爲ではない、恰度今萬國銀行が大事の時に迫つてゐるし、こんな時に市中の人が騷立つて注目點にしてゐる重役の相良を脅迫して、昔時の醜行や不德やを發いてやつたら、相良の奴め屹度困つて早速示談を申込んで金を拂つてくるに相違ない、と斯う考へたから、それで恐れながらをやつたので、で告訴の理由は小兒の不法監禁といふ條項でございます。

ところが檢事吉川三郎は親しく間齋を引見して、刑法に其樣な行爲に對する制裁が明記してない、法律に該當する規定が無いから受理は出來ぬと、斯う說明をいたしました、此檢事吉川三郎は神村の甥に當る人で、神村の爲にも如何かして相良を罪に陷す手懸を得たいと考へてゐるところでございましたが、法律に無い事で罪に陷入れる譯にいかないから、皆崎の告訴も受理することが出來ない、が伯父から含められてゐるから、何か捉へ所はないか言懸は無いかしらと、頻と工夫いたしてをります る。

さて此方に失望いたしたのは間齋、失望どころか地團駄踏んで殘念がつて見たが仕樣がない、そこで愚痴たらだら今迄の事を殘らず檢事の前で打明けて、自分は好意にも相良が支配人をしてゐる萬國銀行へ金まで預けてあるが、今度の事でそれも取れないと滾すと、其言葉を聞咎めて吉川檢事、俄に嘴を入れて、それこそ立派な一の刑罪、正しく詐僞取財の行爲であるからそれを打棄ておく法はない、其點で訴を起すが宜いと、大に間齋を焚付けると、江戸の仇敵を長崎で打つ道具に使はれるとは知らぬ間齋、仔細氣に聽取つて、一度は大に喜んで見たが、鬱憤を晴すばかりで肝腎の金を取損なつては何にもならぬ、相良が捕縛されて了へば萬國銀行は其まゝ寂滅、然うなると虻蜂取らず、イヤ併し混雜に乘じて儲け仕事が見つからぬとも限らぬと、慾と二人連の皆崎、彼樣此樣と決し兼ねて、一遍歸つて熟く考へてから返事をすると斷わると、吉川は檢事の立場からではない伯父大臣へ忠勤の仕どころと、突如筆を執つて皆崎の手に持たせて、しかも御丁寧に自分の卓のところへ誘つていつて、詐僞取財の告訴狀を書かせて了つた、流石の間齋も何が何だか判らない、命のまに〳〵して立歸つたが、吉川は跡見送つて、內心は大手柄、それから直と、汗水も垂らさぬばかりに、伯父大臣の許へ馳けつけた。

事件は到頭火がつけられて了ひました。

翌日英町の銀行の重役室で、庄兵衞は月曜日の總會へ呈出する會計書類を調製する爲に監査役と外に法律事務擔任の取締役一名と鼎座して、眞面目に仕事に取かゝりました、營業の方は如何かといふと、大小の同業者から救濟の爲に回はしてくれた資金は決して少くはなかつたが、取付が激しいので何分にも應じ切れず、遂に店を閉ぢて支拂を中止して了つた、僅か一ト月以前には、金庫に二億近くの大金を擁してをつた大銀行、それが今日は、只だ纔に最初の二三十萬を拂つたきりで店を閉ぢて了ふといふ、恐ろしい變化でございます。

こゝに地方裁判所は、遂に係官を銀行へ派出して、諸帳簿を檢査をいたし、其結果として物件一切差押の手續を執行し、それに基いて次の日に、遂に破產の宣告は萬國銀行へ下されました。

事件が斯う決着したに拘はらず、相良庄兵衞は依然として、全く無頓着な容子をして、未だ未だ事局を救濟してのけると、口外してをりまする、其內實は兎に角に、彼れの勇氣と剛情は感心の外は

ありません、今しも庄兵衛わが支配人室に、仲買人組合から銀行株解合相場の事で來る返事があるそれを待つてをりますと、軈て守衛がやつてきて、何誰か知らぬ三人の御客來、御面會を求められる、次の間に待つておいでと告げられたので庄兵衛、これは何か好い話でもあるのかと、少し嬉しいやうな心になつて、そこそこにして次の室へ行つて見ると、愕いた！

六

三人の客といふのは警察官吏一人と巡査二人、庄兵衛捕縛に差向つたのでございます、警官は拘引狀を示して、罪名の不正文書作成に在る旨を告げ且つ皆崎間齋の告訴に由り詐僞取財と認めて拘引する旨を告げました、斯くて庄兵衛遂に拘引と相成つたが、之と同時に一方濱野敏之も、山屋町の宅で拘引された、此度は泣いても笑つても最早終焉！

兼て定めてあつた臨時總會も開かずしまひ、萬國銀行は此に於て遂に寂滅となつて了ひました。

敏之が捕縛されたときにかつ子は不在であつたので、敏之は警官の許可を得てサラ〳〵と一筆を書遺した丈けで、引かれて行つたが、歸宅して此顚末を知つたかつ子は、唯只呆然自失の體、痴愚みたやうになつて了つた、かつ子は兄は始終留守であつたし全く事情を識らないのだから、庄兵衛の犯罪に連座することは到底無いと信じ切つてゐたのでございます、銀行が破産と事が極つて匆々、兄妹は身の潔白を立てる爲に、有りと有らゆる二人の所有物を銀行へ差出して其資産に組入れ、自分等二人は銀行を設立へる以前に裸身であつたと同樣に、全裸になつて了ひました、有つてゐた金も少くない、約八百萬圓はあつたでございませう、其中には伯母から貰つた遺産の三十萬圓も入つてゐたが、それもこれも皆銀行へ渡して了つたのでございます。

が、最早斯うなつては泣いてゐても追付かない、何とかして兄の無罪を證據立て、潔白の明りを立てるより外仕樣がないから、種々と手を廻して、心配をしてみるが、いくら男勝りとは云ふものゝ、根が婦女であるから、先立つものは涙ばかり、兄は專門の仕事にかけては立派な手腕があるけれども、平生は宛然子供のやうに、罪の無い好人物の、他人の言なり放題になる弱い質、そんな事を考へると、かつ子は凝乎として居られない、思へば思へば憎い相良、それも此も彼の爲め、濱野一家は彼

の爲に、滅茶々々にされて了つたのだ、こんな事があらうと思つたから、自分は法律を調べて研究して、不法な事をせぬやうに彼れに注意をしたのだが、其注意の足らなかつたことを考へれば、自分も罪がないでもない、併し人の云ふことを聽かないで、今日の大それた結果を釀す、それも、破廉恥な不德義な、萬人に迷惑を及ぼす大罪は、憎みても本當に餘りある、とは云ふものゝ、其憎むべき大惡人に、此くいふ此身は瀆されなんだか、噫矣、悔しい、情無いと、かつ子は獨り悔恨にわれと心を苦しめるばかり、アヽモウ到底仕方が無い、此上は庄兵衞に成たけ近寄らぬ工夫をしやう、表面無關係になつて了はう、居ても居ぬでも同じな人間に見ておかうと、こゝにかつ子は心に誓つた。

然う思つてからといふもの、かつ子は庄兵衞の名を口にしなければならぬ時に、夫を云ふのが見ず識らずの他人の姓名を口にするやう、全然利害の異つてる敵味方の人の話をするやう、心持が變つて了つた。

彼女は毎日のやうに、裁判所の未決監房に兄を訪ねにゆくが、同じ監房に居る庄兵衞は一遍も訪ねない、又訪ねやうともいたしません、此んな情無い場合であるから、かつ子は獨り寓居に籠つて、他人との面會を避けるかと思へば、殊勝な彼女は誰にも彼にも、來るものには皆面會する、中には隨分怨言を遠慮なく云ふものもある、酷い罵詈攻擊をするものもある、けれども、彼女は事理を糺し辯明を務めて、些も弱つて了はずに、飽迄も正々堂々名譽と一家の其爲に心を盡してをりまする。

如何な風にして味氣ない日永を、嘗て嬉しく住馴れた例の二階の繪圖室で暮す內にも、こゝに一つ情無い事が目に入つて心を打たれたことがある、といふのは外でもない、或日のことかつ子偶然窓邊に寄つて隣家の芳村家の方を見ると、至つて手狹な小室の硝子窓の下に、伯爵夫人と娘の有子が、憔れた薄蒼い横顏を見せて、力なげに坐つてゐる、今度の銀行の破產は此憫なる兩女に絕大の損害を與へて、情無い憂目に陷らしめたのでございます、今より半月前には、夫人は萬國銀行株六百株の所有主、これを金額にすると百八十萬といふ大金滿家であつた、それが今日は株の値が三千圓から只の三十圓に下つたので、資產は僅か一萬八千圓になつて了つた、否實際夫人家の財產は今日は皆無になつて了つた、夫人が苦しい中から虎の子のやうに大事に取つて置いた亡夫の遺產金二萬圓も、大府の地面を抵當にして最初には七萬圓を借り後になつて看す〳〵四十萬圓の値打のものを二十四萬圓に賣つて得た其金も、悉皆萬國株に注込んで、其株が今日のやうになつたのだから、宛然影も形もないやうに、吹飛ばされたと同樣で、考へると氣の毒千萬、是から如何して行つてゆくだらう、巴里の家邸も無論抵當に入つてゐて、其利息丈けでも年八千圓喰つて了ふから、殘すところは幾干もない、如何儉約をしていつても、客嗇を行つていつても、種々な機關、手品同樣の遣繰算段をしていつても、身分や家柄の外觀丈を飾ることとしてからが、七千圓以下では行りきれぬ、伯爵一家の經濟が行つてゆける

ものではない、假令一朝株を賣拂ふにしたところで、一時の急場は助かるが、無けなしの金を費つた跡を如何やつてゆけやうか、借金の利息も拂へぬ日には强制的に貼札までも貼られて賣られて了ふから、夫よりも穩かに抵當を流すよう外に仕樣も無い、先祖代々持傳へた地面も、住馴れた家邸も思ひ切つて人手に渡して、何處か小さな間借でもして、隱れて此世を過すより此際仕樣は見つからない、理否は顔る明かで、別に仕樣も無いのであるが、夫人は依然思切れない、今迄力一杯に體裁を繕つてゐた甲斐がない、芳村の誇るに足る威嚴も消えて了ふわけだ、幾百幾千年と古い血統の汚れともなつて了ふわけだ、久しい間苦しい思ひ、慄へる手先も我慢して我と力を落さぬでやつて來た事も無効になる、宿るに我家なく、他人の軒の下に此日を過す、寧ろ死んでも此恥辱を免れたいと芳村夫人、飽までも痞我慢。

七

一朝、かつ子見るともなしに打見やると、芳村母子は庭内にある小さな納屋で、洗濯物をしてゐる、一人ヨボクタした臺所の下婢が居るが、此頃は手足も利かず、全然手助にならないから、寒氣の酷い今日此頃、何から何迄自分自身始末をやつてゆかねばならぬ、主人の役から書生の役、執事女中下男馬丁、殘らずを一緒に兼體、掃除位は出來るとしても、生殘つた痞馬の世話までは大抵の事ではない、それでも母子は飽くまでも外飾は外飾で飾り立つて、外出の時の有樣などは裏面とは全での反對、窓から樂屋内を瞰下せるかつ子は、見る度毎に氣の毒よりも寧ろ不快な心持ばかり、こんな憂目を見せるのも、これも矢張相良の業、其相良に關係があると思ふと、かつ子は獨り穴へでも入りたい氣が發て參る。

これはかつ子が間接に情ない思をしたことだが、又他の日の朝のこと、かつ子は猶且直接に痛ましい猶且悲慘な一つの事に遭遇したのでございます、それは何事であるかといふと、米本が訪ねて來たといふ取次の知らせである、ア、困つた、逢つて何と云つたら宜からうと、かつ子は心を苦しめたが、仕方がない勇氣を鼓して、逢ふことにいたしました。

『オ、米本さん、どうも暫らく……。』

と云つたきり、かつ子は言葉が續かない、今度の騷擾以來希望新聞社が潰れてから、路頭に迷つてゐる米本の顔色の其蒼さ、而して其眼容も顔容も宛然死んでる人のやう、先時とは全で變つてゐるので、かつ子は餘り吃驚して、言葉が出ない位であつたが、纔と文句を引張出した、

『米本さん、本當に御察し申します、だが米本さん、貴君のやうに然う氣を落したつていけません、損なんぞはしないと思つてゐれば、夫でいゝではございませんか。』

米本は此時漸く力の無い聲を發して、

『イヤ奥様、然ういふ譯ではございません、そりやア初には大變巧くいつてゐたので、悉皆圖に乘つたのでございますから、嚴しい打擊を被つて、隨分弱りは弱りましたが、何豈申さば御酒を飲過ぎたやうなもので、醒めれば矢張忘れて了つて、又正氣になつて、稼ぐ氣にもなりますし、損を恢復することも出來ると思ひますが、只貴女、こゝに一つ困つたことが出來まして、私は如何致して宜しいか、情無くつてならないでをる譯でございまして……。』

米本の兩の頰には何時の間にか大きな涙が傳はつてゐる。

『ハイ、貴女、彼女が見えなくなつて了つたのでございます彼女が。』

かつ子は驚いて訊いてみる、

『見えないつて？　誰が？　どうして？』

『ハイ、娘のなみが家出をいたしましたのでございますハイ、此度の一件で婚禮話が打毀はれて了ひましたので、なみは失望やら落膽やらで、いやもう大鬱ぎに鬱いでをりましたところへ、照藏の父親が參りまして、今迄さんざん待くたびれてゐた伜が、なみとの婚禮を見合はして破談にして、此度或小間物屋の娘で八千圓持つて嫁にくるのがある其女と婚禮をすることになつたと話しましたので、夫を聞いたなみは唯もう狂人のやうになりまして、自分には金は無し、男には見棄てられる、此上は一生寡婦で暮さなきやならないと、斯う考へつめたのでございませう、只泣いてばッかり居りましたが、本當に私は、可愛い娘に此樣な思ひをさせるかと、身も世もあられないでをるのでございます、冬なんぞ夜私は時々起きて、娘がよく被けて寢てゐるか見てやるくらゐにして、又彼女に少しでも美い衣服を着せてやりたく、喫みたい煙草も止めてる位、私は彼女に取つて、父であると同時に、又亡き母親の代りをもいたし、只々彼女の家内に居るのを側で見て、何より樂といたしてをつたのでございます。』

米本は涙をボロ〳〵流して、今は聲さへ上げて泣出しながら、

『ハイ、これと申しますのも、皆私が餘り大い事を考へ過ぎた誤からでございます、私の有つてる萬國銀行株を、それを賣つて婚姻の持參金に要る六千圓に足りる時賣つて了ひさへいたしませば、それで娘は婚禮が樂々出來て、何のことはなかつたのでございますが、貴女も御承知で居らつしやいます通り、株はドン〴〵騰つて行つてるので、此分では猶且〳〵騰るに極りきつてると、段々慾張る氣が出て參りまして、終には利息が千圓も出るくらゐの資本にすれば、結句利息丈で食つていけやうと、大變に慾を深くして了つたので、でございますが本當に、株がアノ三千圓の値になつた時には、私の身代は全く二萬四千圓になつたのでございます、其内からいたしまして、持參金に當てる六千圓を差引きまして、殘り一萬八千圓を、五分の利息で見て毎年九百圓を生ませまして、それで私は一生利息で隱居が出來た勘定なので、イヤモウ其時の勢ひでは、今日考へると馬鹿

馬鹿しうございますが、千圓以上の利息を生ませる資本は目の前にも出來るだらうと。然う思つたのでございました、それが貴女何うでございませう、今日では八株の値段がたか〳〵の二百圓足らず、本當にどうも考へると、情無くつて口惜しくつて溜らないのでございます、それも是も私の失策、私は寧そ淵川へでも身を投げて、死んだが勝かと存じてをります！』

八

かつ子は米本の薄命話に痛く心を動かされて、何の言葉も出なかつたが、此時訊ねて、

『なみ子さんが行つて了つたつて如何行つて了つたのです？』

訊かれて米本は當惑顔、が之と同時に何したことか、其蒼い顔は赧くなつた、

『ハイ、何處かへ出ていつて了つたのでございます、三日前に行方が判らなくなつて了つたのでございます……、實はソノ、なみは私共の宅の向側に住んでをりまする或男の方、立派な四十格好の男の人でございますそれと、懇意になつてをりましたが、マア其人とかもしれません何所へか參りましたのでハイ……。』

米本がオド〳〵言淀んだ口調で娘逐電の顛末を話してゐる内にも、かつ子は心の裡に、ア、あのなみといふ娘、痞ぎすの愛らしい、父親の手に甘やかされた我儘育ち、到頭人に騙されて駈落をして了つたか、しかし失望から此端目になつたのは強ち娘の罪でもない、何しろ可憫想な事であると、又しても同情の念を起したのでございます。

米本は猶もオド〳〵、

『そりやア彼の娘も、家に居りましては何にも面白い事はなし、本當に可憫想なのでございます、それに縹緻だつて、マア私の口から申すのも可笑しなもんでございますが、滿更でもなし、自分でも然う思つてをりますから、若い身空をムザ〳〵凝乎としてゐることも詰らないなんて考へを出したものでございませう、誠に道理でございますが、いくら若氣の至と申せ、親の私に一言も云はず、手紙一つ遺さずに出てゆくといふ、誠に情無い事でございまして、私も掌中の珠とやらを奪られたやうに、もう氣落がいたしまして、此通り手も體軀も顫へてをるのでございます、ハイ、如何したら宜しうございませう、生れ落ると手鹽にかけて、此年紀まで參つたのに、親の心子知らずに出て行くといふ娘、今頃は何處に何うしてをりますか、私は殘念で堪りませんハイ、考へると情なくつて堪りませんのでございます。』

米本は纔と泣くことを止めて了つたが、依然悲嘆に堪へない容子、見てゐても氣の毒で堪らぬので、かつ子はムヅと其兩手を捉へて、他に慰める言葉が無いから、只繰返して「御氣の毒ね、本當に御氣の毒ね」と云ふばかり、で氣を周圍へ外らさせやうと、又萬國銀行の話に戻つて、お前さんに默つて

株を有たせて置いたのは自分が惡かつたといふことから、姓名を口へ出さずに、夫となく庄兵衞の事を手嚴しく攻擊して聞かせました。

米本は庄兵衞の爲に、大變な目に逢つてるのだから、かつ子に同じて一緒になつて、庄兵衞攻擊を並べると思ひの外、まだ依然相場に頭腦を奪られてゐると見えて、庄兵衞に肩を入れて、

『相良さんは始終私に、賣るな〳〵と仰有つていらゝざんしたが、全く御道理でございました、大變巧くいつて終局は大當りになるところだつたのを、裏切者が現て來た爲に、今度のやうな事になつたので、私は據所ないことだと諦めてをりますのでございます、何豈貴女相良さんに惡いことなどはありやしません、嗟焉々々、これからだつても、相良さんが在らしつたら、巧く行くんでございませうにな、如何いふ譯で法律に觸れるなんていふことになつたのでございませう、相良さんがいらッしやらなくちやア、私等はおあいだです、相良さんより外に私共を救つて下さる方はありやしません、私は裁判所の人に然う云つてやりました、相良の旦那を渡して下さいッて、相良さんを返して下されば私は更に身上有ッ丈けは勿論、生命でも何でも差上げて了ひますつて、然う云つてやりました、本當に彼樣な有難い方は餘まりあるもんじやございません……。』

意外な米本の言葉に、かつ子は只だ開いた口あんぐり、其まゝ顏を見詰めてゐた、內心些とやそつと恨んで居やうと思つたに、立腹の言葉一ト言なく、非難の聲一聲なく、唯一心不亂に信用してゐるといふ、寧ろ不思議なくらゐである、如何いふ魔力を庄兵衞は此等人間社會に有つてるのか、殆んど神樣みたやうに深く信仰されてゐると、かつ子合點がゆきませぬ。

『奧樣、今日私が御目通りを願ひました次第は、唯一通り只今のやうな言を御耳に入れたいと思ひました爲で、自分勝手に嫌な哀しい事ばかり申上げて甚だ相濟みませんが、實は一人で如何して宜いか持餘しまして申上げたやうな次第で、何卒御勘辨なすつて戴きたうございますハイ、それから貴女何卒相良樣に御逢ひの節は、私共は相良さんを固く御信用申してをつて、何でも彼でも相良さんの事なら致します積りだと、呉々もお傳へなさつて下さいまし、何卒御願申ますハイ。』

米本は危げな足許をヨロ〳〵させながら、遂に歸つていつて了つた、跡にかつ子は只一人、茫然といろ〳〵な事を考へて、ア、可憫想な米本老人、氣の毒で堪らない、夫につけても數知れぬ人々に悲嘆と迷惑を醸した彼の人は――姓名を云ふさへ厭なことだが――何といふ惡い人間だらうと、腹立たしさが止められません。

九

米本と前後して、一ト息つく間もなく、他の客が間斷なしにやつてきたが、今朝は何した工合か中々忙しい、其中にもう一人、かつ子の胸を痛めさした來客は他でもない、曾根悅良夫婦、此夫婦は何か

少し混雜つた用向になると、屹度仲好く揃つてやつてくる、今日も連立つてやつてきた。

今日の用向といふのは外でもない、女房の里方の毛利の有つてる萬國株の事で、株はどうしても最早金になる道はあるまいかと、直接にそれを聞かうとして、それでやつて來たのでございます、毛利も矢張此度の暴落一件で恢復のならぬ窮境に陷つて、一家擧つて大騒をしてゐるので、未だ株の景氣が好かつた時、毛利が買つた株は積つて七十五株になつて、其買入に拂つた金が約八萬圓であつたが、それが一株三千圓といふ相場になつた時には、株の總代金が二十二萬五千圓になつたのだから、實に旨い話であつたが、相場熱と慾を好加減のところで切上げて置けば宜かつたのに、もつともつとと思つた爲に、末が却つて大失策、加之に騰ると見込んでの事だから、資金の用意なしに買續けた夫が此度の大崩落、大變なのは當然だ、拂ふべき鞘の總金高が二十萬圓といふ巨額を超えたのだから、何にも此にも仕樣がない、こればかりはと遺してあつた無けなしの財産卽ち三十年も孜々矻々と働いて一年千五百圓許り上つてくる其資本財産も、滅茶々々にして了つた始末、今日では全で無一文、無一文どころか平生自慢しきつてゐた壁川町の小さな住居を賣つたにしたところで、借金を濟ますことも難かしからうと思ふ仕儀、實に毛利一家の浮沈にかゝる一大災厄でございます、而して此災厄には毛利の父親本人よりも、妻女の方が罪も責も深いのでございます。

こんな大變な騒の最中でも、相變らず冴々とニコ〳〵しながら、まる子はかつ子に說明して、

『奥樣、母の變り方といふものが夫は〳〵大變なものでございますの、元來母は物事に細かくつゝましやかで、勘定などには中々嚴しい人でございましたが、相場の味を覺えてからは悉皆人間が變つて了つて、只もう夢中、初め父が母に秘密で相場を行始めて、隱れては新聞の相場付なんどを讀んでをりますと、夫を發見けて母は憤然になつて、父に異見をして居つたのでございますが、終には母の方が相場の熱に浮されて、此度は却つて父よりも夢中になるといふ始末、然うなると氣も荒くなり、物事が不眞面目になつて、世帶の事もダラシ無く、本當に困つちまつたのでございます、ですが相場といふものは斯うも人間を變へて了ふものでございますかねヱ。』

とこれから萬國銀行株の話に移つて、何とか金になる仕樣はあるまいかと、かつ子に相談いたしたが、他に何も方法も無い、

『迚も難かしうございませう、今の相場は三十圓でございますが、これが猶且下るかも知れません、二十圓にも十圓にも、只の五圓になるかも知れません、最早これで終局でございませう、本當にお里の御兩親も、今迄御不自由の無い御身が急に斯なつては、御氣の毒でございますねヱ、如何なさるんでございませう。』

『どうも仕方がございません、これからは出來る丈け私共が何とか世話をしてやらなきやなりません、私共は今日未だ御金は毫ともございませんが、マア段々と工面も出來

てくる積りでございますから、眞逆父や母を路頭に迷はせることもいたしません。』

曾根は此頃少許り仕合の好い事があつた、今迄隨分永い間、種々の著書を書いて筆でやつて來て見たのであるが、何にも成功したものが無い、碌に金にもならぬでゐたが、此度或新聞へ續物にして載せたものが當つて、此を引受けて出版する書肆が出て來て、俄に好い機運が向いて來た、斯くして二三千の纒つた金が懐中へ入つたので、サア急に景氣が好い、斯うなると彼方からも此方からも出版を引受けるといふ書肆が現て來て、原稿の値段も糶上る、曾根は大喜び、まる子は固より、勢ひが生て來て、こりやア一番大に發展して名を顯し金を儲けやうと、氣も大分大きくなつてをりまする。

『宅へ引取つて世話を見て上げても宜いが、それでなけりや何處か別に、小さな家でも借りて住はしてあげる、マア如何かなりませう。』

まる子は良人の優しい言葉に、包み切れぬ嬉しさを顏に現はして、シゲ〳〵良人の方を見てゐたが、軈て又鬱いだやうに嘆きはじめる、かつ子はこれを慰めかた〴〵、

『まる子さん、貴方其樣に嘆いたつて仕樣がありません、御廢しなさい、ね、何が哀しいんです、泣いたつて仕樣が無いぢやありませんか貴女。』

『哀しいから泣くのぢやございません、只餘まり馬鹿々々しいから私悔しくつて堪らないんです、ねエ奥樣、私が曾根の所へ嫁る時に、平生始終私に話して聞かしてゐた私の身についた財産を、父や母は私に付けて呉れるのが當然ぢやございませんか、夫を父や母は、悦良は一文無しだから金を付けて與つても仕樣が無いの、私が婚約を馬鹿堅く守つて貧乏人でも可い是非曾根の所へ行くと言張つたのは親の意に背いてゐるのと、鐚一文私に付けずに嫁づかしたのは、貴女隨分酷いぢやアございませんか、罰ですわ、父や母が今日のやうな目に遇つてるのは……、私の嫁く時にお金を付けて寄越しておけば、今日私や曾根から威張つて世話もして貰へて助かるんでございますのを、それを私に呉れない罰で、相場で損して了つたんです、本當に好い氣味でございますわ……。』

＋

かつ子と曾根は、まる子の子供らしい言葉が可笑しくつて、顏見合せて笑つたが、本人はそれで機嫌を直すかと思ひの外益〻泣いて、口吃りながら續けて云ふ、

『そればかりぢやありません、未だ曾根が困つて居た時でした、一晩私は夢を見ました、其夢は、私が宮樣の妃で、其宮樣が大變貧乏なのを、私は何卒して大詩人にしたいと思つて、何處からだかしら巨額なお金を持つて來て渡したと、斯ういふ夢なのでございます、私は夢にまで夫程に思つてゐるんでございますが、それが貴女如何でございませう、今私は良人の爲には御荷物になつて了ひ、里の人と一緒に厭がられて邪魔になつて、何もかにも良人に迷惑をかけてる譯です、私は氣の毒で堪りません、本

當に如何したらいゝんでせう。』

『オイ〳〵まる、お前何を下らん言を云つてるんだ、僕が何時お前を御荷物にした？　お前が鐚一文持たずに僕の所へ嫁いたことを何時何うの此のと云つた？　女ッてえものは嫁くときに必ず何か持つて來なければならぬものぢやない、第一何にも持つて來ぬぢやないお前は持つて來たぢやないか、お前は若い元氣と僕を親愛するといふ情と好い氣質とを持參して、己の所へ來たのぢやないか、夫より外に持つて來やうは無い、それで澤山といふものだ。』

此優しい良人の言葉にまる子は心から安心する、此んなに亭主が可愛がつてくれてるものを、何故泣いたりなどしたかと、今更ながら面目ない、悅良は猶もつゞけて、

『阿父さんや阿母さんさへ宜ければ栗島へ家を借りて住はして上げてもいゝ、過般一寸した庭付の、それで家賃が恰好な家を見ておいたから……、何豈阿父さんさへ承知なら此家へ一緒になつたつて宜が、道具はあるし些と狹いからナ。』

斯う云つて此時更に笑ひながら、仲の好い夫婦關係に頗る感心して聞いてゐたかつ子の方を向いて、

『それにねエ、正直を云へば今に子供も出生るに違ひない、然うなつた日にや猶ほ狹くなる、何にも持つて來なかつたのが恥しいと云つて泣いたつて、子供といふ財產を拵へてくれる譯ぢやないか、ねエ濱野さん然うでござんせう？』

子供と云はれて、今迄子供を有つたことの無いかつ子は、氣耻しい心がして、まる子の方を打見やる、成程始めて氣がついたが、まる子の腹部は少し大い、今更ながらかつ子は吾身の薄命を思出して眼に涙の湧きでるのを禁めませぬ。

『本當に貴方がたは御幸福でござんす、マア〳〵仲好くして末永く御暮し遊ばせ。』

夫婦は暇を取らうと、一遍立懸つたが、又留つて、悅良はこれから希望新聞の事をいろ〳〵と話をする、元來悅良は筆の人で、實業とは職業違ひだから、商賣の事といふと怖ろしい事に思つて、何時も厭な顏を致してゐる、今希望新聞の話をするにも、夫が先へ立つて致します、希望新聞社は全然相場で固めた社で、上は社長から下は給仕に至るまで、相場を話さぬものは無い、否相場に手を出さぬものは無い、行らぬのは先づ自分限り、其爲に諸人には除者にされる、愚にされる、全く社中に相手にされなくなつて居つた、然ういふ有樣で、相場で持切つてゐるのだから、此度萬國銀行の倒れたこと、殊に相良の捕縛になつた事實は、悉く〳〵新聞社に影響して、社は全くの廢滅、編輯員は勿論、社員は悉く離散したが、只彼の矢野丈けは執念くも踏留つて、殘留物で生活の道を得やうと、心ばかり焦つてゐる、がしかしそれも最早終焉、つまり此三年間、浮雲のやうな富を得て、金で買へる程の榮華は極めたが、一朝煙散霧消して今は空々寂滅世界、宛然饑餓に迫つたものが、俄に美食に有付いて餘り急に詰込んで、爲に不消化を起してきて、身體を損じた樣になつた、此に不思議……否不思議で

ない理の當然は外ではない、三田夫人の復と起つことの出來ぬ失敗、夫人は此程來矢野と怪しい關係を結んで居つたが、此度の失體暴露以來、脆くも矢野と共倒れ、狂氣のやうに騒いでも喚いても、其資産は去つて歸らぬ、誠に笑止の事である……、と曾根は斯んな事を笑ひながら、かつ子に語つて聞かせました。

三田夫人と聞いたかつ子は、心裡に一寸冷乎としたが、夫人とかつ子とは庄兵衞に對する敵同士であることなどは、知らぬが佛の曾根は話を結んで、

『一體如何して夫人は矢野に關係することを承知したか、私にや解らんが、或は矢野が新聞社の奥に坐つてゐるから種々相場上の機密を疾く聞知る便りがあつて、これと關係を結んでおけば自分も相場をする上に何かと聞出せて便利と思つて、其考へからの事でせう、それが今日共潰れとは、誠にハヤ氣の毒千萬、併し矢野君が以前株式界で働いてをつたとき、夫人の親父さんのところへ始終用聞きに行つて、親父さんに隨分酷

い目にあつて一日殴られたことさへあるといふから、今日の端目は其自然の應報で、親父に苛責られたのを娘に復したわけなのでせう、過般も然うでした、私が受取る金があつて新聞社へ行つた時の事でしたが、私が矢野君の室へ入ると、恰度矢野君と夫人が何か爭論をしてゐる時で、やがて矢野は夫人の横ッ面を殴りつけましたが、隨分亂暴極まつた仕打で、何ぼ何だつて社交界に多少の名ある貴婦人の横ッ面を、紳士たるものが殴り飛ばすなんて、全く醉たくれの破落戸漢が行る業でござんさア……。』

十一

餘まり非道い話なので、かつ子は聞いてゐられずに、曾根の話を遮つて止めさせて了ひました、他人事とは思へない、宛然自分が恥辱でも受けてる樣に、かつ子は感じたのでございます。

夫婦はこゝで暇を告げる、まる子は起上つて、

『本當に今日は飛んだ御邪魔を申上げて、それに自分勝手の厭なことばかり御聽かせ申して、御迷惑でございました、何卒御勘辨なすつて下さいまし、申上げて置きますが、悅良は何處までも相良さんを贊成して、相良さんの爲ならば盡す積りでをりますのです。』

悅良も口を添へて、

『固よりです、私は相良君には種々御引立を被つてる、殊に皆崎の一件に關しては一方ならぬ御援助を頂いて居つて、御恩は忘れぬ積りでゐるです、實に相良君といふ人は、意志の強い敬服すべき人でござんす、貴女何卒相良君に御逢になつたら、私共は永く有難い御恩の程を忘れぬでゐると、然う仰有つて下さいまし。』

曾根夫婦は暇を告げて、かつ子の所から歸つていつたが、跡にかつ子は只一人、考へてみると何となく腹が立つて堪らない、有難い恩人だといふ、何が有難い恩人？　現在肉親の毛利一家が彼樣な目に遇はされてるのに何が有難い譯だらう……、曾根夫婦も米本と同じに、有難い〳〵を、心から繰返して歸つて行つたが、米本は彼んな人物だから只理由も判らず騙されて、一圖に相良を有難がつてるかも知れないが、曾根は何しろ新聞記者、財政界の事にも通して、それで金錢の事といふと呪つてゐる人である、無學文盲の人とは違ふ、理屈も判つてるべき人だのに、其人が矢張相良を信用してゐるといふ、如何いふ理由か判らない、有難いどころか怪しからぬ、許すべからざる人物だ、人を害ひ不幸を釀し、彼我を絶頂まで墮落させる、それは皆相良めだと、かつ子獨り大不平。

此日かつ子は兄敏之に關する裁判所へ出す書類のことで增島の家へ行くことにしてをつた、それと猶一つは、增島に逢つて若し裁判の進行上增島が證人として召喚されることになつた時に、增島が何んな態度を執るだらうといふことを、それとなく探つてみやうと、彼是れ今日行くことにしたのである、面會の約束時間は、場が濟んで後四時といふことにしてあるから、未だ少し時間がある、そこで一時間半ばかり、兄に關する書類を種々と蒐めて、取調べた、見ると段々判明つてくる、宛然火事場の火が消え煙が去つて何處に何があるか〻明かになり、金銀やなどの道具の熔けてゐるのが發見されてくるやうに、事實が漸次判明つてきた。

かつ子は先づ第一に、現金が何處から何處へ如何なつたかといふことを探索してみた、此度の事が暴露した跡で見ると、二億といふ金が全然何處へ去つて了つた譯になつてる、一方或る金高が空虛になれば一方夫れ丈の金が入つた理屈でなければならぬから、さて其金は何處へ入つたかといふと、大部分は弱氣の手へ入つた譯であるが、しかし三分一は洩りに取られて了つたに相違ない、取引所に亂高下があつて一般に市場に慘害がある時には、地面が金を吸ふと云つて、何處へとなく滅量が出るものだ、卽ち少しづゝ諸人の手へ入るのだ、そこで一つ見積を立てゝ見る。

先づ第一に、郡代一人の懐中へ入つた金が五千萬圓はあるだらう、之に次いでは醍醐で、其高は千二百から千五百萬、外に、福岡侯爵は狡い方法を行つて巧く儲けた、といふのは、彼は增島の店で强氣で買つて、谷田部の店で弱氣の賣に出て、暴落の結果增島の方へは小便を引かけて、而して谷田部の方で二百萬を儲けた、と斯ういふ事である、侯爵はチヤンと覺悟がしてあるから財產一切を自分の夫人の名前に書直して了つたが、一方大小便を引かけられた增島は何ぼなんでも默つて居ない、

詐欺同様の侯爵の此行法を聞知つて、酷く憤つて、事件を裁判沙汰にすると敦圉いてをるさうだ、それから、萬國銀行の取締役連は如何かといふと、殆んど皆巧くやつた、或者は由利や小部のやうに此度の大暴落が來ぬ前、値段が一番飛上つた時に賣放して大儲をやり、又或者は福岡侯爵や醍醐みたやうに、途中弱氣に一轉して大當に當てた、それどころか中々巧くやつたのは、銀行の尻が破れかゝつた時最後に在つた總會の折に、取締役會で決議して取締役一名に付十何萬圓かの特別手當金を定めて取つて了つたことで、甚だ怪しからぬ事である、終りに、仲買人の内では、土井と谷田部の兩人が非常な高を儲けたといふことだが、併し此兩人は外に大の減途を有つてるから、割合に金は殘らない、卽ち前者は女といふ道樂があつて、いくら注込んでも吸取られて了ふし、後者は好な相場へ賭つて了ふから、殘るところは無くなつて了つてる、それと等しく、人の噂に由ると、成瀬も當りやになつて、場外で屈指の金滿株屋になつたとのこと、此男は相良の爲めに買つてゐたが、自分の思惑では賣つて、其間に彼是れ三百萬を儲けたといふ事、中々巧い立回はりをやつたので、仕合せの好いには相違ないが、夫と同時に中々狡い行法をやつたのだ、といふのは彼は萬國銀行の勘定の方では損をした其損の方は拂はぬで、得をした方ばかりを取つたといふ、誠に割の好い話でございます。

十二

かつ子は斯う數つてみたところで、少しづゝ金のいきさつを知り得て來たが、數字が漠乎してゐるから誰が何の位利得をしたか確なところとなると判らない、第一取引所の取引方法は秘密を保つて行はれてゐて、仲買人同士も商買上の秘密を嚴守してゐるから、出入の精密なところは如何しても知り得ない、手帳や控帳やなどから一々拾ひ上げるにしたところで、相手の姓名が書いてなかつたり、書いてあつても符牒だから、薩張判らぬでございませう、かつ子は殊に注意して、彼の阪谷は何の位金を持つて逃げたか——阪谷は取引所の最近の受渡の前日に逐電して了つたのでございます——種々と銀行の文書から了べて見たが、如何しても判らない、が兎に角此方でも增嶋は大分引かけられて、殆んど致命傷を受けたと云つても宜しいのだ、全體增嶋は阪谷の素性を知つてゐるから、初めの内は用心してかゝつて、而して阪谷の方でも最初の數ケ月は二三千圓の證據金を增嶋の店へ預託して、猫を被つて故意とチビ〳〵相場を行つてをつたので、用心をしてかゝつてゐた增嶋も段々と釣込まれて、遂には證據金の少いことも忘れて了ひ、悉皆友達交際になり、到頭大きな相場に乘せられて、引かけられて、而して逃げられて了つたのでございます、增嶋は嘗て相場界荒しの白須を訴へたと同じやうに、此度は阪谷も訴へてやると敦圉いてをつたのだが、其阪谷が何時の間にか風を喰つて姿を隱して了つたから、何にも此にも仕樣が無い、大方彼は又何處か外國の取引所へ入り込んで、人を惱まし煩累を及ぼしてゐることでございませう、人の話に由ると、何でも伯林の株式取引所へ潛り込んだとい

ふこと、が、人が忘れた頃に、又ノコ〳〵巴里へ出て來て、顏を現さうと考へてるに違ひないのでございます。

かつ子は今度の騷で金を儲けた連中に就いて調べた一方に、又金を損した失敗の方の人間をも調べてみた、これが頗る夥しい、慘害は殆んど巴里全市に渡つて、宛然將棋倒しみたやう、彼方でも此方でも、昨日も今日もといふ風に、破産倒産踵をついて現て來てゐること、恰かも火事場の跡に燒殘つた柱や壁が一つづゝ倒れて行くやう、其物凄じい音響は何時になつたら止むだらうと、思はれるくらゐでございます、かつ子が情無い思をしたのは、銀行や會社や其他財界の人や物やが恐慌渦中に捲込まれて損害を招いたことではない、然ういふ人々は職業上だから何んな端目に陷らうと仕方が無いが、此度やられた連中には自分の親友だの懇意だの、中以下の、金の無い苦しい友達だの小株主だの、又罪の無い相場師やなどが入つてゐるので、それがいかにも氣の毒で可憫想、先づ指を折つて手近から數へて見る。

可憫想な米本を初として、愚な毛利の人達、同情に値する芳村母子、夫から又一ト倍氣の毒でならぬのは昨日愈〻破産をしたといふ生糸屋の瀨藤、此人は銀行取締役中での正直者、否世界中でも珍らしい程の正直者、考へると本當に相場ほど恐ろしいものはない、此瀨藤は三十年といふ永の歲月、孜々矻々正直一圖に働いて、今迄巴里でも最も手堅い店舗の一つと云はれた暖簾、それが一朝相場に引かゝつて、宛然一ト吹に粉が吹飛ばされて了つたやうに、形をとめず消え亡せて了つた、定めて彼は後悔の念に腸をかきむしつてをることだらう、百日の說法屁一つ、正直な方法で粒々拵へ上げた資產を、一時間の內に大きくしやうとして反つて磨り潰して、今は最早商買も續けられず、纔た一人の伜は放蕩者に生れついて、何時も〳〵借金ばかり、金に窮つた揚句には破落戶の仲間入も仕兼ず、如何な惡い事も行兼ぬ代物、聞けば此木糸枝に飛んでもない纏つた金の證書を取られて、大變な悶着になつてるといふ噂だ。

それから猶一人かつ子が痛ましく思つた人間は、才取りの馬島小吉、これが又一方ならぬ損をした一人で、四方八方借だらけ、全で身動もならぬ始末、そんな端目になつたゝめか、今迄日夜相場で行つて來た其取引所を、今日は糞味噌のやうに云つてゐる、誠にハヤ勝手な事で、……。

さて判つてゐる人間は此んなもので、此他に知れて居ない無數の負傷者、戰死者、姓名も被害程度も判らぬ素人黑人、考へるとかつ子は氣の毒で堪らない、殊に無けなしの財產を棒に振つた小世帶の連中、二つか三つの株を後生大事に生命の綱にしてゐた無職の人達、少許の有金を萬國銀行の株にサラケ出してそれを倒されて了つた輩、少しの給金の內から食ふものも食はずに纏つた金を作り上げて株へ卸した小使や門番人、賽錢を貯めて纔と株を買つた田舍の僧侶、粒々辛苦の百姓、小使錢を齷齪貯めて買つて生命から二番目にしてゐた株が潰されて了つた婆あややおさんどんや權助、誰も彼も路

頭に迷ふ塗炭の苦しみ、悲慘と云はうか殘酷と云はうか、かつ子は此事に考へ及ぶと、情無いどころか腹が煮くりかへつて、不快で不快で堪らない、安多摩で取立業を營つてゐた例の深澤が此度の事變で姿を隱して了つた爲に、此深澤に萬事頼み切つて資金や株を任せておいた其地方の人々の騒ぎ、之も並大抵ではございません。

何しろ毎日何百本といふ照會や失望の手紙が銀行宛でやつてくるが、夫れを受取つかつ子の苦しさ、ハラ〳〵するより外はない、全體深澤は得意客から託された資金や株を、注文丈けに賣買してゐれば何の事は無かつたのだが、自分の思惑へ其資金や株を使用して、而して今度の崩落となつたのだから、何とも此ともする事が出來ず、遂に逐電して了つたので、不幸其手に懸つた田舍の小百姓や、引込んで公債株券の利子で食つてゐた人達は、怒るどころか泣いて騒いでるといふ始末、影響は宛然酷烈な流行病が流行つた跡のやう、流行病が重に中以下の社會人間を犯すと等しく、此度の株騒ぎも中以下の人を倒した次第で、之を恢復すには子供が大きくなる頃でなければと思はれるのでございます。

十三

遂にかつ子は增島の店へ行かうと出懸けた、で、徒歩で番久町の方へ降りていつたが、それにつけても增島の此度の損害は非常なものだらうと、かつ子は途上考へて歩行いたのでございます、此度の崩落で彼が深澤に引かけられた高ばかりでも三十萬圓は確かだ、例の阪谷の爲めに被つた損害は其倍卽ち六十萬圓、それから福岡侯爵と三田夫人から不支拂になつてる鞘が百萬圓以上、瀨藤が破產した爲に取れなくなつた高が殆んど夫と同額、固より對萬國銀行の、銀行が增島から借になつてる金額約八百萬圓は此外なのだ、之を合計にして千二三百萬といふ大額の損耗、堪つたわけのものではない、世間も之を知つてゐるから、氣の毒な、增島は今日か明日には破產して了ふだらうと、取り〴〵の噂である、爰に、暴露かゝつてゐる增島の危機を間一髮に暴露させるだらうと思つたことが持上つた、猶一ト滴の水で鉢の水は溢れるといふ端目を作らへた、といふそれは外ではない、前々日のことであるが、增島の店員例の福本が、店の金十八萬圓を誤魔化したといふ尻が破れて、其筋へ捕はれの身となつたことでございます。

此福本は以前、女優、といふと立派だが某劇場で纔と居並びの侍女くらゐを勤めて內職には旦那取りをしてゐた川村花子を手に入れて、初の內は安料理屋小待合などで逢つて樂んでゐた夫が嵩じて金堂町へ一軒家借をして圍つて置いて、夫から又段々と增長して、ヤレ指輪ソレ時計と强情られるやうになつて、金の要ることばかり、それから遂に大の費消をするやうになつたのだ、元來福本といふ男は、氣の小さい寧ろ優しい、大きな事は出來ない男であるが、サドワ事件の時に思懸けない一萬圓といふ生れて初めての大儲をやつたのが、抑も遊蕩に耽つた原因で、濡手に粟で手に入つたゝけ、夫れ

丈け疾く費つて了ふ、金は無くなつたが一方遊癖は止められない、利益になるから女は益〻附隨いてくる、金は益〻足りなくなる、店の帳面へ穴を明ける、此穴を埋めやう爲に他の店で無理な相場をやる、それが外づれる、サア二進も三進もいかなくなる、遂に埋草が無くなる、と斯ういつたやうな始末、結局後へ手が廻はつたのでございますが、質が正直な男であるから、監獄へ入つてからも恥辱と失望とで泣通しだと申すこと、阿母も悴が入牢の當日國の三州からわざ〳〵駈つけてきたが、悴のことが原因になつて、直と其宿にした知合の家で寢込んで了つたとの事でございます。

かつ子は段々歩行いて、取引所前の廣小路へやつてきたが、本當に運命といふものほど不思議なものは無いと、染々と考へた、纔た四年の間に一足飛に大々的成功ををさめて榮華を極めた萬國銀行、それが纔た一ト月經つか經たぬに、煙と消え粉と散じ、影も形も無くなつて了ふ、怖しいと云はうか不思議と云はうか、如何考へても理屈が譯らぬと、かつ子染々心に思つた、此増島の事も同じ事、年齡は未だ三十三だといふのに、一朝天から降つたやうに、伯父から大資産と店とを引繼いで、大變な幸運者となつたところへ、自分も美男に生れついた其上へ、人も羨む美しい妻君を貰つたかと思ふと、男女の子供が二人も出來て、家庭は此上もない幸福、殆んど瞬く暇に取引所社會で評判の好い大暖簾になつて、益〻勉强はする、關係は廣くなる、信用は堅くなる、前途非常なる多望であつた、それが一朝倒産して、危機一髪、一ト吹吹けば飛ばされるやうな今日の形勢となつてゐる、思へば不可思議な成行である、其癖増島は自分の思惑で相場を行つた人でない、職業に熱心な、未だ若いから萬事に注意深く行つてきた、要之不經驗なのと情に熱したのと餘り人を信用し過ぎたなどの爲に、此樣なことになつたので、それであるから人々も大に彼れに同情して、今日の難場から何卒救濟してやりたいし、又切拔けることが出來やうと、誰も彼も云つてをる……。

かつ子が増島の店へ入ると、氣の爲か凋零沒落の匂がして、店の中は何となく哀れに物淋しく感じられ、店員も憂情を心裡に隱してゐるらしく思はれた、會計係の間を通り拔けて奥の方へ行くと、其處に二十人ばかりの客が居たが、これは無論金や株を受取りに來てゐる人達で、會計係の店員は心配しい〳〵、成たけ緩々した手容で最後の抽出から取出しては、請求に應じてゐる、半分開放しになつてゐる戸から、受渡係の事務室を覗いて見ると、室内は眠つたやうな靜かさ、七人の事務員が居はするが、取引所が休業同樣で用も無いから、皆新聞を默讀してゐる、總體に沈んだ裡に、只少し活氣があるらしいのは現物係の室だけだ、かつ子の應待に出たのは支配人の金森で、主人が破滅に瀕してゐるのだから顏の色澤迄も蒼くして、全で落着かぬ容子でをります。

かつ子の問に答へて、

『左樣でございますな、如何でござんすか、多分主人は今日は御目にかゝることは出來ないかと存じます、主人は昨夜火の氣の無い室で徹夜事務を執つて居つた爲に、今日は工合が惡いと申して、先刻

迄此處に居りましたが、二階の自分の室へ引込んで少し休むと申してをりました。』

十四

が、かつ子は是非逢ひたいと、

『貴方寸時でも宜しうございますから、是非御目にかゝりたいので、何卒御傳へなすつて下さいませんか、實は兄敏之の身上の事に就いて御話を申上げたいと存じますので、兄が助かる助からぬも、偏へに御話に由ることかと思はれるのでございます、と申しますのは、兄が取引所の商内の方へ關係してをりませんでした事は、此方の御主人が熟く御承知の事だと存じますから、御主人が證人に御出なされて、其事を一ト言云つて頂けば、兄が無事に無罪になります譯で……それから又他に種々と增島さんでなければ判らない書類や金高の事がございますので、何卒是非……。』

切に云はれて金森は斷るにも斷られず、躊躇しい〳〵、そんなら主人の室へ御案内と承知して、

『濱野さん、では何卒……。』

案内につれて二階の增島の寢室に續いてゐる書齋へ入つたが、入ると同時に、かつ子は總身に急に冷氣を感じた、煖爐の火は昨日から消えたまゝになつて、夫れッきり誰も搆はぬで置いたのでございませう、室が大きいから餘計に寒い、而して俗に火の消えたやうだといふやうに、今此室は何となく陰氣に充ちてをります、こゝに他人外來者であるかつ子が不思議に感じたことは他でもない、此室内が綺麗薩張と片付けられてあることで、昨夜から今朝へかけて、時間を全然室内を片付けることに費つたかと思はれるやうな片付方、抽斗から戸棚文庫書棚、明けるものは明け仕舞ふものは仕舞ひ、要らぬ反古は棄て、要用のものは始末し、書類のやうなものは愚か紙切一つ、其邊に落ちて居りません、卓の上を見るといふと、インキ壺とペン臺と枠付吸取紙が規則正しく置いてあつて、其眞中には店の青色の注文用紙の一束になつたのが置いてある、總て露出しの此光景の裡に、無限無言の憂愁が著しく感じられてゐるのは不思議千萬でございます。

やがて二三分經つたかと思つたら、先へ立つた金森が現てきて、

『奥さん、今二度ほど戸外から叩いてみましたが、返事がございませんから、私は見合はして參りましたが、若しなんなら、貴女御自身に一つ訪づれてごらんになつたら……、併し如何でございませう、又出直して御入來になつた方が宜からうかと私は存じますが。』

何も仕方が無い、然うしやうと、かつ子出懸けは出懸けかゝつたが、未だ矢張躊躇して、兎も角も一遍自分で戸を叩いて見やうかと、手を戸の所へやつてみたが、又考へ直して、遂に此日は止めにしやうと、立歸らうといたしました。

すると此時、室内からけたゝましい大聲で物を叫ぶ音が聞えた、ハテ何事であらうと、歸りかゝ

つたかつ子、足を留めて其方を見てゐると、増島の室の入口の戸は内部から開かれて、一人の下男が飛出した、見ると、顔色を蒼青にして、恐怖に打たれてゐると見えて、手足もワナ〳〵、階子段の方へ駈けながら、

『大變！　大變！　疾く疾く……。』

かつ子は身動きもせず、開ッ放しになつた戸口の方を見てゐると、室の中から愁傷や悲痛の聲々が明かに聞取れる、此を耳にしたかつ子、戦慄乎して、室内の出來事を大抵推察した、大概の婦女なら此で逃げて歸るのだが、精神の健固したかつ子、憫惑と氣の毒の念が湧いて、歸るにも歸れず、一遍會つて同情の涙を濺いでやらうと、勇氣を鼓して室内へ入つた。

見ると、下女と小間使でございませう二人の女がオド〳〵しながら、大聲を上げて喚いてゐる、

『旦那が……、旦那樣が……、大變でございます……。』

冬の薄白い死んだやうな光りは、厚い絹の窓懸布の透間から力無げに室内へ入つてゐるが、暖爐に入れてある太い薪が眞赤になつて燃えて、四邊の壁に映つてる位なので、室内は中々暖かい、卓の上を見るといふと、今を盛りに咲揃つてゐる美事な薔薇の一ト束が花瓶に挿してあるが、之は纔に前の日に増島が女房に持つて來て贈つたもので、溫室みたやうな此暖かい室に入れられたから、咲き放題に蕚を破つて、室中一杯に芳香を放つてゐる。

で、暖爐の赤い火に映じて、増島信平は長椅子の端に倒れたまゝ、手に短銃を握り、頭骸骨は悉く彈丸で破碎されて、哀れなる死樣をいたしてをります、其死骸の前に突立つたまゝでゐるのが未だ年齢若の妻女駒子、兇變に駈付けて今し我を忘れて大聲を上げた其聲が、階段のとこへまで聞えたのでございます、銃聲が聞えた時妻女は五歳になる男兒を抱いてゐたが、此兇變に抱かれた兒も驚いて其小さな手で母親に嚙りついてゐる、母に跟いて七歳になる小さな娘も怖わ〴〵母の袂を押へたきりオド〳〵してゐたが、母が泣號んだのに理由も知らず、一緒になつてワイ〳〵泣く、抱かれた兒も共に泣だす、其光景は實に悲慘の極でございます。

此處に居て良人の情無い光景を見させて置くのは酷いと思つたから、かつ子は母子を室外へ運び出さうと促して、

『奥さん、サア後生です、彼處へ御いでなさい、サア奥樣、奥樣……。』

といふ其自身もブル〳〵もので、自分で自分の身體を支へることが出來ません、怖は〳〵增島の頭骸骨の、彈丸の入いつた穴になつたところを見ると、未だ血がボタリ〳〵と流れて、長椅子の天鵞絨の上へ傳はつて、床の絨氈の上へ落ちてゐる、絨氈の染點は漸次にじんで大きくなつて參つてをる、かつ子は氣の爲かして其血が自分の方へも跳ねてきて、足や手も生臭くなつたやうな心地がした。

十五

かつ子は猶も、

『サア奥さん、後生です、奥樣サア私と、私と一緒に……。』

と促したが、頑是ない男兒には首筋へ齧りつかれ、物心のついた娘には裾にすがりつかれて、憫なる母へは何の言葉も聞えばこそ、其場へ根が生えたやうに鯱子張つて了つて、世界中何んな力のあるものを連れて來ても動かすことは出來まいと思ふやうになつて居ります、母子三人とも色白の、熟く似た容量好し、平生は平和に可愛らしい其口から、今日は世に最も怖ろしい叫喚の悲聲を發してゐるのでございます。

かつ子は最早溜らない、其處へピタリと坐つて了つて、只獨言のやうに怒鳴つてゐる。

『アー奥樣、私は胸が裂けるやうでござんす、ねヱ奥樣、貴女後生ですから彼方へ行つて下さい、サア私と一緒にお隣の室へ參りませう、御願ですから……、此樣な酷いところを見て御嘆きなさる、何うして私はそれが見てゐられませう、サア奥樣、私の爲だと思召してサア……。』

か母子の耳には何言も聞えない、依然大聲を上げて泣き崩れつ、喚きつ叫びつ、狂氣の如くになつてをります。

殆んど施すべき術が無いので、かつ子は途方に暮れて、何かなしに身を起しかゝると、此時足音や人聲が聞えた、必定醫師が來たのに相違ない、此上此家に居ることは出來ないから、かつ子は之を機會に此家を出て參る、妻女の叫喚の聲は依然、廊下へ出ても、階段を下りても、戸外を通る車の音の中からも、かつ子の耳を離れません。

いま日は暮れて、空の色は漸次薄闇く、大分寒くなつてきた、かつ子は氣がワク〳〵して、見相が荒々しくなつてるので、人殺しでもして來た者のやうに人に思はれ咎められてはならぬと思つて、故意と徐に歩みを運んだ。

歩行きながらも又いろ〳〵の事が胸に浮ぶ、萬國銀行の初めから今日迄のこと、二億といふ金のい

きさつ、それが人々に及ぼした凄い恐ろしい結果、ア、何といふ神變不思議な力があつて、此黄金の塔を一朝に押建てゝ、押建てたかと思つたら又一朝にして倒して了つたのだらう！　それを建立した手で又自分から狂人のやうに猛り立つて、柱一本殘さず毀して了つた！　何といふ道理だらう？　到るところ悲痛の叫び、到るところ財産が人と共に奈落の底へ沈む音響、芳村家の最期の家庭、一文々々貯めて作つた米本の富、瀬藤が工業から儲けた利得、毛利が商賣からチビ〳〵積んだ家産、それもこれも皆一緒くたに、同じ芥溜場の底へ葬り去られて了つた！　酒の中へ溺れて了つたのは矢野龍吉、溝どろの中へ陥つて手も足も出せなくなつた三田夫人、一生借金の淵へ沈んで相場道から乾上るこの出來ない馬嶋小吉、それから盗棒をして赤い着物を着せられた福本、風を喰つて姿を晦ました阪谷と深澤、其他名も數も知れぬ貧乏な連中……、此度の金事件で路頭に迷つて瀕死の境に沈んで了つた、最後の結果は卽ち死！　増島は爲に短銃で頭腦を砕いて、身を滅して了つたのだ、其腦漿や血汐やは、定めて巴里の此處彼處へ迸射することだらう！

總て斯んなふうに、見ること聞くこと、悉く之れ相良庄兵衛其人の仕業に基ゐたことだと考へると、かつ子は庄兵衛に對して嫌惡厭忌の念がゾク〳〵と湧いて來て溜らない、實に大惡黨、鬼だ、蛇だ、憎むべきは彼一人、罰すべきは彼一人、其罪萬死に値する、今迄は當らず觸らず相手にせぬくらゐに看てゐた相良、今は夫のみに留めて置けぬ、今迄心に藏めておいた激怒、一時に勃發しない譯にはいかぬ、呪つて、恨んで、憎んで、斥けても、何としても飽き足りない、ア、此世に二人とない罪もない兄は、憐れや相良庄兵衛の爲に獄舍の苦難を受けてゐる、萬人は暗黑道に沈んでゐる、何として恕すべき點があらう、天地容るべからざる罪人だ！

かつ子偶然目を擧げて見ると、何時の間にか身は廣小路へ來てゐる、目の前に在るのが株式取引所、いま日は既に黄昏の薄暗がり、冬の空だから霧のやうな霜のやうなのが四邊に滿ちて、大きな建物も幻のやう、かつ子は暫し茫然と、此金堂を凝視てゐたが、思はずも長大息の洩れるのを禁じなかつた。

新希望

一

裁判の進行は非常に手間取つて、相良と濱野が捕縛になつてから七個月も經つたが、未だ公判の運びに至りません、今日は九月の中旬、かつ子は一週二度づゝ、兄を監獄に訪ねることにいたして居つたが、此月曜日にも午後三時に行くことにしておいた、かつ子は最早相良といふ姓名を口に上せない、相良からはヤイ〳〵云つて、一遍是非來てくれと賴んで寄越すが、かつ子は何時も斷然と跳つけ

て了ふ、もう口を利く要も顔を合はせる要もない、只裁判に由つて事を決するばかりだと、堅く執つて動かない、かつ子は何かして兄を救けたいと一心に骨を折る、而して成たけ兄を慰めやうと、行く度毎に無罪にする手續を盡してゐることを話して、兄に元氣をつけ、時には花束などを持つていつてせめてもの氣晴しにさせてをります。

そこで、此月曜日の朝も、かつ子は兄へ持つて行かうと、紅の麝香撫子を一束用意して、出懸けやうとしてゐると、同じ家の階上に住んでゐる織戸公爵夫人の老婢の園が降りて來て、夫人が急に少し御目にかゝりたいと申すから來てくれと斯う云ふので、かつ子は何事かと心配しい〳〵、階上の夫人のところへ行つた、かつ子は萬國銀行破滅以來、養育院の世話役も辭職して了つたので、夫以來公爵夫人にも餘り面會せずに居つたのでございます、それから養育院の方も、日に增し足遠になつて、只時々幸吉を見に行くくらゐ、幸吉も其後いろ〳〵と嚴重に躾を受けたので、大分人間が改良されて大人しくなつて來たらしい、が夫人の用といふのは大方幸吉に關した事だら　と、かつ子は推量してみたのでございます。

織戸公爵夫人は到頭大資產を潰して了つた、夫公爵が殆んど盜に等しい手段で貧民から金を奪つて其大富を作つたのだから、自分は何卒して其富を舊の主卽ち貧民に戻して、罪滅しをやりたいといふ之れが夫人の心願で、前々申上げた通り、慈善其他種々の事業に、惜氣もなく金を使つてをつたが、

爾來僅に十年經つた今日、故公爵から繼承した三億に餘る大金は、ハヤ悉く消費して了つた、或は新たに慈善の機關を作らへたり、又は既に出來てゐる機關へ寄附贈與をしたり、國中の慈善機關で夫人から寄附贈與を受けないものは殆んど無い位でございます、夫人の慈善の仕樣は、乞丐へ物を投げてやるといふ風の行法でない、貧民をして、富んでる自分達と同樣に、旨い物を食べさせ衣服も着せ、時としては絹夜具にも寢せ、金製の盃で酒も飲ませやうといふ、風の變つた心願で、之は卽ち亡夫の追善否罪滅しとでも申すのか、奪つたものを裕に復權してやらうといふ行法なのでございます、であるからして、慈善の爲め賑恤の爲め、多數の宮殿的建物造作庭園遊場

を作らへたのは何のくらゐだか判らない、今は公爵家の財産は悉く吐出して了つたが、夫人は穢れた金錢を一文も餘さぬどころか、驚くべきかな今では反つて反對に、借金を拵へるといふ端目に立至つたのでございます、其高は積り積つて何十萬圓、之を返す工夫がつかないので、債權者の手に餘儀なくされて、山屋町の邸宅へ賣家の札を貼るといふ、故公爵が劫奪同樣にして作つた富の末路も、運りめぐつて同一の運命に歸して了つたのでございます。

かつ子が階上へ行つて夫人を訪ねると、老婢の園はハヤ既に案内の爲に入口に待つてゐた、跡に跟いて入つて行くと、座敷は至つて手狹で、些しも搆つてない、其邊中一面に字の書いてある紙片や繪圖や覺書みたやうなものや、反古だか要る書付だか譯らぬものやが、無茶苦茶に取散らしてある、大方三億圓の金の浪費の書付でございませう、其取散かつた側に公爵夫人は居りましたが、見ると相變らずの黑の喪服の、圓顏の、水晶を並べたやうな齒の、四十にしては未だ中々若々しく、只皮膚が少し黃味を帶びて、顏の色は至つて惡く、十年位遁世入佛をして庵室に引籠りでもしてゐた人のやうに見えました、泰然と構へて落着いた聲で、然かも物和かに口を開いた、

『濱野さん、今日貴女に御入來を願つたのは外でもございません、今朝私の耳へ入つた事に就いて、其を貴女に御傳へ申したいと思つてゞございます、其は他ではございません、子供のこと、貴女が養育院へ御入れなすつた幸吉の身の上に就いてゞございます。』

二

幸吉の身上に就いて？　云はれてかつ子は胸轟かした、何事か厭なことが始まつたのではないかと、恐怖を生じたのでございます、ア、可憫想な彼の子、親は有つても親知らず、子のあることを知つてゐながら、行つて見る〳〵と口ばかり、未だ逢つてやらぬ其内に、自分は獄中の人となつて了ふ、之から彼の子は如何なるだらう、相良は如何なつても構はぬが、幸吉の前途は心懸りと、自分の養子でゞもあるやうに、かつ子は優しくも考へる。

夫人は更に言葉を續けて、

『濱野さん、昨日大變な事が始まつたのでございます、恢復のならない恐ろしい犯罪事件があつたんでございます。』

とこれから夫人は其冷靜な態度で、恐ろしいといふ出來事を、かつ子に語つて聞かせました、成程恐ろしい出來事、それは斯ういふのでございます、幸吉は此三日前から、激しい頭痛がすると云つて病室へ移して貰つてをつたが、醫師はチヤンと其例の怠惰病であることを見拔いて居た、が併し幸吉は今迄時々神經病で惱むこともあつたので、全然拒む譯にもいかず、假病と知りつゝ入室を許した、ところが昨日の午後の事、平常は母と一緒に來る芳村有子孃が一人でやつて來て、丁度年三回行ふ治

療藥室の現品調を、他の一人の看護婦と一緒に行つてをつたが、此藥品や治療材料やの仕舞つてある戸棚のある室は、男の病室と女の病室との間に挾つて有つて、女の病室には今誰も入つてゐるものがないが、男の病室には只だ一人幸吉が寢臺を占めてゐた、所が其日、係りの此看護婦が鳥度用があつて室を出て、四五分經つて戻つて見ると、今迄一緒に居た有子が見えない、少し待つてみたが歸つて來ない、そこで彼方此方探しながら、若しや病室の方へ行つてゞもゐるのでないかと、隣の男の病室へ通ずる戸を開けて見やうとすると、これはいかな事、何時も鍵のかゝつて居ない戸が內部からピシヤンと締められてある、ハテナ如何したのだらうと、聊か不審に思ひながら、廊下へ出て回はり道をして、外部の入口から入つて見ると、驚いた、室の中の大亂脈は意外の珍事、看護婦は殆んど氣絕せんばかりになつて了つた、其筈、其室に有子は居たが、手巾でもつて猿轡を嵌られて、衣服の前は搔はだかつて、全く取亂されて、顏は眞蒼口唇は紫色、半死半生の態、無殘や此處女は今其神聖な節操を何者にか疵つけられて了つたのだ、有子の側には床の上に錢入が口を明いたまゝ空虛になつて轉がつてゐる、而して病人幸吉の姿は見えない、前後の始末で判斷すると、事情は明白、有子は多分幸吉に呼ばれて病室へ入つて、牛乳を與へやうとしたのを、此十六にしかならぬ幸吉は油斷をさせておいて寢臺を飛降りて、先づ以て戸に鍵をかつて、突如有子を押倒して獸慾を遂げ、錢入から錢を取出し、急いで衣服を着替へて、逃亡をして了つたと、斯ういふ事實に相違ない、只此に不思議なのは、此んな騷動が如何して人の耳に入らなかつたか、兩人いづれ搏鬪したに相違ない、有子は救助を呼んだに相違ない、然も恐ろしい此大事件が僅か四五分經つか經たぬに行はれたといふ、道理の判らぬ次第である、殊に幸吉が音も立てず足跡も遺さず、搔消す如く姿を隱して了つたのは、ホト〳〵合點のゆかぬ事、後で院內隅々隈々探したが、如何しても發見らなかつたといふこと、思ふに彼は病室の前の廊下續きの湯殿へ入つて、其窓を破つて往來へ出たものだらうが、それにしても迚も人間業には危險で出來ない道を取つて逃げていつたものと、諸人は舌を捲いて呆れてゐる、有子は早速母の許へ送屆けられて、寢床へ入つたきり、明くれ泣哀しんで、殆んど精神錯亂したやう、高い熱さへ發てゐる……。

かつ子は夫人の此物語を聞いて、事々にハッとばかり、恐ろしさに總身の血液が凍つて、固くなつて了つたやうに感じた、アヽ何といふ恐ろしい事だらう、父なる庄兵衞は、憫なる金岡はんを暴力で犯して、肩から腕を拔いて了ふほどの大怪我をさした、其はんの腹に宿つた幸吉、矢張父の兒で、今又偶然に出會した娘有子を、同じ暴力で犯すといふ、何たる恐ろしい因果だらう、憫なのは有子、名門に生れながら、何罪もなく、良人さへも有ち得ず、而して今此大汚辱を被る、が如何して此二人は出遇したものだらう、身の毛が彌立つほどの恐ろしい因果、夫につけても斯かる幸吉の父親が庄兵衞であるかと思へば、かつ子は胸轟かすばかりである。

一仔始終を物語つた夫人は話を結んで、

『私は貴女に對して批難も何にもいたしません、責任が貴女に在るといふ譯でないから何も申上げませんが、併し本當に飛んだ者を貴女は御世話なすつたのでござんすね。』

而して事實が似通つてゐるところから考へて、

『ですが、自分に關係が無い事でも、四邊の事柄が事柄だと、矢張心を痛めない譯にはいきません、私だつて然うでござんす、萬國銀行が此度のやうな大きな襤褸を出して、さんざん世間の人に迷惑をかけ騒を起させたりすると、初に家作を貸した私だつて、何だか一緒になつて惡い事をしたかのやうに良心に思はれ、人に思はれるかと思つて、止せば宜かつたと後悔するのでござんす、ですが今日となつては最早仕方がありません、之から悉皆家を清めませう、私は何の罪もないことを神樣に誓つて、咎を受けないやうにする積りでございます。』

斯う云つて夫人は、最早此世を捨てゝ尼にでもなつて了ひたいと云はぬばかり、只苦笑して居りますと、かつ子は氣の毒で堪らない、何と云つて慰めて宜いか譯らないから、只だ口の裡でモグ〳〵、

『本當に申譯がございません、何も彼も皆私が惡いのでございます、私は之から直に御氣の毒な有子さんの家へ御訪ね申して、出來る丈けの事をいたします。』

かつ子は歸る、跡に夫人と老婢そのとは、又荷物拵らへを始めまする、彌々世帶を持切れないで、一家分散といふ成行、主從四十年一緒に居たのも、此に別れ〳〵になるといふ、運命に落ちたのでございます。

三

此日から二日前の土曜日、芳村夫人は遂に抵當になつてゐる現在の住家を債權者に渡して了ふことに覺悟を極めました、此六ヶ月來借入金に對する利子さへ滯らせて、此上債權者への言譯も立たず、一方種々と裁判上の費用もかさむばかりなので、相談に賴んだ辯護士も夫人に斷念らせて、金の要からないの間借りでもして其方へ引移り、總てを明渡して足らぬながらも借金の方を落着をつけた方が宜からうといふので、夫人も今度といふ今度は涙を飲んで諦めたのでございます、今迄大概な事には心を折らずに、恐ろしい外見癖の痞我慢をしてゐた夫人が、今度に限つて、彌其角を折つて了つたのは、よく〳〵困つたからではあるが、外に又丁度打突つて湧いてきた事情がある、それは何であるかといふと、芳村家の唯一の血統、後嗣である房雄が急に死亡つたからである、房雄は前々の條に於て述べた如く、性質餘り悧巧な方でない、第一體質が弱くつて何の仕事も出來ない、と云つて只遊んでも居られないから、怠惰癖と無能を隱す爲に、羅馬の方へ行つて、其處で法王所領の閑な小役人になつて、碌な事も仕出來さず其日を送つてをつたのだが、此程マラリヤ熱に冒されて、到頭此世を去つ

て了つた、弱からうが痴愚だらうが、兎に角舊名門たる芳村伯爵家の一ト粒種、其房雄に死なれたのだから、夫人の愁傷落膽は固よりのこと、今迄永年張つた意地も瘠我慢も、彼しやう此しやうと心に期してゐたことも、悉皆張抜けして萬事絶望の淵に沈んで了つたので、これが夫人の決心を促すに手傳つた事實でムいます、最早斯うなれば事は疾い、纔か二十四時間の内に家は明拂つて了ふ、蓋をしてあつた貧乏が表面に現はれる、我樂多すらも少ないのが判る、ヨボ〳〵した古馬も賣拂ふ、臺所の女中一人丈をのこして跡は解雇、其女中は汚ない前垂懸で味噌漉下げて二錢三錢の買物歩行き、人は屢く夫人が色の褪た汚點だらけの衣服に草履のやうな履物を穿いて往來を歩行いてるのを見懸けるといふことでムいます、昨日の大名今日の裏店住ひ、それも此れも相場の爲め、思へば恐ろしいのは相場でムいます。

芳村母子が引移つた先は島田町の、舊と店先で化粧品を商つてゐた女主人の家の一間で、此女主人は此頃大變に神信心になつて、僧侶などを撰んでは自分が借りてゐる家室の又貸をしてゐる人、其家の一間を借りたので、室は大きいが碌な裝飾も造作も無い、誠に陰氣な室、突當りに三疊ばかりの物置同樣なのが一つあるのを幸に、其間を無理に寢室に使つて、母子二人は纔つと足を伸ばせるから、大きい室の方は座敷にも使へるといふ注文、母子は其丈けで心を少し慰めるといふ誠に情ない境遇でムいます。

母子は引移つたばかり、未だ碌に坐りもせず、纔と二時間も經つか經たぬと思ふところへ、やつて來たのは思懸けない來客、芳村母子は又更に情無い境遇へ投出されて了ひました。

來た人は他ではない皆崎間齋、例の平ぺッたい汚らしい面容をして、脂染みたフロックコートに、白いのが汚れて赤黑くなつてゐる襟飾の、繩のやうに圓く縒れてるのを着けて、入口に立つて居ります、彼は芳村の移轉を嗅付けて、恰度責めるには好機會と見込をつけて、故芳村伯爵が黑田れんに與へた一萬圓支拂約束の證文の古種をモノにしやうといふ計畫なのでございます、間齋は入り勿々、一ト回りジロリと室内を見廻して、夫人が如何な境遇に在るかを積つて見た、ヤこいつは少し來方が遲かつたわい、と思つたが仕方が無い、これから故意と勿體をつけ、切口上で長たらしく、一仔始終を話し込んで、一萬圓の支拂を迫つた。

纔つと引越して來たばかり、此なら人にも判るまいと、安心し切つた夫人母子、匆々此亂入と請求に茫然自失、唯只怖れをのゝくばかりでございます、これは正に伯爵の御手蹟に相違あるまい、そんなら事件は斯く〳〵、好色伯爵が一時の淫慾にれんを弄んで、而して後で邪魔になつたから此一札を與へて追拂つた、此證文は日附から十五年も經つてゐるから法律上無効なことは知つてゐるが、自分は黑田れん子といふ客から依賴を受け代理となつて懸合に來たに過ぎぬ、若し之に就いて何とか折合の談が調はなければ、れん子は屹度事を表沙汰にして、金は取れずとも裁判で爭つて見るに相違無

いと、間齋樣々と脅迫文句を並立てた、夫人は聞いて顏を眞青にして、大變な事が持上つた、飛んだ昔の大外聞だが、併し如何して今迄打棄つて置いたかと、不審の廉を申張ると、間齋一寸困つたが、早速に虛言を拵へて、證文は暫らく紛失してゐたが、後で行李の底から發見つたと言張つた、夫人が此事は御需に應じ兼ねると斷然と拒絕したので、間齋は故意と强ひて爭はず、依然可厭に叮嚀な口の利きやうをして、私は何でも宜しい、いづれ歸つてれん子殿に相談するが、れん子は必らず自分と同道で來やうといふに相違ない、併し明日は上がられぬ、明日は日曜でれん子が居るところは日曜には外出が出來ぬから、月曜か火曜には屹度上る、何卒然う思つて貰はうと、間齋は遠まはしの脅迫文句を言のこして、故意と叮嚀に辭儀をして立歸つて參りました。

四

日曜が過ぎて月曜になつたが、娘有子が恐ろしい目に遭つて半死半生の體で家へ擔ぎ込まれてから、自分は寢る目も寢ず其側を離れず涙ばかり先へ立てゝ介抱してゐるといふ風なので、夫人は汚ない服裝の間齋の姿も其厭な話も悉皆忘れて了つて居た、今有子はスヤ〳〵と眠つてゐる、側に坐つてゐる母夫人、心に弛みが出て來たと共に疲勞も覺えて、氣が落着くと同時に坐ろに過越方をも思出して、獨り結ばれてをりますと、皆崎間齋案の諚やつてきた、此度は前日の話の通り、黑田れん子を伴つてきた。

『奧樣、私の得意客といふのは此人で厶いさす、マア今日は何卒一つ是非御話を極めて頂きたいもので……。』

れん子を紹介せられて、夫人は思はずも身體を縮ませた、見るとれん子は、可厭に不調和に派手な服裝をして、一見賤しむべき渡世柄の風體、其筈彼女は十年以來醜業を營んでをるのでございます、斯んな醜業の人間に接するのは、何處までも權識を主としてゐる夫人に取つては不快の極、實に穢らはしい次第である、其穢らはしい動物を夫伯爵は騙したのかと思ふと、夫人は腹立しくつて堪らない。

皆崎は猶も攻めつけて、

『ねエ奧樣、是非疾く始末をつけて頂きたうございます、れんさんも娼業が忙しくつて、疾く笛田町へ戻つて居らんければなりませんから……。』

夫人は判らないから繰返して、

『笛田町？』

『然うです、れんさんは笛田町に居るのです、笛田町の或家で稼いでをるのです。』

夫人は此樣な話を娘に聞かせたくない、知らせたくないからドギマギしながら、此時氣がついて周章てゝ、少し開いて居た有子の寢てゐる物置室の戸を締切つた、有子は熱に苦んでると見えて夜具の

中でモヂ〳〵動いてゐる、が容子を窺ふと又寢込んで了つて、此方のことは些とも知らぬらしい。

此方に皆崎は無遠慮な大聲で續けて、

『ねェ奥樣、御判りでございますか、此事に就いては私はれんさんから萬事委任を受けて、要之私はれんさんの代理人でござんす、併し一應本人から御聞きになるのも確で宜しからうと存じて、一緒に來て頂いた理由で、初めからの次第を直接に熟く御聞なすつたら宜いでござんせう……、れんさん、お前さんから一つ話をなさい。』

醜業なんどを營つてるが女は矢張女、おれんは何だか勝手が惡いやうに、躊躇して直ぐと口を開かす、當惑の色をもつた大な眼を、皆崎の方へ向けてゐたが、何しろ大金になることだから、到頭口を利き始した、未だ若い年紀だのに、其聲音は嗄れて太い、大方日夜淫酒に荒んでゐるからでございませう。

『只今皆崎さんの仰有つた通りでござんす、私は此家の旦那さんから旦那さんの印の捺つた書附を頂きました……、親父は車力をしてゐるんでござんすが、妙な事で私は旦那樣に御目にかゝつたんでござんす、ところが旦那樣は私に言ふことを聞けの何のと、種々厭なことを仰有るんです、本當に私は困つちまひました、これが若い御方でゞもあるならばでござんすが、ねェ貴女、年齡をとつてる方ですもの、本當に私は困りました、其内に一日の夕方、到頭私は旦那樣に、厩の中へ引張込まれて、手籠にされて了ひましたが、直ぐと後から私は書附を頂いたのでござんす……ハイ。』

突立つたまゝ默つて、夫人は相手に云ふ丈けを云はせて置いたが、軈て物置部屋に寢てゐる有子が、眼覺めたかして音をさせたので、聞かしては大變と、

『解りました、解りました、宜ございます、御默んなさい、宜ございます〳〵。』

と押留めた、がおれんは云ふことだけ云はなければ止めない、

『ですが一體旦那は隨分非道い事をなさるのね、何咎もない私みたやうな生娘をさん〳〵慰みものになすつて、而して一端約束した事を反古になすつて、夫ぢやア餘んり隨分ぢやアございませんか、ねェ奥樣、貴女の旦那樣は嘘ッつきですのね、泥坊ですのね、話を聞いたものは誰だつて皆然う云つてるんです、本當に非道い人だッ……。』

『御默んなさいお默んなさい、何ぼなんだつて、餘り酷い言を……。』

夫人は恐ろしい立腹で、おれんに嚙付かぬばかりの劍幕、おれんは平生惡い男や客に屢く毆りつけられて馴れッこになつてゐるから、又打たれやしないかと、手で除ける支度をしたが、夫人は眞逆に毆ることもいたしません、これで双方默つて睨み合てをりましたが、有子の寢てゐる方から物音がして啜泣の音さへ聞えるから、夫人は顔へながら聲を密めて、

『ではお前さんは、如何するとお云ひのですか、和女は？』

五

此に至つて皆崎は口を出して、

『奥様、如何するッて別に仕様はありやしません、れんさんの方は約束の金さへ拂つて頂けばそれで苦情は無いのでござんさア、考へると本當に氣の毒で道理の次第でござんすよ、全く當家の旦那が御惡い、隨分亂暴を爲されかたです、一ト口に云つて見れば人を騙くらかしたので、詐欺だ、盗と五十歩百歩だ……。』

『何を仰有るんですか皆崎さん、貴君そんな、そんな御金は私決して拂ふことは出來ません。』

『御拂にならぬ？　宜しい御拂なさらんならなさらんで宜しい、之から直ぐ車で裁判所へ行つて告訴をするばッかりです、告訴狀は此通りチヤンと此に出來てるです、今れんさんの云つた事は、一から十まで此訴狀に列べてあるです……。』

『貴君そりやア餘りぢやござんせんか、脅迫で取らうなんて、そんな事はなさるもんぢやござんせん。』

『否奥様、御氣の毒さま、併し斯うなりや何も止むを得ませんです、直ぐと手續をいたします、職業は職業ですから。』

張りきつた空威張りも仕切れなくなつて、夫人は最早屈する外は無い、半分獨言のやうに、

『迚も力に無いのだから仕様が無い、皆崎さん、貴君私共の昨今の身上は御承知でございませう、御覽の通りの情無い住居、此室を御覽になつたつても御判りになりませう、何一つ御金になるものがあるでなし、明日は如何して食べてゆかうかと思つてをる位でござんす、夫が貴君、如何して纏つたお金が出來ませう、一萬圓どころか一圓の工面にも困つてる私共……。』

こんな弱音に心を折るやうな皆崎でない、一向頓着なく嘲笑ひながら、

『奥様みたやうな御婦人といふものは必ず何か金になる物を有つてお在のものだ、秘密に金を仕舞つてあるものだ、奥様御隱しなさいますな、探せば屹度出てきます……。』

先刻からヂロ〳〵室内を見まはして居つた皆崎、壁の前に在る棚の上に今朝夫人が葛籠から出して乘せたまゝにしておいた古い手文庫に目をつけた、物は古いが品質は良い、屹度此中には大切なものが入つてるに相違ないと、皆崎頻りに其方をキヨロリ〳〵見てゐると、夫人は默つてゐれば判らなかつたかも知れぬのを、氣が轉倒してゐる時だから自分から種明しをして叫んで了つた、

『否、否いけません、其中に在るものだけは決して上るわけにはいきません、指輪だの頭髮のものは！』

夫人は文庫を取つて手元へ置いて、防衛の態度を取つた、文庫の中に在るのは生命から二番目の金銀指輪頭髮の道具、いくら困つても之ればかりは離さずに、後生大事に取つておいた代物、娘を嫁入

させるに身につけてやる唯一の品物、何よりも彼よりも身上有ッ丈けの金になるもの、其を奪られては大變だから、抱きかゝへて離さない。

『決して、こればッかりは、決して上げられません、生命を奪られても上げません！』

すると此時、外へ氣を奪られることが始つた、戸を打つて案内を乞ふものがある、入つて來たのは他でもない、濱野かつ子。

かつ子は入つて室内の容子を見て、イヤ惡いところへ來合はせたと思つた、御邪魔になつて惡いからと、立歸らうといたしたが、夫人が一ト言マア宜しいと云ふ其言葉と仕打の内に、居て貰ひたさうな心が讀めたので、かつ子は留まつて、其まゝ場を外して片隅に默つて控へた。

皆崎は帽子を取上げて立かゝると、おれんは依然ギゴチ無さゝうに、急いで出口の方へと參る。

『では奥樣最早これで引下るより仕方がござんせんな。』

其癖皆崎は歸らない、又立留つて、種々と以前よりも聞辛い言を並べ立てる、これが此男の行法で、新來のかつ子に聞えよがしに、夫人を目の前に置いて恥しめて、厭な思をさせて降參させやうといふ注文、皆崎は自分の商賣に常に此術を用ふるのでございます。

『では奥樣御暇致します、私は此歩で直に裁判所の方へ參つて手續をして置きます、いづれ此顚末は二三日中には新聞に現るでござんせう、これも何も仕方が無い、貴女が然うしたいと仰有るのだから……。』

新聞に現る……と聞いて夫人は大苦痛、新聞へ掲されては恐ろしい恥辱晒し、一家の名譽全潰れ、家柄の資產を亡くして貧乏になつたことそれは知れても仕方が無いが、名前までを潰しては先祖へ對して如何顏向けがならう、せめて名前丈けは立てゝ置きたいと、此場合にも未だ外觀を飾る夫人、最早此うなると何事も考へてゐる暇は無い、矢庭に先刻の文庫を引寄せて、震へる手先で蓋を開けた、中に見えたのは鼈甲類に簪に時計に指輪二つ三つ、金銀金剛石ルビー寶石其他の色がピカ〳〵してゐる、併し細工は何れを見ても古い昔の型ばかり。

此を見た皆崎は、周章てゝヅカ〳〵身を進めた、見ると眼の色は俄に狎々しく、和らいだ顏にはニヤ〳〵した笑さへ有つてゐる、やがて、

『其丈ぢやア一萬圓は難かしさうですな、ドレ〳〵一つ拜見。』

六

夫人が何とも云はぬのに、皆崎は疾くも指輪や鼈甲やを一つ宛手に取つて、引くり返したり裏返したり、透したり叩いたり、品評して居ります、何しろ寶石や金銀やを商賣の一つにもしてゐるし第一斯道には眼がこえてゐる猶太人の事だから、見れば卽座と判る、太い顚えた指先で熟々捻つて見てゐ

たが、何れも此も性の良い美事なものばかりなのに、皆崎は恍惚と打見とれて、頻に感心して居りました、心の裡では大した値打のものだと思つたが、表面には押隱して、無情な評價人の口吻で、

『先づ六千圓ソコ〳〵でせうな、どうせ潰し値でござんさア、石の値打が重でさア、いくら良い代物だつて、細工は何にもなりやしません、仕方が無い、マア奮發して六千圓迄頂きませう。』

たとへ一萬圓にならうと、十萬圓にならうと、此ばかりは手放さない積りでゐるのだから、夫人は腹が立つて堪らない、引ッたくるやうに皆崎の手から品物を奪つて、震へる手先に握り占めた、餘まりだ！　肌身離さぬ大事の大事の、死んだ阿母さんが拵してゐたのを、寶の遺物と頂いて、今度は娘が嫁入りの時に挿させやうと、樂みに思つてゐる簪笄、それをムザ〳〵彼樣な奴に奪られてはと、夫人は情無さ遣瀬なく、燃るやうな熱い涙が、頰を傳はつて流れるのを禁めあへぬで居りました、其容子が餘りの悲劇なので、見てゐたおれんは流石に女性、氣の毒と思つたか皆崎の袖を引いて、留めるやうに諫めかゝつた、おれんは、いかにも人の好さゝうな此老夫人に、此樣な辛い思ひをさせるのを見てゐるに忍びないから、疾く歸りたいと云ふのである、然るに皆崎は固より平氣、冷かに此場の光景を見てゐたが、此分では此金銀細工品は皆持つてゆける、一萬圓がものは確にあると、内心見て取つたのでムいます、皆崎は永い經驗で、婦女が涙を滾せば最早〳〵めたもの、婦女の涙は意識の折れたのを示すものと悉皆知つてゐるから、最早大丈夫と多寡をくゝつて居りますので。

情無い此光景は猶と永引いたであろうに、それが途切られたといふ其仔細は外でもない、此時何處からか知らんが女子の微な歎息の聲がしたので、諸人はそれに氣を奪られた、聲の主は卽ち有子、有子が彼方の物置室で、泣聲を放つたのでムいます。

『阿母さん、阿母さん、あの人たちは私を殺すのです、ア、非道い、非道い、何でもかでも有ッ丈け與つて御仕舞なさい、勝手次第に持ていかせて、匆々と歸して了つて頂戴、私は最早堪りません、寧そ死んで了ひたい！』

娘の此言葉に母は身も世もあられず、自分が先へ死んで了ひたいやうな絶望、ア、到頭有子の耳へ入つたか、娘が恥かしさに死なうといふのも無理は無いと、斯う考へると最早何にも云つてゐる暇は無い、龜甲も笄も指環も時計も、投付けるやうに、皆崎の前へ投り出して了つた、で皆崎が引替に伯爵の書附を取出して卓の上へ置くのを待兼ねて、夫人は追立てるやうに皆崎を戸の外へ押出すと、おれんの姿は何時の間にか最早見えなくなつてゐる、立戻つて開ける手遲しと襖戸を開いて、有子の臥床の側へ駈寄つた母夫人、其まゝ顏を娘の顏へ押當てゝ、兩人共に絶滅、涙と涙は一つに流れて、枕もづぶ濡れに濡れて了つた。

此方の隅に、かつ子は默つたまゝ控へてゐたが、餘り見てゐられぬので、一時は口を出さうかとも考へたが、併し口を出したところで、一方夫人の家の襤褸をほじくり出すばかり、又一方盜賊同樣の

皆崎の行法に猶々不快を増すばかり、行るところまで行る皆崎の因業なのを知つてゐるから、外に仕様も無い打棄つて置かうと、思つては見たものゝ、さりとて此二人の可憫想な女が看す〳〵全裸にされるのを此まゝ打棄つておくにもおかれぬ、一體口を出すことも助けることも出來ぬくらゐなら何故斯うやつて此室へ駈込んだ譯であるかと、かつ子いろ〳〵に考へたが、矢張どうも仕様がない、默つたまゝで居りました。

夫人も有子も只だ手を執りあつて泣いてばかり、只泣くばかりでございます、かつ子も共に袖を絞る、此ところ三人共、暫らくは無言でゐた、ア、昔は大名中での大名、一つの王國みたやうなもので あつた其家柄が、今は落魄れて此有樣、一粒種の嫡子は、名も無く下らなく異域の土になつて了ふ、一粒種の娘は惡者の手にかゝつて手籠にされる、身體を傷けられる、只一人昔の俤を傳へて飽までも體面を傷けまいとやつて來た夫人其人は、流行物の相場熱に浮されて、家門も滅茶々々、誠にハヤ憐れなる末路でございます。

七

かつ子戸外へ出て見ると、往來端で皆崎がおせんと何やら頻に談話をしてゐる、おせんは門口に皆崎を待つてゐたものと見えます、軈て通り懸つた車を呼留めて、皆崎は無理におれんを押乘せて、而して自分も何所へやら見えなくなつて了つた。

がおせんは跡から歩行いてゆく内に、かつ子を發見けて、キヨロ〳〵容子を見てゐたが、無論かつ子に會はうと思つてゐたところだから、立寄つて挨拶して、直と話を幸吉の事へ持ちだした、話の模樣で見るといふと、おせんは昨日養育院であつた幸吉の所業を既に承知してゐるらしい、おせんは相良から四千圓取損つたので忌々しくつて堪らない、如何かして此仕事をモノにしたいと智慧を絞つてゐるのであるから、時々美納町の養育院へ出懸けては、何か自分の利益になる事が起れば可いと、待構へてをつたので、そこへ此度の幸吉の事件が湧いてきたのだから、何かして之を役に立てなければと考へた、而して何か考案がついたと見えて、今かつ子に自分はこれから直ぐ幸吉の捜索に奔走する、彼の子も本當に可憫想、此まゝ打棄つて惡い人間にするのは氣の毒、如何かして發見だして、眞人間に返へらせたい、さもなければ揚句の果は赤い着物を着るかもしれぬと、深切ごかしを並べながら、肥つた顏の、脂で蕩けさうな小さな眼の底から、氣味惡い光を洩し〳〵、かつ子の底意を窺ひます、かつ子が弱り返つてゐる容子に見えたので、心の裡におせんは好鹽梅らしく喜んで、コイツ彼の餓鬼を發見だした日には幾らかには屹度ならうと、心に思案をいたしました。

『では奥さん其御積りで……、私は一生懸命になつて探します、若し私に何か御用がござんしたら、態々丸山町の宅まで御入來にならずとも、笛田町の皆崎さんの宅迄御入來下されば屹度御目にかゝれ

ます、私は皆崎さんの御宅へは大概毎日四時頃には參つてをりますから……。』

こゝで二人は袂を別つたが、かつ子は如斯又更に新しい心配を求めたので、考へ〳〵山屋町の自宅へと歸りました、本當に彼の幸吉、宛然虎か狼を市に放つたやうなものだ、如何な事をして人に危害迷惑をかけるか判らない、困つたものだと、かつ子は晝飯もソコ〳〵に、又も車に打乘つて、疾く變つた話を聞きたいから、監獄の兄のところへ行く途で、養育院へ立寄らうと、直と家を出かけました、出懸けた途中も依然いろ〳〵と考へ事、かつ子は其内に一つの考へを取決めた、然うだこれは一つ政治郎を一緒に養育院へ連れて行かう、兎にも角にも幸吉は政治郎の弟に相違ないから、一緒に心配するのは當然、第一今金滿家でゐるのは彼一人だ、口を出すべき人は順序から云へば彼一人だ、順序も順序だし金もある、とすると何か効果のある手段が盡されやうと、かつ子車の上でとつおいつ。

遂に車は飯壬町の政治郎の家の前で留つたが、かつ子は玄關へ入り早々、パッと心を冷して了つた、といふのは、家内が何かゴタ〳〵して、室内へ入つて見るといふと、下女下男が座敷を閉めたり旅行鞄を廣げたりしてゐる、其邊机や棚や疊の上に種々美麗な小道具やら衣服やら旅行の諸道具が並べてある、何處からだか判らぬが、定めて其品々から發るのであらう、良い香水の香がプンと鼻を撲いてくる、宛然舞踊會のあつた翌日に花束が投出されてでもあるやうだ、で、寢室の奥に政治郎は、大きな行李と行李の間に突立つてゐたが、其行李へ書生が、宛然花嫁の道具とでも云ひさうな綺麗な品物を一杯詰めて、今恰度詰め終つたところである。

政治郎はかつ子を發見けて、向ふから言葉をかけた、がそれが誠に無愛想、

『ア、貴女か、好いところへ來て下すつた、郵便賃が三錢助かつた、イヤ最早僕は澤山だから、御免を被つて今から出懸ける、恰度出懸けるところです。』

『オヤ貴郎何處へかお立ち？』

『エー、今夜これから出懸けます、根府へ行つて冬場を越さうと思ふのです。』

やがて政治郎は手眞似で書生を彼方へ追やつて、

『實にどうも閉口ですな、此六箇月來監獄に親父を有つてるなんて！　實際面白くも何ともありませんな、全く業ざらしですな、僕は親父が何とか定るまで、愚圖々々して此に居るのは厭だから、一體旅行は大嫌ひの僕だが、出懸ける事にしたです、そりや彼地は好いですからな。マア要る物は大概持つてくつもりだから、大體退屈することはないでせう。』

見ると政治郎の身邊は悉皆準備が出來上つて、直にも立てるばかりになつてゐる、これは困つたと思つたが、併し兎も角も懸合つてみやうと、かつ子は遂に發言して、

『政治郎さん、私は又一つ貴郎に御願したい事があるのでござんす。』

とこれから一仔始終の話をして、

『いくら手甲摺者になつたからツて、打棄つては置けませんから、貴郎も何卒私と一緒になつて、一つ骨折つて下さいませんか、ねエ政治郎さん、政治郎さん。』

八

政治郎はかつ子の云ふことを聽了りもせず、顏色を青白くし襟元から冷水でもかけられるやうな戰慄乎した風をして。

『イヤー御免々々、聞いた丈けで戰慄乎とする、盜賊の親父、强姦殺人の弟、ア、怖い〳〵、僕は猶且疾く先の週間に立つて了へば宜かつた、實に御話にならん、醜極まる、僕みたやうなものを其處へ引張込むなんて、大に殘酷極まるッ、御免々々。』

かつ子が猶も遮つて賴むので、政治郎は到頭腹を立つて、

『宜、加減にして下さいな本當に、貴女は人を愚にしてゐる、心配するなら貴女一人で勝手になさるがいゝ、何も無理に人を引張り込むには當らん……、だから僕が云はんこッちやなかつたのだ、夫を聽かないから此樣な事になつたんだ、自業自得は打棄つておくより仕方がない、僕は何んな事があつたつて斷然と手出しはせぬです。』

餘りの無情にかつ子は心中驚いたが、仕方がない、此上何を云つても駄目と看て取つたから、直ぐと起上つて、

『では御暇いたします。』

政治郎は平氣、

『左樣なら。』

かつ子出懸けながら、見ると政治郎は又書生を呼んで、自分は側で監督をしながら、荷物を詰めさせてゐる、化粧道具其他旅行一切の持物、何も此もピカ〳〵光つたハイカラの贅澤品ばかり、かつ子は熟々と考へた、ア、此兄は斯うやつて贅澤三昧に、根府の美しい空の下に酒落た遊びに出懸けるといふのに、弟はチリ〳〵と寒い冬の夕、薄い着服に食には飢ゑて、名も知れぬ薄闇い小路をウロ〳〵と徘徊してゐる、金錢が何の役に立つ？　人情が何處に在る？　本當に理屈の無い世の中だと、厭な心持になつて了つた。

かつ子は養育院へやつてきたが、養育院ともある建物が馬鹿々々しいほど驕奢を極めて出來てゐるのに、今更ながら厭忌な、又不思議な思をした、元來慈善を主とする機關、何必要あつて此んな宮殿みたやうな建物を造らへたか、公園のやうな庭、陶器を使つて造らへてある臺所、大理石で出來てゐる食堂、同樣の階段廊下、立派な御殿にも使へる此建物は、慈善用には全くの虛飾、夫れ丈けの金を慈善へ回す方が至當である、虛飾形式の慈善、無實誇大の慈善、實に詰らないことであると、思ひな

からかつ子は内へ入つて、早速に理事を尋ねて、坐はるが疾いか幸吉一件に關する樣々の質問、細かなところ迄知らうと務めた。

が事件は未だ依然全く暗中に留まつてゐる、理事の話して聽かせるところは、織戸夫人の話以上に出ない、搜索は引續いて、院内は固より諸所方々行つてゐる、が何一つ手懸りすら發見さない、思ふに幸吉は既に遠くへ行つたらう、市内を逃れて名も知れぬ遠くへ落のびたらうと思はれるが、併し有つてた金子は有子の錢入から奪つた三圓二十錢に過ぎぬから、そんなに遠方へは行かれぬ譯だ……、此事件は事が事だから、一體なら警察へ屆出づべきだが、氣を利かして、公にしたなら芳村母子の顏にかゝる大恥辱と、發表をしないでゐる……と、斯んな理事の話でございます。

かつ子は謝して、自分も疾く幸吉を搜し出したいは山々だが、矢張然う考へるから、屆出もせず願もせぬでゐると、固く言葉を番ひました、折角來たのに何にも新しい事實を聞かずに歸るのも殘念と思つたから、これから悲劇の當の場所の、病室へ行つて、其處の看護婦に逢つて當日の模樣を聞いてみやうと、かつ子出懸けて種々と訊ねてみると、此所でも依然不得要領、かつ子は失望せざるを得ない、ア、本當に仕樣がない、どうしたら宜からうと、思案に惑つてをりますと、此に一つ面白からぬかつ子の心を偶然に慰めた事があつた、急にキャツ〳〵といふ騷がするから、見るといふと外でもない、丁度子供の時間休み、此院の無數男女の子供が賑かに運動場で戯れてゐるのでございます、嬉々たる其態がいかにも娯しさう、如何にも無邪氣らしく見えるので、ア、斯んな風に育てられてる子供は仕合せなもの、どうか皆良い人間にしたいものだと、かつ子つく〴〵考へた。

九

看護婦が所外へ行つて一寸一人になつた間に、かつ子窓のところへ寄つて、運動場で子供達が戯れてゐるのに見惚れてゐると、隣りの女兒の病室で遊んでゐる女の兒の、キー〳〵聲で騷いでゐるのが耳についた、見ると其室へ入る戸が半分開放しになつてるから、向方では氣がつかないが此方からは向方が明確と見える、女兒の病室といふのは白い壁の白い窓懸布の白天井の、總てサバ〳〵した室で、四つある小さな寢臺に、一々白い帷幕が上から下つて、そこへ黃金色の太陽が映込んでゐるのだから、大きな百合の花が溫室内で咲出したやう、誠に陽氣に見えてをります。

此四つの寢臺の一番左りのに、かつ子は幸吉を入院させた日に見たので覺えてゐるが、松ちやん——癒りかゝつて麭麵にジャムをつけたのを食べてゐた松ちやん——が未だ居る、此松ちやん始終病身であるといふのは、親が酒精中毒をやるくらゐ酒呑なので、其系統を引いて、生來から貧血で、其大きな眼容ばかりが早熟た女になつてるが、體軀全體は痩せて弱々しく、拙手な畫工が描いた硝子繪の天人みたやう、年紀は纔つと十四だが、疾くも兩親に別れた、といふのは、母の何がし亭主の呑んだく

れに些細の金の事から大喧嘩をやつて、足蹴にされて、打どころが惡かつた爲に死んで了ふ、親父も其後行方が判らなくなつて了つたので、そこで今では全くの孤兒になつてるのだ、松ちやん今何をしてゐるかと見ると、眞白な長い寢衣のまゝ、頭髪を後方へ下げて、寢床の上へ跪いて、殘の三人の女の兒に祈りの文句を敎へてゐる。

『サア皆さん、斯ういふ風に手を合はせて、胸を出して……。』

すると、三人の女兒も同じやうに寢床の上へ跪いてをります、其中の二人は九歲から十一歲ぐらゐ、三番目のは纔つた六ッ位にしかならないが、此三人が、長い眞白な寢衣姿に無邪氣な可愛らしい其癖眞面目くさつた顏容をして、紅葉みたやうな手を合せてゐるところは、宛然小さな天女みたやうに見えまする。

『そして私の云ふ通り後へついて云ふのよ、宜くつて？　神よ、我々に親切なる相良の主に、好き報をなせ、主をして長壽を得、幸あらしめよ！……。』

と敎へると、之から四人揃つて敎へられたまゝ、聲や節のヨタ〳〵揃はないまゝに謠つたが、其揃はないところに小兒の無邪氣なところがあつて、いかにも可愛らしうございます。

がこの祈りの讃美歌を耳にしたかつ子、其意外な文句に腹が立つて堪らない、あの惡魔の相良を褒め稱へてゐる歌、成程養育院建立に表面骨を折つた人間として其德を稱へるのであるかしれぬ、玩弄物など寄附したから其恩があるかもしれぬ、併し眞實は大の惡魔、其惡魔に何の好き報酬、神に對して勿體ない、否瀆らはしい、彼は決して人に好かれる權利は有たぬ、あんな人間を褒めたゝへさせるのは、無邪氣な小兒に惡智慧をつけるやうなものだと、餘まり腹が立つて涙さへ出てきた、戯談ぢやアない、默つては居られない、入つて歌を止めさせて了はうと、此までかつ子は激したが、否々、自分勝手の腹立紛れかも知れぬ、自分が喧嘩をしてゐる其飛沫を、あんな無邪氣な小兒にまで及ぼしてはならぬ、世間を知らぬ小さい輩に、累を及ぼすことはない、彼等小兒の爲には相良は實際恩人だ、幾部分養育院建立者ともなつた、毎月玩弄物などを寄贈して、其幸福を助けたのは事實には相違ない、惡い事も澤山有るが、又善い事もしてはゐる、とすると非難ばかりも出來ない譯だ、憎むべき人間だが、又褒める所も無いではないのかと、とつおひつ迷つたかつ子、其まゝ此處を出て行くと、此方には少女四人、揃つて讃美歌をくり返してゐる、かつ子は心の迷ひが解けない。

十

これから養育院を出て、遂に宮谷の監獄へやつて參つて、車から降りると、其途端にかつ子ハタと忘れたことを思ひ出した、兒の所へ持つて來やうと今朝悉皆用意をして置いた麝香撫子の花束を持つてくるのを、餘り氣が立つてゐたので忘れて了つた、いつも相變らず持つてくるのを、今日に限つて

無いのは至つて拙い、第一縁起が悪い、困つたことをしたと、かつ子途方にくれてゐると、折しも其處を通りかゝつた女の花賣がある、小さな薔薇の束の一ト箇三錢するのを賣つてゐる、かつ子早速これを一つ買つて、遂に獄内へ行つて、敏之に面會した。

かつ子は匆々自分の輕卒しい失敗を話をすると、自體花が大好きな敏之、大喜びと共に笑を禁じない、が此日は如何した譯か敏之顏の色が頗る惡い、打濕つてをります、一體敏之は、拘引になつた當座の内は、自分は何の事はあるまい直に無罪放免にならうと、固く信じてをつたので、第一自分が萬國銀行の頭取になつたのは好んでなつた譯でなく、自己の意に反し無理强ひに餘儀なくされたのだし、日常の業務上には總て關係しなかつたし、假令關係したくつても、大概巴里は留守にしてゐたのだから、關係の出來る道理が無いと、自分は例の學者的の無頓着に、譯もなく考へてをりました、が段々辯護士などに訊いてみると、到底連帶の責任は逃れぬといふし、かつ子が、隨分運動や嘆願に心配もしてみたが、悉く骨折損に終つたと話したので、敏之も今は是までと、悉皆諦めて了ひました、成程法律上から云ふと、何んな些細な事でも此度の事では敏之は責任を免れぬ、知らぬとは云へない、徹頭徹尾相良の共犯者と看做されるより外は無い、全然相良に抱込まれて了つたのでございます。

サア彌〻然う極るとなると、敏之の諦めかたは疾い、敏之はそんなに深く加特力教に凝固まつて居る信者ではないが、兎に角安心立命を得てをるから、別に驚きもせず愁傷もせず、泰然として構へてゐるので、かつ子は少し驚いた位、それからもかつ子が心配しい〳〵、幾度か監獄へ行つてみても、敏之は獄中の人とは思へぬ程平靜沈着に笑顏で、壁へ聖蘇が十字架へかゝつてるところの繪などを貼つけて、無邪氣な小兒みたやうな風をしてをるのでございます、何事も神の力、一度神の手に身を委ねた以上、何の恨むところもなく、何の辛いことも無い……と斯う彼は思つてゐるので、只彼が唯一の恨事と考へるのは、兼ねて計畫しかけた東歐の大事業、それを悉く中止して了はなければならぬ其ことだ、自分がこれを實行することが出來なくなれば、誰が後を引受けやう、既に緒に就いてゐる共同汽船會社や、カルメル銀山や、建てるばかりになつてゐる土耳其銀行や、其他凡百の、東洋を文明の光澤に浴せしむる事業、それを繼承いでやり人が無からう、天が自分に仕ろと命じたそれを、中途で止めて了ふといふこと、返す〳〵も殘念だ、自分が刑餘の身となつては、其汚れた手で如何人道博愛の事業に觸れ得やう、夫許りが終世の恨事だと、敏之は獨り獄中に慨嘆に堪へませぬ。

かつ子が、此頃新聞紙上では人が大分和郎に同情あるやうになつて來たと話をするのを、別に感動した色もなく聞いてゐた敏之は、半ば眠つてゐるやうな眼容で妹を見て、何の氣も無さゝうに問懸けた、

『かつさん、何故和女は彼の人に逢ふのを厭だとお云ひの？』

問はれてかつ子は思はずも慄のいた、あの人とは無論相良の事と判つてゐるから、かつ子は只頭を

振つて厭だと示した、すると敏之は言惡さうな顏をして、オド〳〵と聲低く、

『厭だつてお云ひだが、和女は彼の人との關係上、厭だなんて云はれる義理ぢやないだらう？　行つて逢つておやり。』

さては兄は自分と相良との關係を知つてゐるかと、ハッシと胸にこたへたかつ子、思はずも顏を赫らめたが、其赫い顏を隱さうと、兄の腕の邊りへ吾顏を推當てた、而して微な聲で獨り言でも云ふやうに、一體如何して知つてるのか、誰がそんな事を告けたのが、誰一人知るものはあるまいと思つたに、和郎は猶更知るまいと思つたにと、訊くやうな訊かぬやうな、質問をすると、敏之は、

『かつさん、僕は疾に知つてゐる、人の惡い姨妬家が惡戯をして無名で僕のところへ云つて寄越したんで、それで其事を知つてゐる、僕は今迄其事を和女には云はぬでゐた、何豈かつさんの身體はかつさんの自由さ、そんな事は如何だつて宜い、僕は何とも思やせん、僕はかつさんは世界中で一番偉い女だと思つてるんだから……、マ宜いや、兎も角も行つて逢つておやりよ、ねえ。』

敏之は又大層元氣になつて、耶蘇の像の繪の裏へ挿入れて置いたかつ子の持つて來た薔薇の小束を取出して、之を妹の手に持たせながら、

『さうだ、かつさん、此を持つていつて相良君に與つておくれ、而して僕は別に最早惡くも何とも思つてゐないと、然う相良君に告つておくれ。』

兄の優しい心根に、かつ子は酷く感入つて、恐ろしい恥しさと何とも云へぬ嬉しさとが、一緒に込上げて返事も出ず、到頭我を折つて了ひました、斯うなると人情は矢張弱いもの、かつ子は疾く庄兵衛に逢つてみたい氣がしてならぬ、何となくソワ〳〵する、そこで翌日は起き匆々、監獄へ行つて面會を求める、イの一番に名前を出した、名前を通すが否や守衛は案内に立つて、かつ子は直ぐと未決囚室の、相良の許へと連れて行かれた。

十一

かつ子が監房へ入つた時に、相良は入口の方を脊中にして、小さな卓を前に何か頻りと紙片へ數字を書いてゐたが、戸が開いた音で急いで起上つて、振返つて見ると、かつ子だから、嬉しいの嬉しくないの、思はずも大聲を發した、

『ヤッかつ子さん！　能くマア來て下すつた、能く來て下すつた、ア、有難い〳〵、こんな嬉しいことはない……。』

直ぐと側へ寄つて兩の手でかつ子の片一方の手を執ると、かつ子は當惑の色をして、少し笑ひ顏をしながら、何しろ打絶えての面會だから、心も轟かぬ譯にはいかない、何を云つて宜かも譯らなくなつて了つた、やがてかつ子は、其明いた一方の手でもつて持つてきた薔薇の花束を、書類で取散かつ

てゐる卓の上へ乘せたが、未だ依然默つてゐる、庄兵衛はかつ子の指のところを接吻しながら、

『和女は私の爲に天使だ、活きた觀音菩薩に接する思ひがする！』

默つてゐたかつ子、到頭口を開いた、

『仕方がありません、相良さん、實は私は最早貴郎には、御目にかゝるまいと心に誓つてをりました、二度と再び言葉を交すまいと思つてゐたのでございんしたが、兄が種々と申すので、兄の言葉に從つて、私は此處へ參りました。』

『かつ子さん、かつ子さん、そ、そんな事を云つて下さるな！　私は今更申譯の仕樣が無い、嘸ぞ腹も立つだらう、憎い奴とも思つたらうが、そこは和女のいつもの宏い心で熟く察して、どうか許して頂きたい、ねェかつ子さん、かつ子さん……。』

詫るやうに云ふのを、かつ子は手で押留めて、

『相良さん、そんなに仰有るには及びません、困ります、私も如何して宜いか譯りませんのです、私が斯うして此獄へ上つたので御判りになつたでございんせう、夫よりも相良さん、貴郎に御話しなければならない情ない事がいろ〳〵とございんすのです。』

とこれからかつ子は中音で、搔つまんで、幸吉が大人心がついて來たと思つたら匆々大兇行を働いて、芳村有子嬢に言語同斷な暴行を加へ、不思議なほど巧に姿を晦まして、人々が有ゆる手段を盡しても發見らず、此上探しても發見りさうにもないといふ、ことの次第を話しした。

相良は側目も觸らず聞いてゐたが、聞く事毎に胸を壓へられるやう、問も懸けず手も足も動かさず、只默然たるばかりであつたが、軈てかつ子の話が濟んだ頃見ると、庄兵衛兩眼に熱涙を一杯溜て、其の涙は眼の中に留りきれずに、兩頰を傳はつて流れてをりました、而して只斯う云ふばかり、

『不憫な奴だ、不憫な奴だ！』

庄兵衛が此んな風に泣いたことを、今迄見たことが無いのだから、此有樣にかつ子悉く感に打たれて、自分も茫然して、其まゝ顏を見詰めてゐると、軈て長大息の庄兵衛は、

『イヤ實に恐ろしい、我子とは云ふものゝ未だ逢つたことの無い幸吉、今更云つても返らぬが、今迄逢ひに行かう〳〵と思つて居たそれが、忙しい仕事に身體を縛られて、一時間と暇はなく、到頭出會はずにをつたのだが……人間の事は總て其樣なもの、思立つた時行つて了はぬと、何時までも出來ず仕舞ひ、幸吉にも逢はず仕舞か、發見つたら何かして此へ連れて來て貰ふ譯にはいかぬかナア！』

『連れてくるといつたつて、今何處に如何してゐるか、皆くれ判らないのでございんすから。』

庄兵衛は囚房の裡を運動的に彼方此方歩行きながら、獨言のやうな切れ切れ言葉で、

『ア、、自分が識らないでゐた吾兒を、人に發見して貰つたかと思つたら、それを又逢はずに失くして了ふ、最早迚も逢ふ機會は無いだらう、仕方が無い、運が無いのだ、私は全然運が無いのだ……、

萬國銀行もそれと同じだ、事柄が酷く似てゐる！』

十二

やがて庄兵衛は再び卓の前の椅子へ腰を下したが、かつ子も對ひあつて腰をおろした、此に於て庄兵衛は、卓の上に山のやうに置いてある今度の事件に關する書類に就いて一々説明を始めたが、此書類は入獄以來數ケ月の今日まで日夜準備を致したもので、庄兵衛は此書類に基いて、事件の顚末辯論の方法等逐一かつ子に云つて聞かせた、これは何處迄もかつ子に己れの無罪を見せておく必要があると思つたからだ、庄兵衛は言葉を更め順序を逐つて、一々に辯明する、其事柄は斯ういふので、先づ今度の告發者が罪として自分を摘發した事項は、第一、空景氣をつけて株の相場を沸騰せしめる爲めに、止度もなく資本を增加したこと、第二、虛僞假粧の應募引受及拂込をなし之が爲に阪谷其他多勢の有名無實な名義人を作らへて筆先き一つで拂つた體にして勘定を繕つたこと、第三、虛僞の配當金を報告し之を以て舊株の拂込に流用すると稱して世人を欺瞞したこと、終りに、銀行が銀行自身の株式を買ゑめて墮落しなき相場を營み、斯くして異常虛僞人爲的の騰貴を促し之が爲に自繩自縛、資金に困惑し遂に破滅倒產の厄を來したことゝ、卽ち此丈けが有罪と認められた論點であるらしいが、自分は皆な不當と思ふ、世人は自分の仕たことのみを容赦なく攻擊し自分のみを有罪のやうに云つてるが、併し自分は不當に思ふ、何故と云へば、自分は何處の銀行經營者でもすることを行つたきり、只自分は人が普通に行ふのを構はず男らしく大袈裟にやつた丈けで、事理に於ては異ひはない、若し喧ましい筆法で云つたなら、市中の何んな堅いと云はれる銀行者でも、一人として有罪の人たらざるはないのである、自分は只諸人の犧牲となつたに過ぎぬ、鎗玉に上つたに過ぎぬ、寃罪を被つたに過ぎぬのだ、それから又、責任を糺すに於て、自分一人を罪するといふのは、甚だ偏頗の裁斷だ、他の取締役は何故罪を構成せぬ、醍醐にしろ、由利にしろ、福岡にしろ、共に重役として責任を有つてるのに、自分のみ罪に當てられる謂はれはない、重役は手當として一年五萬圓を取つてゐる、外に純益の一割を貰つてゐる、それのみか臨時の種々の儲仕事にも預づて、旨い汁を吸つてゐる、それを、取るばかり取つて責任の段になると逃れるといふ、それは不法の至りでないか、其他監査役を不問に置いたり、又皆崎が至るところ詐僞を行つてるのを證據不十分と稱して打棄つておいたり、一として不公平ならぬはない、加之又、裁判所が行つた銀行帳簿の檢査は過誤だらけといふことだ、此の如く確たる理由が無いに拘はらず、相良一人のみを罪に斷ずるといふ、不公不理に非ずして何ぞやだ、萬國銀行當局者は、預金の一文だも私消せぬ、曲用せぬ、何時でも請求があれば返してやる、返すべき人には返してやる、然るに今俄に破產の宣告を下し營業を禁めるといふ、之れ只不法不公平に株主を破滅せしむるに過ぎぬのだ、不法を行つて財界を攪亂する、之れ我に非ずして政府に在る、司法大臣其

人に在る、私怨に制せられて公權を濫用する此の如きは、箆棒に非ずして何であると、庄兵衞非常なる劍幕。

殆んど人間の是非心が無いかとまで思はれる庄兵衞の極論に、かつ子は只默つて其顏を見詰めてゐると、庄兵衞又もや椅子を起離れて、猛虎が檻の中を動くやうに、狹い室の内を彼方へいつたり此方へ行つたり、身體を動かしながら、

『畜生め、諸人して寄つて蒐つて己を此んなとこへ打込やがつた、こんな事にならなきや何でもかんでも皆此方の天下にして了つたので、忌々しい奴等め！』

此言葉にかつ子は驚いて且つ問ふ、

『貴郎の天下にすると仰有つたつて、貴郎は鐚一文のお金もない身體になつたのぢやござんせんか、何もかも失敗して了つたぢやござんせんか？　人を恨むことは出來ますまい。』

剛情我慢の庄兵衞も、夫には相違ないのだから、苦々しい顏をして、

『然う云はれゝば吾輩は敗軍の將歟、敗軍の將は三文の値打もない、匹夫だ……、人間も敗けて了つちやア駄目だ、敗されて了へば翌日は直と愚者扱にされる、惡人扱にされる、勝てば官軍敗ければ敵だ、宜いわ、人は何と云つたつて構はんわ、吾輩一々それを和女から聞かぬでも判つとる、盜と云はれやうと、詐僞漢と云はれやうと構はぬ、敗ければ唾一つ引かけぬ人情だ、敗けたからこそだ、が併しだ、若し吾輩の仕た事が成功したら如何だらう、郡代も倒し財界も此方の所有に征服して了つたなら如何だらう、然うすりや吾輩は、今此の情無い牢獄裡に呻吟する代りに、不可抗爭の黃金大王となつて、天下を風靡してをるのぢやないか……。』

かつ子は構はずに又反對した、

『そりや然うでござんすが、貴郎の云ふこと爲ることには初めから理屈も筋合も立つてゐなかつたのでござんす、迚も成功する理由がござんせん。』

此言葉に庄兵衞はハタツと歩を留めて、かつ子の前へ突立つて、

『ナニ成功する理由がない？　何故無い？　吾輩が失敗を招いたのは只金が缺乏した其爲だ、金さへ

あれば何でもなかつたのだ、ウオータルローの戰ひの時、大奈翁が殺していゝ兵を猶う十萬有つてをつたなら、彼は必ず戰に勝つたに違ひない、地球の表面は必ず一變したに相違無かつたのだ、吾輩だつても同じ事だ、强弱の賣買戰に、溝へ棄てる金がもう二三億もあつたなら、勝利は必ず吾輩のもので、天下を握ることは容易の業だつたのだ！』

十三

傍若無人の大言に、かつ子は默つて居られない、

『なんてマア恐ろしい言を貴郎は仰有るのでせう、貴郎は未だ足りずに、此上猶且人を不幸にし涙を流させ血を見やうとなさるのでござんすか、もつと人を倒し家を潰させ、路頭に人を迷はせやうとなさるのでござんすか、本當に貴郎は恐ろしい御心でござんすね！』

庄兵衛は又もや激しく室内を歩行きはじめて、全然無頓着な風で怒鳴つてゐる、

『世の中を渡つてゆくのにそんな事が構つて居られるか！　一歩進まうとするに、幾百千の有生を踏潰したつて仕方が無いわッ。』

言葉がしらけて、兩人共無言になつて了つたが、かつ子は胸が凍着くやうな心持をしながら、歩行いてゐる庄兵衛を看まもつて考へた、此男果して偉い勇者であるか、それとも一個の卑劣漢か、愚者か悧巧者か、山師か詐僞師か、六箇月來、武器を褫奪された敗將みたやうに、全く無手にされて、此暗黑な牢獄裡に打込められて、それで相も變らず意氣軒昂、恐ろしい豪語を放つてゐる、全裸の冷たさうな四壁、鐵製の足も碌々伸ばされぬ小寢臺、素地の粗末な卓一脚、藁作りの小汚ない椅子二脚、娑婆では迚も住へさうもない此鐵窓裡に、今迄光り輝いた贅といふ贅を盡してゐた其身が、如何辛抱が出來るだらう、それが然も一向に、關せず焉と澄してゐる、とんと性格が譯らない！……。

が軈て相良は、脚が疲れたといふ風をして、又椅子に腰を下して、中音で永々と話を仕始めた、其云ふことを聞くといふと、懺悔のやうな、白狀のやうな問に落ちずして語るに落ちることを云つてゐる、

『……郡代は確に理屈があつた、あの男の言ふことには確かに道理がある、相場を行るに、取引所へ入つたら情熱に走るといふことは駄目なのだ、彼奴め、仕合せ好くも血も神經も無い人間に生れて、そこへ持つていつて女慾が薄いし、酒一杯飲む心が無いと來てゐるのだから、情緒といふことは微塵も無い、始終其筆法でやつてゐやアがる、彼奴の血脈には氷が通つてゐるのだ、徹頭徹尾冷血的だ、ところが何うだ此我輩は？　此我輩は餘り情緒に走り過ぎる、確に然うだと自覺する、我輩が失敗した原因は他に無い、情に燃え易い性質にあるのだ、併し一長一短はこゝだ、我輩の情に熱し易い性質は、吾身を滅ぼす原因となつたかもしれぬと同時に、又我輩をして身を立てしめた原因ともなつたの

だ、我輩は情熱の虜となつて了つたことがある、が又情熱の爲に人物を大きくしたこともある、好い位地に上らしたこともあるかと思ふと、其爲に打撃を被つて、一朝にして事業を蹉跌せしめたこともあつたのだ、投機思惑は或は我輩の一身を滅す原因となつたかも知れぬ、過去四年我輩が奮闘し來つたことを回顧すると、皆己れの希望の爲に、己れを苦しめるに至つた跟が無いでもない……。』

次いで勝たれた當の敵將郡代のことを思出して、ムラ〳〵と憤怒に堪へず、

『彼の不潔な猶太族の郡代め、彼奴何の望も有つてをらなんだ爲に、市場に勝を占めたのだ、あの執拗冷酷な人間共、金力を振り舞はして一人一人味方を固めて、遂に世界の實權を占めてをる、近代幾世紀、彼等は打たれても叩かれても、金の爲なら一向に構はず、斯くして今日世界一の十億の富を有つてをる、二十億百億萬億に達するのも蓋し容易な業だらう、他日全地球の實帝王になるのは必定だ、我輩は此事を、高い屋根から世間へ叫んでゐること幾年の久しきに渉つてをるが、世人の耳を傾くるもの甚だ少きは遺憾の極だ、世人は之を以て只我輩が事業上羨望嫉妬の念に驅られて其私憤を洩す爲とばかり解つてるが、大違ひだ、我輩の叫ぶのは義憤だ、我輩のは血の叫びだ、ア、厭ふべき猶太人！唾棄すべき猶太族！　我輩は此醜族を現土から根絶せしめねば止まぬのだッ！』

大なる素養と寛宏な度量のかつ子は嘴を入れて更に難じて、

『私は貴郎の御説には贊成出來ません、私の考へでは猶太人も他の人間も同じ人間だと思ひます、猶太人が異つた人間のやうに見なされるのは、それは諸人が猶太の人達を別物にして了つてるからです、狹い見識ではございませんか、事實些とも異ひません。』

かつ子が斯う云つたのを耳にも受付けず、庄兵衞猶々言激しく、

『それから、何よりも我輩の怪しからんと思ふ事は外でもない、現政府其者だ、現政府の奴原は此乞丐共の味方になつて、ヒョコ〳〵と頭を下げてる、國を郡代に賣つてゐる、郡代から金を融通して貰はなけりや國が治つてゆかれぬといふ所以なのだ、無論我輩の兄大木惟文は我輩に對して惡感を有つて行つてるに相違ない、和女には云はぬでをつたが、此度の事件の前に我輩は兄の所へ機嫌取りにも行かぬし、餘り好い仲でないのを仲直りしやうともせず、打棄つておいたから、兄は我輩を憎んでゐるに相違ない、我輩が昨今の端目になつてるのを兄は好氣味位に思つてるに相違ないのだ、マアそんな事は如何でも宜い、厭なら厭で一向構はぬ、が、併し大木が猶太人共と欵を通じて我輩に對するに至つては、言語同斷と云はねばならぬ、笑止千萬と云はざるを得ぬ、要之萬國銀行は郡代の爲に潰されて了つたのだ、總ての加特力派の銀行で少し景氣の好いものは、遂には皆彼の毒牙にかゝつて塡滅されるに極つてる、大木だつても矢張さうだ、屹度終局には彼の爲に食はれて了ふに相違ない、後生大事に獅嚙着いてる今の椅子から突落される日があるに極つてるのだ、いくら本人が其積りでなくゐても、長いものには卷かれて了ふ、今に見てゐるが宜い、第一彼奴の方針が愚極まる、何時も兩天秤

主義を持してゐて、今日自由黨へ着くかと思ふと、翌日は政府黨へ媚を呈する、終には自分自身で首をくゝるやうなことが出てくるに相違ない、マア宜しい、郡代の思ふやうに行つてるから、行らせて見るが宜い、郡代は若し獨逸と戰爭が始まれば我國は直ぐやられて了ふと豫言してゐるが、夫も宜からう、我輩は國を開いて、獨逸の襲來を歡迎するさ……。』

十四

餘り亂暴な言を放つので、かつ子は驚いて、賴むやうにして押禁めた、

『相良さん、相良さん、貴郎そんなことは仰有いますなよ、貴郎は其んな事を仰有られた義理ぢやございません、貴郎は御兄さんを怨んでお在ですが、大木さんは貴郎の斯うなることに就いては何にも御知りなさらない、全然無關係でお在のです、私が確な筋から聞いたところでは、此度の所爲は皆司法大臣神村さんの指圖だつていふことでございます……。』

これを聞いた相良は故あり氣に打笑つた、

『ハヽア、神村がか、成程彼奴飛んだ敵打を行つてゐる。』

何だか意味が判らないから、かつ子は不審さうに相良の顏を打守つてゐると、相良は付加へて、

『イヤ神村と我輩の間には古い面白い話があるのだ、我輩は大方そんな事になるだらうと、前以て知つてをつた。』

かつ子はどうせ可厭な事だらうと、其理由を聞かうとせず、其まゝにしておいたので、兩人一寸言葉が途切れたが、其内に相良は又卓の上の書類を弄くつて、再び何か思案の體、が直ぐと又口を開いて、

『併しかつ子さん、和女よく來て下すつた、私は實に嬉しい、何卒是非又來て下さい、いろ〳〵御話もし御意見も聽きたいし、それに考へて置いた計畫を和女に繼承いといて貰ひたくも思ふから、是非又度々來てください……、ア、ア、、金さへありやアなア！』

これでかつ子は歸らうと思つたが、此時俄と思出して、恰度好い序だと思つて、數ヶ月前から考へて訊いてみやうと思つてゐた或事柄を訊ねてみた、其事柄は他でもない、相良は無論內實に大儲をやつてるに違ひないが、其金を如何したかといふ、卽ち其疑點でございます、いづれ何百萬と秘密で儲けて隱してあるに相違ないが、外國へでもやつてあるか、其とも何處か人の知らぬ樹の下にでも埋藏してありはせぬかと、かつ子は樣々に、考へてゐたのでございます。

『相良さん、貴郎の御金は如何なすつたのでございます？　サドワ事件の時の二百萬と、それから貴郎が御所有の銀行の株三千株を、屹度貴郎は三千圓の値の時に御賣りなすつたらうと思ひますが、其代の九百萬、それを貴郎は如何なさいました？』

問はれて相良は打叫んで、

『我輩の金？　かつ子さんそりや何を云つてるんだ、我輩は文無しだッ！』

此相良の云ひ方が、いかにも明白に淀みなく、而して眞實本意無さゝうな言振りで、第一急な意外の問を置かれたので相良が眞實驚いた色を見せたから、かつ子は疑ふ餘地が無い、全く金は無いのだと、思つたのでございます、相良は猶も、

『我輩は鐚一文有つて居らぬ、拙く行つた事業で有つてる道理が無いではないか、判つたかかつ子さん？　我輩は諸人と共に倒れたので、他人ばかり倒して自分獨り好い子になつてる我輩ぢやない、それは思つて貰はなくちやならぬ、勿論我輩も株は賣つた、賣つたが併し又買つた、今の話の九百萬圓と外に二百萬圓の行方を問はれると、それは明瞭と説明することは出來ぬ些と困るが……、だが我輩の勘定は氣の毒な彼の增島の店で立つてるが、多分三千乃至四千萬の借殘になつてるだらう……、一文無し、相も變らぬ失敗の、相も變らぬ無一物さアハ、、、、。』

悲劇の最中をも構はぬ相良の放言に、かつ子は覺えず引込まれて、心が慰められるやうになつて、自分も然うだし兄も同じ事だと、思はずも興を催した。

『私達も事件が片づいた曉には直と食べるにも困りはしないかと考へてゐるのでございんす、本當に彼のお金……、貴郎が私達に儲けさしてやると仰有つて私が吃驚したことがあつた彼の九百萬圓のお金……、あのお金の事を考へると、本當に可笑しいくらゐでございんす、有つて〳〵苦しい思ひをする！こんな妙なことはありやしません、私は心持が惡いから、此度の事が顯れか〳〵つた時、私共の有つてる何もかも殘らず銀行の借方へ入れて了ひましたが、其時は大變に、氣がサバ〳〵としたのでございんす、其中には伯母から遺産に貰つた三十萬圓も入つてゐたのでございんすが、夫れだけは本當の私達のお金ですから、入れなくつても宜いのかも知れませんが、貴郎にも御話した通り、自分が汗水垂らして拵へたお金でないと、何だか有難味が薄いやうで、亡くしても何とも思ひません、ねえ貴郎、御覽なさい、私は別に今心配らしく見えないでせう、私は今斯うやつて笑つてるんでございます！』

相良も急に元氣づいて、かつ子を押留めて、卓の上の書類を手に取り、而してそれを振廻しながら、

『結構！　宜しい、之れから又大金儲をやる！』

『又？　何して？』

『和女は僕は此ッきりで考案を棄てゝ往生して了ふと御思ひかね？　僕は此室へ入つてから六箇月、猶一遍行直さうと思つて度々徹夜までして調査をやつた、馬鹿な奴等、共同汽船會社とカルメル銀山と土耳其銀行と、此三つの事業の内で、只最初の一事業のみ豫算の利益を擧げたと云つて彼奴等は罪に觸れるなんて叫んでゐやがる、が事柄は全然異つてるわ、此後の二つが巧くゆくのがいかぬので損失に終つたのは、僕が彼地に居らぬ爲に親しく事業を見ることが出來なかつたからなのだ、之から我輩

が彼地へ行つて、留まつて行りさへすれば、巧くゆくに相違ない、マア和女も見てゐて頂戴……。』

十五

此場合此樣なことで長い話をして居ても駄目だから、かつ子は賴むやうにして話を續けるのを押留めたが、庄兵衞は委細構はず、又起上つて、其短い脚を一杯に突張つて、鋭い聲で叫ぶやうに語り續けた、

『計算は最早チヤンと作らへてある、ソラ此を御覽なさい、カルメル銀山と土耳其銀行なんぞは眞の子供騙しみたやうな事業だ、我輩が主として計畫すべき事業は極東の鐵道大幹線の敷設、小亞細亞から彼の邊を殘らず征服して了ふ、奈翁が劍を以てしてだに成遂げなかつたとこを、我輩は黃金と鍬を以て成し遂げる……、此有利の業を看す〳〵棄去るは忍びんではないかかつ子さん、奈翁はエルバ島から歸つてきて再擧を圖つた、我輩に於ても亦一ト度出だゝ容を顯はせば、巴里の金は立どころに集まつて、我輩に跟いてくるに相違ない、再びウオータルローを語る憂へなしと我輩は斷言する、何となれば、我輩の新規の畫策は一厘一毛絕對に算盤勘定に基いてるから、外れッこは無い理由だ……、宜いかかつ子さん、此度は必ず郡代を破らずには置かぬよ、資金は總體で四億あればいゝ、五億あれば猶ほ結構、五億あれば世界は我掌裡だ、かつ子さん、勝算歷々は請合ですよ！』

かつ子は依然默らせやうと、此度は幾と相良の兩手を抑へて、自分の體軀を相良の方へ押つけた、

『最早御廢しなさい、仰有いますな、其樣な事を仰有ると、私は怖くつてなりません！』

怖い恐ろしい！　と云ひは云つたが、かつ子は今何となく、我れに反して相良を喫賞する心持が生てならない、此何一つない情ない獄房、人間社會から遠く隔離された監禁室に、かつ子は何だか橫溢する一個の動力があるやうな氣がしてならぬ、活々した生氣が漲つてゐる氣がしてならぬ、光明ある前途が、此剛情我慢精悍有爲の人を迎へてゐるやうな氣がしてならぬ。

がかつ子は無理に心に憤怒を發したいと、種々と猛つてみたが、憤怒は如何しても出て來ない、自分の今迄のさん〳〵な失策を考へて、嫌つて心に叱つて見るが、叱る側から恕する心が出て來て邪魔をする、自分は此人が原因になつて終生の恨事を招いたのだから、其者は飽までも忌避する積りではなかつたか、如何なる罰でも受けさしてやりたいと、明暮祈つてはをらなんだか、憎い恨めしいと思つてゐた男其人に、今何故自分の心は和らいてゆくだらう、今又更に其人に何となく引つけられ屈服して行くといふ、抑も自然歟必要歟、女心の淺墓に基きもするだらう、苦勞した弱い心に、禁め難い情も出るのだらう、が然し其人を尊敬する念慮は更に無いのに、愛情を有つてゆくといふ、之れ男女相愛の自然の情か、不思議なのは戀でございます。

かつ子は己が兩の手に相良の兩の手を確乎と握つて居ながら、口には反對な言を云つてゐる、

『最早これで終焉でござんす、最早これで御別れでござんす、相良さん、貴郎御心を靜にして少し御休みなさることは出來ませんか？』

相良が背伸びをして、年齡には少し不似合な房々したかつ子の前髪へ口唇を持つてゆくのを、かつ子は拒みもせず其まゝさせて、男の體軀を抱くやうにかゝへながら、聲に斷然たる決心と、深い哀みの調子を有つて、而して言葉に意味ありげな趣を含ませて言放つた、

『相良さん、もう、もうこれで御別れ、一生の御別れでござんす、私は御別れ仕舞に貴郎に御目にかゝれて、こんな、こんな嬉しい事はございません、これで御互に心持を好くして、御別れが出來るといふものでござんす、左樣なら、御機嫌宜しう！』

かつ子出て行きかけて振返つて見ると、相良は果敢ない訣別に酷く心を動かされてか、卓の側へ茫然と、立つたまゝでをりますが、聽て無意識的に動いた手は、先刻からのヤツサモツサで取散らされて了つた卓の上の書類へ觸つて、それを仕末してをります、代金三錢の薔薇束はハヤだいなしになつたので、相良は花瓣を幾つか千切つて、頁の間へ挾込んで、而して殘りは棄てゝ了つた。

十六

夫から三月經つて十二月の中旬、漸くの事で萬國銀行事件は公判に上ることになつて、五回ほど公判廷が開かれたが、世間の騷は中々恐ろしく、新聞紙は種々と書立てる、殊に公判の延引になつてゐたことに就いて彼是れ種々な風説を掲げました、檢事の告訴狀に就いては世間から大分の注目を惹いたが、此告訴狀は餘程事細かに事件の成行を書立て、嚴密な論理に由つて毫も假借なく罪を斷じてゐる、裁判は五回迄も連續して開かれたが、それは表向の手續で、實は判決の初からチヤンと決めてあることは、諸人が承知してをることで、全く然うかと思はれるのは、濱野敏之に全く犯意の無いことは明瞭であるに係はらず、又相良庄兵衛が正々堂々の態度でもつて五日間見事な辯明をいたしたに拘はらず、罪は遂に宣告せられて、兩被告人は五年の懲役罰金三千圓といふ重い判決を下されたので判ります、尤も、兩人共判決の一ヶ月前から保證金を差出して、保釋の身になつてをつた、保釋の身ならば更に控訴の手續をして二十四時間内に國内を去れば罪は免れる途がある、そこで無論兩人共、其手續をばいたしました、又彼の大木も、監獄に弟などを有つてるのは甚だ面白くないことだし、事そこの機會を以て厄介拂に外國へ退去させるのが好都合と、内々樂屋で其取計をいたしたのでございます。

相良は遂に法の如く退去して、其日の夜汽車で隣國なる白耳義へ落ちて參る、警察は國境まで監守してゆくといふ始末、敏之も其當日、羅馬へと發足しました。

更に三月經つた四月の初旬、かつ子は兄の居る羅馬へ行く筈にしてあるのが、何や彼や夫から夫へと用が湧いて來て、未だ依然巴里に留まつて居りましたが、家は依然織戸公爵夫人の持家の小さな一間、尤も此頃夫人の家には賣家の札が貼つてございます、もう用も大概片付いたから、何時でも立てることになつてるが、固より懷中に一文の餘裕も無い、さりとて借財は殘らず落着をつけて了つたから、其方は氣輕であるが、そこで彌〻明日立つといふことになりましたが、敏之は羅馬で纔と小さな技師の職に有ついて、何か此か行つてをります、かつ子が來ても語學の教師の口なら幾らでも有ると書いて寄越したので、かつ子も其積りで出かけやうといふのでございます、之から兩人は又悉皆新しい生活を行り始めるので、新しい希望があるとなると、兩人共何だか又勢ひがついて參つたのでございます。

さて彌〻明日立つとなつて、今日は巴里で暮す最終の日である其朝、かつ子は起ると匆々、此土地を離れる前に一遍幸吉の模樣を探らうと考へた、其後幸吉の行方はトンと判らない、八方への手分け搜索も全然水泡に歸してゐるが、かつ子はおせんとの約束を思出して、おせんは屹度何かしら知つてるに相違ないから、先日の言葉に從つて四時頃に皆崎の家へ行つてみやうと、支度迄したがイヤ〳〵、濟んで了つたことに氣を費つても仕樣が無いと、最初は止めにかゝつたが、又考へ直して、どうも何だか氣にかゝる、是非消息を聞いて行きたい、有つた小兒が死んだのは仕方が無いが、せめて行きがけに其墓へ一本の線香でも手向けてゆくのが順當、さうだ其積りで一寸行つて來やうと、四時の時計を相圖にして、笛田町へと出懸ました。

上り框の戸は二枚とも開放しになつてゐる、眞黑な臺所には湯の盛に煮る音がしてゐる、其臺所に接した小さな一ト間の、平生皆崎の坐るところに、おせん婆さん坐り込んで、例の皮の古鞄から書類の束にしたのを出したり入れたり、其邊中を取散らして、何か頻と調べてをります。

入つて來たかつ子を見て、

『オヤ、何誰かと思つたら奥樣いらつしやいまし、貴女まあ飛んだところへ入來しつた、眞次さんが今日明日といふ難かしい容態になつてるんでございますよ、それで弟思ひの間齋さんは、モウ〳〵狂人のやうになつて、寢る目も寢ず食べるものも食べずに大心配、今も御醫師樣を招んで來るといつて出て行つたのでムいます……、だもんですから全然もう手が回はらず、此一週間職業の方は打棄り放しで、御覽の通り私が、斯うやつて間齋さんの代りを行つてるんでござんす、だが宜鹽梅に私は今しがた大變に好い仕事を仕ました、本當に旨い拾物、間齋さんの氣が少しでも落着いたら、些とは哀しい事の埋合はせにもならうかと、喜んでるところなんでございます。

十七

成程飛んでもない所へ出會した、まだ夫ばかりではない、かつ子は幸吉の事で此家へ來たのだが、其肝心の幸吉の事を、悉皆忘れる事が出來た、といふのは他でもない、おせんが今古鞄から取出した書類の内に、萬國銀行の株券があつたので、かつ子はギョッとして、其方へ氣を奪られたのでございます、おせんは圖に乘つて喋りつゞけた、

『それはアノ他でもありません、此を御覽なさい、此丈けを私は二百五十圓で買ひ取つたのでございます、五千圓がものは確にあるそれを一枚二錢ばで買取つたんでございますから、なんと廉いもんぢやございませんか、二錢！　一枚三千圓した株券が大まい二錢！　本當に紙代にも足りやしません、百目幾許の値段でございまさあ、廉いが之が又貴女、いゝ御鳥目になるのだから、本當に不思議でございませう、世間に廢物はございませんねエ、之を貴女破産人などの資産の内に、名前丈けに入れて置く爲に二十錢以上出して買ふ人がございますのですから、本當に此商賣は罷められませんよ、萬國株は此う云つた埋草には昨今大層受けが宜く、立派な飾物になるのでございます、本當に私は多幸でした、萬國銀行が倒れかゝつてからといふものは其邊中の溝を嗅回つて、そこに空ざ〳〵轉つてる此樣な代物を發見けだしては、モノにしてゐるのでございますが、商賣といふことを知らない愚な人達は、其邊に氣がつかず、打ちやらかして斯うやつて、私に取らしてくれるのです、何豈貴女、穢いもんぢやありやしません、洗へば何かしらの役に立ちますアハ、、、。』

隣に在る一室の戸も矢張開放しになつてゐたが、此の時其方から、低いが調子を張つた人聲が聞えた、おせんは氣が付いて、

『オー眞次さん、總とこさで口が利ける、今朝から全然口が利けないで、口を利かうッて苦んでばかりゐたが……、ア、御湯が欲しいのかしらん、さうだ重湯を飲ませなけりやならなかつた……、一寸とかつ子の奥樣、貴女其處にお在なら、濟みませんが病人が何の用があるか訊いてみて下さいませんか？』

おせんは臺所の方へ行つて了つたが、かつ子は憐憫の情が出て堪らないから、室の中へ入つてみた、眞次の室は全裸の伽藍洞だが、四月の清らかな日光は十分に映込んで、陰氣にも見えません、粗末な卓の上には、種々の書いたものや綴ぢたものが積んであつたり取散かしてあるが、此は眞次が十年以來辛苦研鑽の巣窟でございます、此他には藁製の椅子二つと板製の棚の上に雜書が幾冊、夫ッきりでございます、で眞次は、幅の至つて狹い鐵製の寢臺の上に、赤いフランネルの短い寢衣みたやうなものを着て、三つの枕に支へられて、平坐つてをります、そして何言か話す、話す、止度無しに喋つてをります、此喋ることは肺病患者が死期に迫ると屹度行るのださうでございますが、夢中で取とま

らない言を云ふかと思ふと、確乎したことも云つて、長い卷縮れた髪の懸つた痩せた顏に、瞳の擴張した眼容は、空に向つて何事か問うてゐる容に見えました。

かつ子の姿が目につくや否や、眞次は未だ一遍も逢つたことが無いのに識つてるかのやうに言葉を懸けて、

『オヤ奥樣、貴女でしたか、……今貴女の姿が見えたから、一生懸命になつてお呼び申してをつたところです、もつと此方へ寄つて下さい、もつと側へ、小さい聲でお話をするから……。』

かつ子は何だか薄氣味が惡くつて堪らない、が仕方が無いから云ふがまに〳〵、寢臺の直ぐ側の椅子へ腰を懸けた。

『私や些とも知らなかつた、今では知つとるが、兄は種々〳〵證書や株や書類を賣買しとるといふことで、其事で兄の室で人が泣いてるのを、私や始終聞いてをつたです……、何といふ兄でござんせう、私や考へる度に、燒鏝を胸へ突刺されるやう、始終チユウ〳〵焚かれてゐるやうな心持がしました です、實に醜極まるのは金錢、憐れなる人間は、情無い哉金錢の爲に間斷なく難澁してをる……私が死んだら、兄は待兼ねて大切の私の文書類を賣るでせう、私はそれは是非止めて貰ひたい、是非然うして貰ひたくない……。』

眞次の聲は益々激して、段々高くなつてきた。

十八

一たん激した眞次の聲は、今度は物を賴むやうな聲音になつた、

『さうだ、奥さん、其卓の上を見て下さい、種々〳〵の書類が載つてをりませう、取つて頂戴、一緒に纏めて結へておくから、貴女此書類を持つてッて下さいませんか、悉皆持つてッて下さらんか、私や貴女が來て下されば宜いと、大きな聲で呼んでたのです、待つてたのです、私の此書類が亡くなりでもしたら、今迄苦心研鑽をしたことも、攻究を重ねたことも、皆水泡に歸して了ふのです、何卒御願ひだ、此を御渡ししますから、何卒持つて歸つて頂戴……。』

突然斯んな事を言出されたのだから、かつ子は承知仕兼ねて躊躇つてると、眞次は兩手を合せて拜むやうにして、

『後生です、ねエ奥樣、一寸私に見せて下さい、死ぬ前に一遍悉皆揃つてるかどうかを見て安心して置きたいから……、兄が居ると小言ばかり云つて面倒だが、今恰度居ないから其間に疾く見せて頂戴、ねエ奥樣、後生ですから……。』

仕方がない、危篤の病人が手を合はせて賴むのを、聽かぬのも可憫想と、かつ子は聽いてやりながら、

『此んな事をなすッちやア惡うござんすよ、御兄さんに發見つたら夫こそ大變に叱られます、貴君の御身體に惡いのでござんすから。』

『惡い？　イヤ宜ござんす、構ひません、嗟矣これで些と安心した、今迄幾晩終夜かゝつて研究した結果、未來の人間社會を改造する方策は考へ出した積りです、最早何もかも豫言することが出來る、私には解決が出來たです、萬事萬物正義と幸福より他にはない、大概なことはボッ〳〵と、此書に書いて置いたが、悉皆纒めて修正して、一冊の書にして置けなかつたのは、私如何にも殘念だ、だが奥樣、今云ふ通り、ボッ〳〵書いておいた控や覺を、此に悉皆判るやうにして揃へて置いたから、貴女これを此儘無くさぬやうに大切にして、よく預かつて置いて下さい、而して他日此を文飾編纂して、一冊の書にして、廣く世間へ出すことが出來ませば、それは僕の本望です。』

眞次は痛こけた長い手を出して、書類を引寄せて、さも娯しさうに大切さうに一々繙いて見る、其眼を見ると、死期に迫つてる爲か疾や既にドロンと据わつてゐるが、其内にも未だ輝いた焔の色が窺はれてをります、やがて彼は又語り出したが、其聲は嗄れて物淋しく、宛然卷かない時計の搖鐘が重量と惰力で仕方なく動いて、今にも止まりさうに聞取れます。

『ア、、私には見える、手に取るやうに見える、將來の正義と幸福の世界が現然と見えてゐる、人間各自自由に、自在に、又義務と信じて愉快に働らいてゐる、國家といふものは一の大きな協同的社會に過ぎぬ……。』

とこれから眞次は滔々哲學的理想の社會論を述べ立てゝ、死期の目前に迫れるを知らざるものゝ如く、段々意氣亢進した容子であつたが、其反動で身體が弱つたと見えて、此度は急に聲に力が無く靜になり、宛然離れた遠くで微に物を云ふやうに聞えて、刻一刻に絶滅つてくるやう、彼自身が理想に描いてゐる未來土へ近づいて、消て亡くなるやうに見えました。

氣息奄々たる眞次は猶も書類に就いて一々説明し、自分が懷抱する哲學的社會論を、かつ子に話して聽かせました、之は難かしくなりますから此には態と略しますが（譯者云、原作者はこゝで大に自己の社會論を述べ立てゝ本著の歸結としてをります）此時眞次の眼には、宛然世界が見窄しい此一室の裡に現はれてゐるかのやう、自分の死なんぞといふことは、頭腦の裡に入れてない、迚も自分の生きてる内に理想の幸福世界を見ることは出來ぬのだから、身は如何なつても厭はぬ、自分は他までも其爲に勤めて、人道の爲め社會の爲め、我生を賭しても止まぬと、斯ういふ心でゐるのでございます。

眞次は今其手を書類へ當てゝ、いろ〳〵に仕やうと思ふが、手は疾や既に思ふやうに働かない、眼も段々に衰へて、視力も薄くなつて來た、それでも口には未だ依然、社會説をクド〳〵と云つてをるのでございます。

眼の色も遂に變つてきた、喘ぎ〳〵洩す最後の言句は、最早能くは聽取れない、やがて頭部はガクリと落ちた、顏には微笑を浮べたまゝ、眞次は遂に此世を去つて了ひました。

十九

現在目の前に此光景に接したかつ子は、氣の毒で可憫想で悲慘で堪らない、茫然としてゐると、此時何だか後方から、恐ろしい嵐が吹込んでくるやうな驅がした。

其は間齋が入つて來た音、醫師をも連れず、一人セイ〳〵呼吸を切りながら、大口小言でやつて來た、おせんは間齋に、眞次に藥を飲ませやうと思つたところ鐵瓶を引くり返して了つたので未だ與らぬと辯解をしてゐる內に、間齋弟

の方を見やると、可愛い小兒は——間齋は眞次の事を始終然う云つてをります——口を開いたまゝ眼を据ゑたまゝ、グタリと仰向になつたきりでゐるので、疾くもそれと悟つた間齋、殺されかゝつた獸が吼え騷ぐやうな慟哭の聲を放つて、無二無三に遺骸へ飛付いて之を其大きな兩腕で抱上げて、息を入れやうと試みたが、最早どうも仕方が無い、嗚呼、金錢に飽くことを知らぬ此恐ろしい皆崎、十錢二十錢の爲にも人を殺すのを屁とも思はぬ間齋、人の生血を吸ひ肉をくらつてばかりゐる皆崎間齋は、今愁傷に心亂れて、吼立つてゐるのでございます。

絕望に沈んだ彼は、軈て寢臺の上に取散された弟の研究書類を取集めて、ア、弟は此書類の爲に殺されたのか、忌々しい腹が立つと、むんずと書類を手に掴んで、一枚々々ビリ〳〵に、引裂き引破つて了ひました。

驚いたのはかつ子、呆氣に取られて了ふと共に、今は間齋が氣の毒なやう、其人物や何かの事は、悉皆と忘れて了つた、間齋の悲鳴にかつ子は心を冷したが、此同じ悲鳴の聲は、かつ子今日が初めてでない、同じ聲は何處かで聞いた、人間の最も憂愁い叫聲は、一度ならず以前にも聞いた、ブル〳〵と身を顫はして想起すのは增嶋の死んだ時！　夫や父の非業な死態に、其妻や子が嘆いた時だつた、其悲鳴の叫聲は未だに耳に殘つてゐるに、今又同じ悲鳴を聞とは！

此場合、直ぐと立去るにも去られぬので、かつ子少しの間居殘つて、一つ二つ手傳つて、遂に此室

を立出でゝ、次の間へ來ておせんと二人きりになつたが、此時遽てゝ想出したは、今日自分が來た用向の、幸吉の模樣を訊ねる爲であつたこと、それを混雜で忘れてゐた、これからおせんに其事を訊ねると、おせんは、幸吉は今はもう何國の果へ行つた了つたか、皆くれ行方は判らない、此三月越自分は巴里中駈づり廻つて探してみたが手懸りさへもないのである、最早自分は諦めた、どうせ壁の上で死なぬ幸吉、死刑臺へ乘る代物だらうと、斯ういふ返事でございます、かつ子は只默つて、凍りついたやうになつて聽く許り、ア、最早どうも仕方が無い、本當におせんの云ふ通りだ、小さな狼を放したやうなもの、毒を含む其牙で無暗に人に嚙付いて、遺傳の害毒を流して歩行く、爭はれぬもの恐ろしいものと、かつ子嘆息をするばかり。

かつ子は戸外へ出て、上野町のところへくると、急に空氣の和かなのが面を打つ、思はずも好い心持になりました、時計を見ると五時、淸く澄渡つた空を西の方へ太陽は眠りかゝつて、大通の軒に連つてる高い招牌を黃金色の光で輝かしてをります、一陽來復の此の時季、身も心も爽かに、新しくなつたやうにかつ子は感じながら、セイ〳〵と呼吸を出入すると、心地は益〻好く、身も幸福なやうになつてきて、何だか前途に光明があるやうに思はれた。

これからかつ子歩行きながら、過越方や前途の事を考へて、或は悔い或は悟り、復生れ變つて、異つた土地で新しい生涯に入るかと思つて、何となく嬉しい氣がして、遂に山屋町の家へ歸つたが、翌日いよ〳〵出立をいたすのだから、荷造に取かゝる、大概片付けて、家の中もガラ明きになつて、例の繪圖室へ入つて、壁に打付けてある東歐の景色や其他の圖を剝しにかゝつたが、此時又も默想に沈んで、ア、巴里に居たのが前後五年、其五年の毎日々々、碌に落着いた日とては無く、夢みたやうに過しましたが、これから行く羅馬も懷かしい、日外住んだ時の事は今考へても忘れない、之から再び其地へ行つて、兄と共に返り咲かうなると疾く行きたい！

兄が圖畫類は大切にして荷物と一緒に持つて來てくれと云つて寄越したので、かつ子は堅固に卷いて、叮嚀に荷造の內へ藏めて、次の日遂に羅馬へと出立した

相良庄兵衞は如何したかといふと、白耳義から和蘭へ移つて、其處で又何處を如何したか、相變らず大仕掛で開拓事業を創めたといふことだが、それから如何なつたか判りません、濱野兄妹の前途は有望か失敗か、其等の成行は別の偏に讓りまして、さて此編はこれで讀切といたします。

複製不許

大正四年十二月三十日印刷
大正五年一月三日發行

譯者　飯田旗軒
發行者　大橋新太郎　東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　高橋季吉　東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地
發行所　博文館　東京市日本橋區本町三丁目八番地　（振替口座　東京二四〇番）

金壹圓　付與
（定價金壹圓七拾錢）

ぞら原著

金

Suffice it to say of this book, one of Zola's masterpieces, that never

"Suffice it to say of this book, one of Zola's masterpieces, that never has his brillant pen been used with such realistic lifelike force ..... . The figure of Saccard is a terrible, fascinating creation. His love of money, his love of women, his fixed hatred of the Jews become more real than reality itself."

..... Vanity Fair.

現下喫緊の要書

京都帝國大學法科大學助教授 法學士 河田嗣郎君著

土地經濟論

大判八百六十餘頁
特價壹圓五拾錢
小包料十二錢

男鹿鳴く此の山里の住居より電車自働車縱橫に走せ違ふ都市雜沓の生活に至るまで、人の生存は土地を離れて考ふべからず、從つて土地に關する問題は諸多經濟問題中至要至切のものたらざるを得ざるなり。特に近時農村に於ける諸般の事情と都市發展に伴ふ種々の關係とが紛糾錯綜を極むるに至りてよりは土地に對する人の注意は愈々以つて深厚なるを致しつゝあり、曰く地代地價の騰貴、土地投機の流行、曰く自然增價税の實施、曰く住居問題の切迫曰く都市政策の必要、凡て之れ方今焦眉の緊要問題にして、悉く收めて本書に在り。

クリーブランド氏著 商學士 海老原竹之助君譯

資金と其運用

大判二百四十餘頁
特價七十五錢
郵税十錢

資金とは何ぞや、如何に資金を調達すべき、又如何に資金を運用すべきかの問題は資本主義の現代に於て苟も事業經營の任に膺らんとする者の寸時も忘るべからざる所なり。本書は即ち「クリーブランド」先生の多年研鑽の結果に成れる「資金及其運用」を抄譯し且つ譯者が所々に註釋を加へ、以上の問題に對する解決を與へんとするものなり、譯文簡明、註釋亦原著の足らざる所を補つて餘りあり、而も事業經營の任に當らんとするものは勿論學生の書庫一本無からざる可らず。

博文館發行

相場は致富の近道

株式投機奥傳

全一冊
嘉藤運之助君著
正價金九拾錢
郵税六錢

往年鈴久が一擧三百萬圓を儲けたのは株式である近くは大阪の一青年が僅か五十圓の資本で三十萬圓を贏ち得たのも株式である而も遣方が最も肝心である。

米相場奥傳

全一冊
河野市次郎君著
正價金五拾錢
郵税四錢

越後の川佐が半年で二百萬圓儲けたのは近年の事である十五圓臺の米が此先拾八圓乃至二十圓の相場が出るとすれば百萬や二百萬の成功者はザラに出來る。

東京 博文館 本町

東亞同文會長鍋島侯爵閣下題字
外務大臣加藤高明閣下序文

東亞同文會調査編纂部編

山東及膠州灣

邦人活躍の新天地

本書は、山東省の一般事情・主要都市・重要物産・貿易・交通行政・鑛山・工業・金融等に關し、的確詳密なる記述をなし且又獨逸の膠州灣に於ける諸施設・山東鐵道・坊子淄川鑛山經營等に關し餘蘊なき説明をなせり。

其材料は、悉くこれを東亞同文會調査編纂部に藏する幾多の珍籍と、數年間に亙りて實地踏査せる所の報告に採り、世の際物的著述と同じからず、以て戰後の山東經營の好指針たるべきを信ず。

菊判洋裝特製
紙數六〇〇頁山東省
詳圖外寫眞版數多

▲正價金貳圓△郵稅十四錢

東京博文館

329
251

終